佐久市

TAKINOSAWA　TERAKUBO　KOSHINZUKA
滝ノ沢遺跡　寺久保遺跡　庚申塚

DAIGASAKA　KAMITAKI NAKATAKI SHIMOTAKI
台ヶ坂遺跡　上滝・中滝・下滝遺跡

WADA　WADAICHIGOZUKA　TAKI
和田遺跡　和田１号塚　滝遺跡

YAURA　TAJIMAZUKA　MIZUBORIZUKA
家浦遺跡　田島塚　水堀塚

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書９

―佐久市内９―

２０１９．９

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

和田遺跡 全景（西斜め上空から）

滝遺跡（左） 和田１号塚 全景（北斜め上空から）

例　言

1　本書は、長野県佐久市に所在する以下の11遺跡にかかわる発掘調査報告書である。

滝ノ沢遺跡	長野県佐久市臼田字滝ノ沢 3951 ほか
寺久保遺跡	長野県佐久市臼田字寺久保 3567 ほか
庚申塚	長野県佐久市臼田字庚申 3520-2 ほか
台ヶ坂遺跡	長野県佐久市臼田 2546-2 ほか
上滝・中滝・下滝遺跡	長野県佐久市湯原 1184-1 ほか
和田遺跡	長野県佐久市湯原 946 ほか
和田1号塚	長野県佐久市湯原 940-5 ほか
滝遺跡	長野県佐久市湯原 961-4 ほか
家浦遺跡	長野県佐久市湯原 862 ほか
田鳥塚	長野県佐久市臼田字北川 62-イほか
水堀塚	長野県佐久市臼田字小田切 911-1 ほか

2　発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。

3　調査の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』25～33ほかで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。

5　本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は日本測地系を用いている。

6　発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは御指導を得た（敬称略）。

○業務委託

火山灰分析　パリノ・サーヴェイ株式会社（2010年度：和田遺跡、和田1号塚）

樹種同定　パリノ・サーヴェイ株式会社（2010年度：上滝・中滝・下滝遺跡）

年代測定　株式会社加速器分析研究所

（2010年度：上滝・中滝・下滝遺跡、2011年度：和田遺跡、和田1号塚、滝遺跡）

遺物実測図トレース　有限会社アルケーリサーチ

（2018年度：寺久保遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡、和田1号塚、滝遺跡）

遺物写真撮影：信毎書籍印刷株式会社

（2018年度：寺久保遺跡、台ヶ坂遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡、和田1号塚、滝遺跡、家浦遺跡、田鳥塚、水堀塚）

○調査指導

人骨・動物骨調査指導・鑑定　茂原信生　京都大学名誉教授
本郷一美　総合研究大学院大学准教授
櫻井秀雄　獨協医科大学技術職員
（2016年度：上滝・中滝・下滝遺跡、和田１号塚）

石材調査指導・鑑定　原山　智　信州大学教授（2012年度：庚申塚）

地質調査指導　寺尾真純　小海高等学校教諭（2008年度：田鳥塚）

7　発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関に御指導、御協力いただいた。氏名を記して感謝の意を表する（敬称略）。

冨沢一明　羽毛田卓也　佐久市教育委員会　佐久考古学会　長野県立歴史館

長野県遺跡調査指導委員会

（戸沢充則・会田　進・小野　昭・桐原　健・工楽善通・笹澤　浩・高橋龍三郎・丸山敞一郎）

長野県文化財保護審議会　史跡・考古資料部会

（会田　進・市澤英利・小野　昭・笹澤　浩・高橋龍三郎）

8　発掘作業・整理作業の担当者等は第１章第１節４項に記載した。

9　本書全体の編集は贄田明が行い、岡村秀雄が校閲し、平林彰が総括した。

執筆分担は下記のとおりである。

平林　彰　第１章

岡村秀雄　第２章　第12章

上田　真　第７章第３節２・第４節２（１）・第５節

若林　卓　第５章第２節３（３）（金属製品）
第７章第４節２（２）（金属製品）
第８章第３節３（４）（金属製品）
第11章第２節３（金属製品）・第３節３（金属製品）

綿田弘実　第４章第２節（遺物）
第５章第２節３（３）（縄文時代遺物）
第６章第２節（遺物）
第７章第２節２
第８章第２節４・第３節３（１）～（３）・第４節（２）
第９章第２節２（２）（縄文土器）・（３）
第11章第２節３（石器）・第３節３（石器）

藤原直人　上記以外

10　本書に添付したＤＶＤには、以下の内容を収録した。

自然科学分析報告書、遺物観察表。

凡　例

1　遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘作業で欠番にしたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。

2　遺物番号は、主に材質に基づく分類による遺物種ごと、図版ごとに付番してある。遺物番号は、本報告の本文・図表・写真に共通する。

3　本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。

（1）遺構実測図

竪穴建物跡、掘立柱建物跡　1：40、1：80　　土坑、被熱部　1：40

溝跡　1：40、1：80　　遺構内部施設・遺物微細　1：40

（2）遺物実測図

土器・土器拓影・陶磁器　1：3、1：4、1：6　　土製品　2：3、1：4

石鏃等小形石器・装身具　2：3　　石斧・磨石・敲石・凹石・砥石等　1：3

石皿　1：4　　金属製品　2：3、1：2

（3）遺物写真

原則として遺物実測図と概ね共通であるが、任意縮尺にしているものがある。

4　遺物の器種名については細分せず、長野県埋蔵文化財センターが発行した過去の報告書を参考にして一般的な名称を用いた。

5　遺物観察表の法量は、（　）が残存値、〈　〉が復元値、括弧なしが完存値を示している。

6　基本層序および遺構埋土の色調は、「新版　標準土色帖 2007 年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）」による。

7　実測図中のアミカケ等の凡例は以下のとおりである。これら以外の場合は図中に例示した。

（1）遺構図

被熱部・火床　焼土　炭化物・灰　カマド材

地山　柱痕跡　• 出土遺物

（2）遺物図

須恵器断面　古代施釉陶器断面　黒色処理　土器赤彩

• 繊維土器　石器摩耗痕・磨面　石器使用痕

目　次

口絵
例言
凡例
目次
挿図目次
挿表目次
写真目次

第１章　発掘調査の経過 …… 1～14
　第１節　調査に至る経過 …… 1～9
　　1　事業計画の概要 …… 1
　　2　分布・試掘調査と保護措置の調整 …… 1
　　3　行政手続の経過 …… 4
　　4　発掘作業と整理等作業の体制 …… 8
　第２節　発掘調査の経過 …… 9～14
　　1　発掘作業 …… 9
　　2　整理等作業 …… 12
　　3　普及啓発活動 …… 12
　　4　作業日誌抄録 …… 13

第２章　遺跡の位置と環境 …… 15～21
　第１節　地理的環境 …… 15
　第２節　歴史的環境 …… 15～21

第３章　発掘調査の方法 …… 22～27
　第１節　発掘作業 …… 22～26
　　1　遺跡名称と遺跡記号 …… 22
　　2　遺構名称と遺構記号 …… 22
　　3　調査グリッドの設定 …… 23
　　4　表土の掘削と遺構の検出 …… 23
　　5　遺構の発掘 …… 25
　　6　記録作成 …… 25
　　7　自然科学分析 …… 25
　第２節　整理等作業 …… 26～27
　　1　遺物の整理 …… 26
　　2　記録類の整理 …… 26
　　3　報告書作成と資料収納 …… 26

第４章　滝ノ沢遺跡 …… 28～32
第１節　遺跡の概観 …… 28
第２節　調査の概要 …… 28～32
第３節　小結 …… 32

第５章　寺久保遺跡　庚申塚 …… 33～41
第１節　遺跡の概観と調査の概要 …… 33
第２節　寺久保遺跡 …… 33～38
1　調査の概要と経過 …… 33
2　基本層序 …… 33
3　遺構と遺物 …… 37
(1)　遺構　(2)　遺構出土遺物　(3)　遺構外出土遺物
第３節　庚申塚 …… 38～40
1　調査の方法と経過 …… 38
2　塚の構造と出土遺物 …… 40
第４節　小結 …… 40

第６章　台ヶ坂遺跡 …… 42～44
第１節　遺跡の概観 …… 42
第２節　調査の概要 …… 42
第３節　小結 …… 42

第７章　上滝・中滝・下滝遺跡 …… 45～95
第１節　遺跡の概観と調査の概要 …… 45～54
1　遺跡の概観 …… 45
2　調査の概要と経過 …… 45
3　基本層序 …… 45
第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 55～60
1　遺構 …… 55
(1)　竪穴建物跡　(2)　土坑
2　遺物 …… 57
(1)　土器　(2)　石器・石製品
第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 60～62
1　遺構 …… 60
(1)　竪穴建物跡
2　遺物 …… 62
第４節　古代の遺構と遺物 …… 62～89
1　遺構 …… 62
(1)　竪穴建物跡　(2)　掘立柱建物跡　(3)　土坑　(4)　溝跡
(5)　焼土跡　(6)　性格不明遺構

2　遺物 …… 82
(1)　土器・土製品　(2)　金属製品
第5節　自然科学分析 …… 89
第6節　小結 …… 94～95

第8章　和田遺跡　和田1号塚 …… 96～117
第1節　遺跡の概観 …… 96
第2節　和田遺跡 …… 96～110
1　調査の概要と経過 …… 96
2　基本層序 …… 96
3　遺構 …… 100
(1)　竪穴遺物跡　(2)　土坑
4　遺物 …… 105
(1)　土器・陶磁器　(2)　石器・石製品
第3節　和田1号塚 …… 110～115
1　調査の方法と経過 …… 110
2　塚の構造と遺物の出土状況 …… 112
3　遺物 …… 112
(1)　土器・陶磁器　(2)　土製品　(3)　石製品　(4)　金属製品
第4節　自然科学分析 …… 115
第5節　小結 …… 115～117

第9章　滝遺跡 …… 118～127
第1節　遺跡の概観と調査の概要 …… 118
1　遺跡の概観 …… 118
2　調査の概要と経過 …… 118
3　基本層序 …… 118
第2節　遺構と遺物 …… 118～125
1　遺構 …… 118
(1)　竪穴建物跡　(2)　焼土跡　(3)　土坑
2　遺物 …… 124
(1)　遺構出土土器　(2)　遺構外出土土器　(3)　石器・石製品
第3節　自然科学分析 …… 125
第4節　小結 …… 125

第10章　家浦遺跡 …… 128～132
第1節　遺跡の概観 …… 128
第2節　調査の概要 …… 128～131
第3節　小結 …… 132

第 11 章　田島塚　水堀塚…… 133～145
第 1 節　遺跡の概観 …… 133
第 2 節　田島塚 …… 133～140
1　調査の方法と経過 …… 133
2　塚の構造と遺物の出土状況 …… 133
3　遺物 …… 139
第 3 節　水堀塚 …… 140～145
1　調査の方法と経過 …… 140
2　塚の構造と遺物の出土状況 …… 140
3　遺物 …… 145
第 4 節　小結 …… 145

第 12 章　総括…… 146

写真図版
抄録
奥付

挿図目次

第１図　中部横断自動車道と調査対象遺跡
第２図　中部横断自動車道と本書所収遺跡
第３図　周辺遺跡分布図（１）
第４図　周辺遺跡分布図（２）
第５図　周辺遺跡分布図（３）
第６図　調査グリッドの呼称
第７図　遺跡範囲・位置図
第８図　トレンチ・テストピット配置図
第９図　土層柱状図
第10図　出土遺物
第11図　遺跡範囲・位置図
第12図　トレンチ・調査区配置図
第13図　土層柱状図
第14図　ＳＢ01　遺構図
第15図　寺久保遺跡　ＳＢ01、遺構外出土遺物
第16図　礫出土状況図
第17図　平面・断面図
第18図　遺跡範囲・位置図
第19図　トレンチ配置図・土層柱状図
第20図　遺跡範囲・位置図
第21図　トレンチ・調査区配置図
第22図　土層柱状図
第23図　遺構分布全体図
第24図　遺構分布図（１）
第25図　遺構分布図（２）
第26図　遺構分布図（３）
第27図　遺構分布図（４）
第28図　遺構分布図（５）
第29図　ＳＢ203・401・211　遺構図
第30図　ＳＫ20　遺構図
第31図　ＳＢ01・204　遺構図
第32図　ＳＢ02　遺構図
第33図　ＳＢ03　遺構図
第34図　ＳＢ04・05　遺構図
第35図　ＳＢ06・07　遺構図
第36図　ＳＢ201・202　遺構図
第37図　ＳＢ207　遺構図
第38図　ＳＢ208・209・210　遺構図
第39図　ＳＢ402・403　遺構図
第40図　ＳＢ205・206　遺構図
第41図　ＳＴ01　遺構図
第42図　ＳＫ　遺構図（１）
第43図　ＳＫ　遺構図（２）
第44図　ＳＫ　遺構図（３）、ＳＦ01　遺構図
第45図　ＳＤ01　遺構図
第46図　ＳＤ02、ＳＸ201　遺構図
第47図　ＳＤ04　遺構図
第48図　出土遺物（１）
第49図　出土遺物（２）
第50図　出土遺物（３）
第51図　出土遺物（４）
第52図　出土遺物（５）
第53図　出土遺物（６）
第54図　出土遺物（７）
第55図　出土遺物（８）
第56図　出土遺物（９）
第57図　遺跡範囲・位置図
第58図　トレンチ・調査区配置図
第59図　土層柱状図
第60図　遺構全体図
第61図　ＳＢ01　遺構図
第62図　ＳＢ02　遺構図
第63図　ＳＢ03　遺構図
第64図　ＳＢ04　遺構図
第65図　ＳＢ05　遺構図
第66図　ＳＫ03～07　遺構図
第67図　出土遺物（１）
第68図　出土遺物（２）
第69図　出土遺物（３）
第70図　トレンチ・調査区配置図
第71図　断面図
第72図　出土遺物
第73図　遺跡範囲・位置図
第74図　遺構全体図
第75図　土層柱状図
第76図　ＳＢ01　遺構図

第77図　ＳＢ03－１・２　遺構図
第78図　ＳＢ04　遺構図
第79図　ＳＫ01・02　遺構図
第80図　出土遺物（１）
第81図　出土遺物（２）
第82図　遺跡範囲・位置図
第83図　トレンチ・調査区配置図
第84図　土層柱状図
第85図　出土遺物
第86図　遺跡範囲・位置図
第87図　田島塚　トレンチ・調査区配置図
第88図　田島塚　断面図
第89図　田島塚　礫出土状況図
第90図　田島塚　第２・３面　地形図
第91図　田島塚　出土遺物
第92図　水堀塚　調査前地形図
第93図　水堀塚　トレンチ・調査区配置図
第94図　水堀塚　断面図
第95図　水堀塚　第２・３面　地形図
第96図　水堀塚　出土遺物

挿表目次

第１表　土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第93・94条関係）
第２表　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）
第３表　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）
第４表　受委託契約等の経過
第５表　周辺遺跡一覧

写真目次

ＰＬ１　滝ノ沢遺跡　寺久保遺跡　庚申塚　台ヶ坂遺跡　上滝・中滝・下滝遺跡
ＰＬ２　上滝・中滝・下滝遺跡
ＰＬ３　上滝・中滝・下滝遺跡
ＰＬ４　上滝・中滝・下滝遺跡
ＰＬ５　上滝・中滝・下滝遺跡　和田遺跡
ＰＬ６　和田遺跡　和田１号塚　滝遺跡　家浦遺跡　田島塚　水堀塚
ＰＬ７　滝ノ沢遺跡　寺久保遺跡　上滝・中滝・下滝遺跡
ＰＬ８　上滝・中滝・下滝遺跡　和田遺跡
ＰＬ９　和田遺跡　和田１号塚　滝遺跡　家浦遺跡　田島塚　水堀塚
ＰＬ10　上滝・中滝・下滝遺跡　台ヶ坂遺跡　滝ノ沢遺跡　寺久保遺跡　滝遺跡　和田１号塚　和田遺跡　田島塚　水堀塚

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過

１　事業計画の概要

中部横断自動車道（以下「中部横断道」という。）は、静岡県清水市の新東名道新清水ジャンクション（以下「ＪＣＴ」という。）を起点に、山梨県甲斐市の双葉ＪＣＴと北杜市の長坂ＪＣＴの間で中央自動車道に合流し、長坂ＪＣＴより分岐北上したのち小諸市で上信越道佐久小諸ＪＣＴに連絡する、総延長約 132km の高規格幹線道路である。

この道路は、太平洋側と日本海側を結ぶ広域的な高速ネットワークを形成するとともに、佐久地域においては国道 141 号を補完して地域間交流や地域開発を促進させ、救急医療体制への支援や物流の効率化を図る目的で、1991（平成３）年に佐久小諸ＪＣＴと八千穂高原インターチェンジ（以下「ＩＣ」という。）間を基本計画路線として決定した。1998 年４月、日本道路公団に施工命令が下され、佐久小諸ＪＣＴと佐久南ＩＣ間の工事を進めてきたが、2003 年 12 月には、中部横断道佐久南ＩＣと八千穂高原ＩＣの延長 14.6km 区間について、国土交通省の新直轄方式による事業化が決定し、佐久臼田トンネルの掘削を皮切りに本体工事が本格化した。その後、本線脇 13 か所に調整池の設置、佐久臼田ＩＣと佐久穂ＩＣの設置等が追加され、2018 年４月 28 日に供用を開始した。

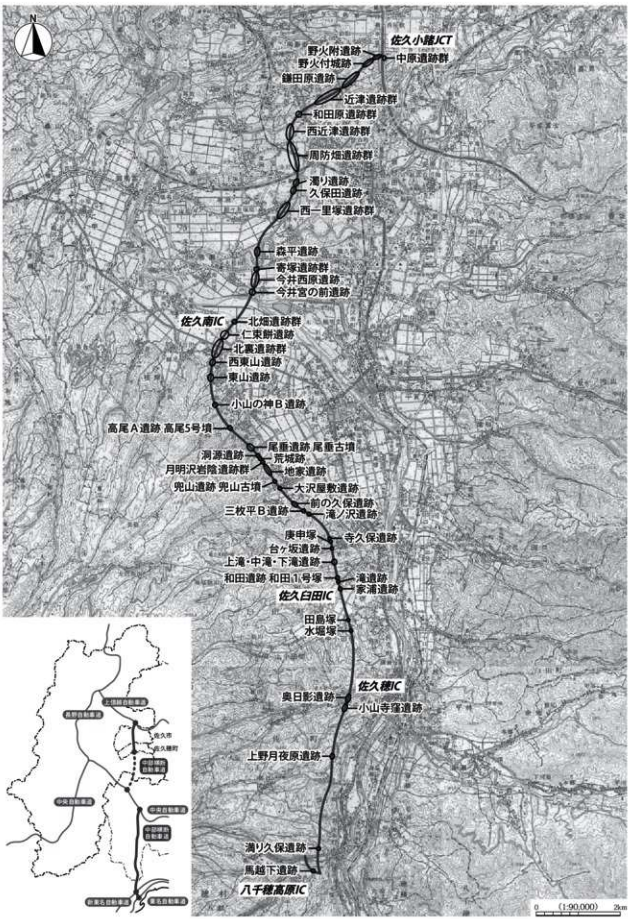
２　分布・試掘調査と保護措置の調整

基本計画路線決定を受けて、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）は、当該区間の南北予想ルートにあたる幅１ km に所在する埋蔵文化財包蔵地の存否等を確認するため、1994（平成６）年度に地元教育委員会の協力を得て踏査を実施した（県教委 1997）。その後、事業計画が進行し、佐久南ＩＣと八千穂高原ＩＣ間のルートがほぼ確定したことを受けて、1998～2000 年度に分布調査を実施し、保護措置を講ずべき埋蔵文化財包蔵地や試掘調査の対象とすべき箇所の選定を行った（県教委 2000・2003）。佐久南ＩＣ以南については、2004 年度に改めて対象地の現況調査を実施するとともに、2012 年度にかけて順次試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の範囲と内容の確認を行った（県教委 2007・2010・2013）。

本報告書にかかわる佐久市臼田地区の本線ルート上では、1998 年度の分布調査で寺久保遺跡、台ヶ坂遺跡、秋葉神社（未周知）、家浦遺跡の４か所を確認していたが、その後の踏査や試掘調査を経て、今回報告する 11 か所が保護対象となった。なお、庚申塚、和田１号塚、田島塚および水堀塚は、当初、いずれも「古墳」として登録していたが、本発掘調査の結果「塚」と名称を変更したものである（第２図）。

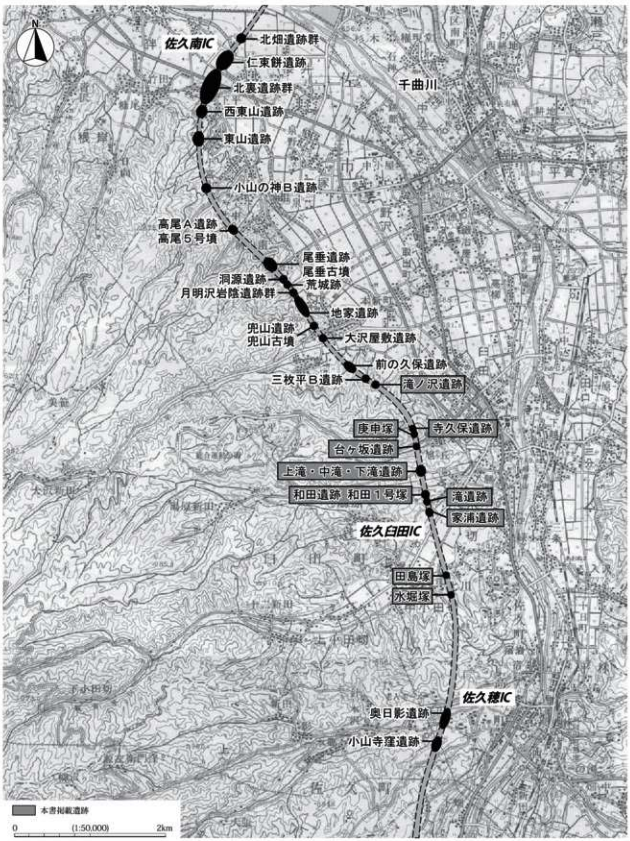
県教委は、佐久市教育委員会（以下「市教委」という。）や事業主体である国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）と調整会議を重ね、本線または付帯設備の工事等によって破壊される恐れのある埋蔵文化財包蔵地について、本発掘調査による記録保存を図ることを決定した。

また、今回の開発事業が広域の市町村にまたがり、かつ大規模であるため、佐久小諸ＪＣＴと佐久南ＩＣ間に引き続き、国土交通省関東地方整備局（以下「関東地整」という。）が県教委および一般財団法人長野県文化振興事業団（以下「事業団」という。）と、埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書を締結した上で、関東地整が事業団に本発掘調査を委託し、長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」とい



第１図　中部横断自動車道と調査対象遺跡

う。）が実施する旨の合意を得た。



第２図　中部横断自動車道と本書所収遺跡

3　行政手続の経過

本報告書掲載遺跡の発掘調査にかかわる行政手続については、第１表から第３表のとおりである。

第１表　土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 93・94 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2006．4．5	18 長国調第 14 号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	寺久保・台ヶ坂・和田・滝・家浦遺跡および和田１号墳での土木工事を通知
2006．6．8	18 教文第 18-33 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文セ	埋文セが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2008．4．1	20 長国調第 98 号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	田鳥古墳、水堀古墳での土木工事を通知
2008．4．1	20 教文第 8-280 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文セ	埋文セが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2012．7.23	24 長埋第 64 号	埋文セ	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘届	県教委	本線用地外に広がる台ヶ坂遺跡での駐車場造成に伴う土木工事を届出
2012．8.10	24 教文第 7-293 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	埋文セ	埋文に対して慎重工事を通知

第２－１表　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 92 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2007．6．1	19 長埋第 8-1 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	田鳥古墳確認調査
2007．6．5	19 教文第 4-1 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2007.10.16	19 長埋第 11-12 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	田鳥古墳確認調査 900㎡
2008．2.29	19 長埋第 8-10 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	田鳥古墳
2008．3.25	19 教文第 4-13 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008.10．7	20 長埋第 4-7 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	田鳥古墳 500㎡
2008．2.29	19 長埋第 8-11 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	水堀古墳
2008．3.25	19 教文第 4-14 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008.10．7	20 長埋第 4-8 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	水堀古墳 500㎡
2008．2.29	19 長埋第 8-14 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	家浦遺跡　確認調査
2008．3.25	19 教文第 4-16 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008．8.11	20 長埋第 4-3 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	家浦遺跡 10,620㎡
2008．2.29	19 長埋第 8-15 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	上滝・中滝・下滝遺跡　確認調査
2008．3.25	19 教文第 4-17 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008．7.25	20 長埋第 4-2 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	上滝・中滝・下滝遺跡 10,540㎡
2008．6.27	20 長埋第 1-3 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	台ヶ坂遺跡　確認調査

第２－２表　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2008. 6.30	20 教文第6-5 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008. 9. 3	20 長埋第4-5 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	台ヶ坂遺跡 6,040㎡
2010. 2. 1	21 長埋第1-7 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	上滝・下滝・中滝遺跡
2010. 2.16	21 教文第6-15 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010.11.17	22 長埋第4-2 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	上滝・中滝・下滝遺跡 6,100㎡
2010. 4.19	22 長埋第1-2 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	家浦遺跡
2010. 5.17	22 教文第6-3 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010.12. 8	22 長埋第4-4 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	家浦遺跡 5,600㎡
2010. 8.19	22 長埋第1-5 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	和田遺跡 和田１号墳
2010. 9.15	22 教文第6-9 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010.12. 2	22 長埋第4-5 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	和田遺跡 和田１号墳 2,960㎡
2011. 2.28	22 長埋第1-7 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	和田遺跡 和田１号墳
2011. 3.22	22 教文第6-14 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012. 2.16	23 長埋第6-8 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	和田遺跡 和田１号墳 10,000㎡
2011. 3. 1	22 長埋第1-9 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	滝遺跡
2011. 3.22	22 教文第6-15 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012. 2.16	23 長埋第6-4 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	滝遺跡 710㎡
2011. 6.14	23 長埋第3-3 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	滝ノ沢遺跡　確認調査
2011. 6.27	23 教文第6-5 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012. 2.16	23 長埋第6-10 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	滝ノ沢遺跡 確認調査
2012. 6.15	24 長埋第1-4 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	寺久保遺跡
2012. 6.28	24 教文第6-6 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.11.22	24 長埋第4-7 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	寺久保遺跡 10,000㎡
2012. 6.15	24 長埋第1-5 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	庚申古墳
2012. 6.28	24 教文第6-7 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.12.12	24 長埋第4-8 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	庚申古墳 200㎡
2013. 3.11	24 長埋第1-14 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	滝ノ沢遺跡

第２－３表　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 92 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2013. 3.26	24 教文第 6-20 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013.12.27	25 長埋第 6-10 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	滝ノ沢遺跡 7,790㎡
2013. 8.26	25 長埋第 1-7 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	寺久保遺跡
2013. 9. 4	25 教文第 6-10 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013.12.27	25 長埋第 4-16 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	寺久保遺跡 5,070㎡
2014. 5. 8	26 長埋第 14-5 号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	寺久保遺跡
2014. 5.23	26 教文第 6-5 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	終了報告提出を指示
2014. 7.22	26 長埋第 17-6 号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	寺久保遺跡 2,970㎡

第３－１表　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第 102・105・108 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2008. 8.11	20 長埋第 2-2 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	家浦遺跡 土器２点
2008. 8.22	20 教文第 26-68 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	家浦遺跡
2008. 9. 3	20 長埋第 2-4 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	台ヶ坂遺跡 土器・石器３点
2008. 9.18	20 教文第 26-75 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	台ヶ坂遺跡
2008.10. 7	20 長埋第 2-6 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	水堀古墳 土器・石器１箱ほか
2008.10.22	20 教文第 26-81 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	水堀古墳
2008.10. 7	20 長埋第 2-5 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	田島古墳 土器・石器１箱ほか
2008.10.22	20 教文第 26-82 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	田島古墳
2010.11.17	22 長埋第 2-2 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	上滝・中滝・下滝遺跡 土器・石器 35 点ほか
2010.12. 1	22 教文第 20-109 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	上滝・中滝・下滝遺跡
2010.12. 8	22 長埋第 2-4 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	家浦遺跡 土器１箱
2010.12.20	22 教文第 20-117 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	家浦遺跡
2010.12. 2	22 長埋第 2-5 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	和田遺跡 和田１号墳 土器・陶磁器１箱
2010.12.20	22 教文第 20-118 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	和田遺跡 和田１号墳
2011. 8.17	23 長埋第 4-4 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	滝遺跡 土器４箱・石器１箱
2011. 8.29	23 教文第 20-69 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	滝遺跡
2011. 9.30	23 長埋第 4-8 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	和田遺跡 和田１号墳 土器・石器 10 箱ほか
2011.10.11	23 教文第 20-87 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	和田遺跡 和田１号墳

第３－２表　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第 102・105・108 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2011.11.28	23 長理第 4-10 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	滝ノ沢遺跡 土器・石器１箱
2011.12. 7	23 教文第 20-109 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	滝ノ沢遺跡
2012.11.22	24 長理第 2-7 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	寺久保遺跡 土器・石器３箱ほか
2012.12.12	24 教文第 20-81 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	寺久保遺跡
2012.11.22	24 長理第 2-8 号	埋文セ	埋蔵物発見届	県教委	庚申古墳 土器・陶磁器１箱
2012.12.12	24 教文第 20-82 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文セ	庚申古墳

中部横断道の建設に伴う発掘調査は、複数の市町村にまたがる大規模な開発事業である。したがって、調査が複数年度にまたがるとともに調査経費も相当要することから、事業を円滑に推進するため、県教委は関東地整および事業団と協定書を締結することとした。なお、協定書は、発掘調査事業の進ちょくに伴って、2010 年３月、2016 年２月、2018 年４月、2019 年１月の都合４回変更を行っている[1]。その内容は次のとおりである。

事業団は、協定書の第７条第１項の規定により、年度ごとに関東地整と契約を締結し、年度末には第８条第２項の規定により、業務実績報告書を提出してきた。本報告書に掲載した遺跡にかかわる予算は第４表のとおりである。

第４表　受委託契約等の経過

年度	予算	遺跡	備考
2007	374,094,702 円	田島塚他 10 遺跡	発掘作業：45,300㎡
2008	346,738,405 円	田島塚他 13 遺跡	発掘作業 48,410㎡
2009	381,700,120 円	上滝・中滝・下滝遺跡他 18 遺跡	表土掘削作業 発掘作業 63,800㎡ 整理作業（佐久南ＩＣ以北）
2010	408,924,000 円	上滝・中滝・下滝遺跡他 17 遺跡	発掘作業 62,947㎡ 整理作業（佐久南ＩＣ以北）
2011	367,330,000 円	和田遺跡他 17 遺跡	発掘作業 25,688㎡ 整理作業（佐久南ＩＣ以北）
2012	327,803,000 円	寺久保遺跡他 17 遺跡	発掘作業 12,022㎡ 整理作業（佐久南ＩＣ以北）
2013	233,268,000 円	寺久保遺跡他 20 遺跡	発掘作業 33,870㎡ 整理作業（佐久南ＩＣ以北）
2014	175,530,000 円	寺久保遺跡他 20 遺跡	発掘作業 11,751㎡ 整理作業（佐久南ＩＣ以北）
2016	77,110,000 円	滝ノ沢遺跡他 30 遺跡	整理作業
2017	38,964,000 円	滝ノ沢遺跡他 30 遺跡	整理作業
2018	126,991,800 円 うち 51,977,000 円を 2019 年度に繰越	滝ノ沢遺跡他 30 遺跡	整理作業

1　協定書および協定締結の経過は埋文センター発掘調査報告 121 第１章に掲載した。

4　発掘作業と整理等作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2007 年度　事前調査（田島塚）

所　　長：仁科松男　副 所 長：根岸誠司　調査部長：平林　彰　担当課長：寺内隆夫

調査担当：櫻井秀雄

2008 年度　発掘作業（台ヶ坂遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、家浦遺跡、田島塚、水堀塚）

所　　長：仁科松男　副 所 長：丑山修一　調査部長：平林　彰　担当課長：寺内隆夫

調査担当：上田　真　（台ヶ坂遺跡および上滝・中滝・下滝遺跡）

若林　卓　（家浦遺跡）

櫻井秀雄　内堀　団　（田島塚・水堀塚）

作 業 員：植松和則　井上　清　柏木貞夫　熊谷大輔　黒沢俊男　佐藤　剛　秦　茂夫

秦　正信　日向武夫　山越常夫　柳沢茂夫　渡辺稔秋

2010 年度　発掘作業（上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡、和田１号塚、家浦遺跡）

所　　長：窪田久雄　副 所 長：阿部精一　調査部長：大竹憲昭　担当課長：岡村秀雄

調査担当：上田　真　廣瀬昭弘　藤原直人　鶴田典昭　清水梨代　市川隆之　（上滝・中滝・下滝遺跡）

藤原直人　清水梨代　（和田遺跡、和田１号塚、家浦遺跡）

作 業 員：井澤政子　植松和則　柏木貞夫　加藤紀子　郡司　治　鈴木春彦　鈴木佳明

中野幸吉　秦　茂夫　秦　正信　原　綾　原　廣子　平林明子　本田　智

山口茂弥　依田純子

2011 年度　発掘作業（滝ノ沢遺跡、和田遺跡、和田１号塚、滝遺跡）

所　　長：窪田久雄　副 所 長：阿部精一　調査部長：大竹憲昭　担当課長：岡村秀雄

調査担当：藤原直人　太田　潤　曳地隆元　（滝ノ沢遺跡）

黒岩　隆　内堀　団　（滝遺跡）

若林　卓　伊藤友久　宮村誠二　（和田遺跡、和田１号塚）

作 業 員：植松和則　柏木貞夫　木内正幸　黒沢俊男　佐藤明美　佐藤　剛　鈴木春彦

高橋弓子　中澤啓子　原　綾　原　廣子　平林明子　宮崎未枝子　山口茂弥

山越常夫　渡辺稔秋

2012 年度　発掘作業（寺久保遺跡、庚申塚）

所　　長：窪田久雄　副 所 長：会津敏男　調査部長：大竹憲昭　担当課長：岡村秀雄

調査担当：藤原直人　伊藤友久　栗林幸治　曳地隆元

作 業 員：川上淳子　緑川うめ子　鈴木佳明　熊谷大輔　山越常夫　高岡義敏　高岡清子

木内正幸

2013 年度　発掘作業（滝ノ沢遺跡、寺久保遺跡）

所　　長：窪田久雄　副 所 長：会津敏男　調査部長：大竹憲昭　担当課長：岡村秀雄

調査担当：若林　卓　伊藤友久　栗林幸治

作 業 員：川上淳子　木内正幸　鈴木佳明　高岡清子　高岡義敏　緑川うめ子　山越常夫

植松和則　熊谷大輔　日向武夫　宮崎未枝子　山口茂弥　渡辺稔秋　佐藤明美

黒沢俊男　高橋弓子　小倉栄子　横山道子

2014 年度　発掘作業（寺久保遺跡）

所　　長：窪田久雄　副 所 長：多城　哲　調査部長：大竹憲昭　担当課長：岡村秀雄
調査担当：藤原直人　上田　真　栗林幸治
作 業 員：植松和則　小倉栄子　川上淳子　熊谷大輔　佐藤明美　鈴木佳明　高岡清子
高岡義敏　日向武夫　緑川うめ子　宮崎未枝子　山口茂弥　渡辺稔秋

2015 年度　整理等作業（滝ノ沢遺跡他９遺跡）

所　　長：会津敏男　副 所 長：多城　哲　調査部長：平林　彰　担当課長：岡村秀雄
調査担当：若林　卓　上田　真　伊藤友久
作 業 員：島田由美　清水玲子　待井　聖　松本眞行　阿部高子　市川ちず子　猪俣万里子
柄澤登紀子　（整理作業）

2016 年度　整理等作業（滝ノ沢遺跡他９遺跡）

所　　長：会津敏男　副 所 長：竹内　誠　調査部長：平林　彰　担当課長：岡村秀雄
調査担当：若林　卓　上田　真　水澤教子　伊藤友久
作 業 員：赤川雅俊　伊藤由美　猪俣万里子　岩原英治　柄澤登紀子　窪田　順　小林秀樹
清水栄子　清水　潔　祖山克彦　高松美法　中島裕子　待井　聖　峯村知佳
柳原澄子

2017 年度　整理等作業（滝ノ沢遺跡他９遺跡）

所　　長：会津敏男　副 所 長：関崎修二　調査部長：平林　彰　担当課長：岡村秀雄
調査担当：若林　卓　水澤教子
作 業 員：赤川雅俊　荒井君江　岩原英治　窪田　順　祖山克彦　西村はるみ　平林昌子
堀内慎一　待井　聖　石田和子

2018 年度　整理等作業（滝ノ沢遺跡他９遺跡）

所　　長：会津敏男　副 所 長：関崎修二　調査部長：平林　彰　担当課長：岡村秀雄
調査担当：若林　卓　上田　真　藤原直人　贄田　明
作 業 員：赤川雅俊　荒井君江　伊藤由美　岩原英治　窪田　順　祖山克彦

2019 年度　整理等作業（滝ノ沢遺跡他９遺跡）

所　　長：原田秀一　副 所 長：関崎修二　調査部長：平林　彰　担当課長：岡村秀雄
調査担当：綿田弘実（課長補佐）　若林　卓　上田　真　贄田　明
作 業 員：石田和子　西村はるみ

第２節　発掘調査の経過

１　発掘作業

（１）滝ノ沢遺跡

滝ノ沢遺跡は、八ヶ岳連峰北端部から延びる丘陵の北東斜面に立地する。市教委によって遺物散布地として登録されているが、遺跡の時期については記載がない。

調査対象地の土地利用状況は、谷部は畑地、尾根部は山林であった。2011（平成 23）年度に谷部の南半において実施した確認調査では、縄文時代、古代、中・近世の遺物が出土したものの、遺構はなかった。

2013 年度は、谷部北半と尾根部の確認調査を行ったが、ここでも遺構・遺物はなかった。

以上の状況から、今回の調査対象地内は面的調査の必要はないと判断した。

（２）寺久保遺跡、庚申塚

寺久保遺跡は、佐久市南部の片貝川に向かって東に流れる相沢川北岸の丘陵南斜面に立地し、市教委によって、縄文時代および古墳時代の遺物散布地として登録されている。また、寺久保地籍には、かつて五つの寺が存在したとの伝承がある。

過去において調査事例がなく、遺跡の規模や密度など不明な点が多いことから、2012 年度はまず確認調査を行い、遺構がある箇所を中心に本格調査へ移行した。調査対象面積は 18,000㎡余りと広大であったが、2012 年度に竪穴建物跡を１軒検出したのみで、寺院に関する遺構・遺物は皆無だった。さらに、2013 年度と 2014 年度は遺構がないことを確認して、面的調査は行わなかった。

一方、2012 年に行った庚申古墳は、埋葬施設や周溝、盛土の版築はなく、かわらけや近・現代の陶磁器片が出土した。この調査結果を受けた市教委は、2013 年３月に「庚申塚」へと遺跡名を変更した。

（３）台ヶ坂遺跡

台ヶ坂遺跡は、県営旭ヶ丘団地の西側の段丘上にあり、市教委によって、縄文・古墳・平安時代の集落遺跡として登録されているが、実態は不明であった。2008 年度の確認調査では、耕作土の下に褐灰色粘質土と黒褐色粘質土の自然層、その下にやや粘質の褐色土が安定して見られ、遺構はなかった。したがって、本格調査の必要はないものと判断した。

（４）上滝・中滝・下滝遺跡

上滝・中滝・下滝遺跡は、滝川上流北岸の氾濫原および南面する山麓緩傾斜面にあり、市教委によって、縄文時代早期から中期と、古墳時代から平安時代の遺物が採集できる散布地として登録されている。

2008 年度に行った滝川北岸氾濫原の確認調査では遺構・遺物を検出できず、低地での本格調査は必要ないものと判断した。2009 年度は山麓緩斜面での本格的な発掘作業に向けて表土掘削を行い、2010 年度は本格的な発掘作業を行った。その結果、竪穴建物跡や溝、土坑などを検出した。なお、ＳＢ 01 出土の炭化材について、樹種同定分析と放射性炭素年代測定（AMS 年代測定）をそれぞれ実施した。

調査の結果、縄文時代２軒、古墳時代前期２軒、奈良・平安時代 13 軒の、合計 17 軒の竪穴建物跡を検出することができた。古代の竪穴建物跡は重複するものが多く、わずかな時期差で建物跡が密集した集落跡であったことが判明した。

（５）和田遺跡、和田１号塚

和田遺跡は、片貝川や支流の中沢川などの小河川が形成した沖積地を南に臨む丘陵末端に位置し、やや急峻な北側斜面と馬の背状の尾根部、やや緩やかな南側斜面部に区分けすることができる。市教委は、縄文時代および古代の遺跡散布地として周知してきたが、2009 年度に今回の調査範囲の西側隣接地で発掘調査を行い、弥生時代の竪穴建物跡も確認した。また、遺跡東部の尾根主脈から南東に舌状に突き出した支尾根頂部には和田１号墳がある。

2010 年度の確認調査では、調査範囲南西側の傾斜が比較的緩やかな箇所で、弥生時代後期の竪穴建物跡を確認したが、やや急峻な北側斜面や馬の背状の尾根部には遺構・遺物はなかった。また、遺跡の基盤となる堆積層の形成年代にかかわる対比指標を得ることを目的として、火山灰分析を行った。2011 年度は、南側斜面部を対象に、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡等の調査を行い、弥生時代の竪穴建物跡等から出土した炭化材の年代測定を行った。また、直径約 20 m、高さ２ｍほどの和田１号墳は、近世末以降に築かれた塚であることがわかった。この調査結果を受けて市教委は、2013 年３月に「和田１号塚」と遺跡名を変更した。

（６）滝遺跡

滝遺跡は、和田遺跡が立地する丘陵南裾部の谷戸に位置し、市教委によって古代の遺物散布地として登録されている。

2010（平成 22）年度の本発掘調査で、古墳時代前期と古代の竪穴建物跡を検出し、集落遺跡の西端を捉えることができた。また、竪穴建物跡から出土した炭化材等の年代測定を行った。

（７）家浦遺跡

家浦遺跡は、中沢川南岸に沿って北東から南西に延びる水田地帯にあり、市教委によって縄文時代、古墳時代および古代の遺物散布地として登録されている。2007 年度と 2009 年度の二度にわたって市教委が行った発掘調査では、溝や土坑が検出され、中・近世の遺物も出土している。

2008 年度の確認調査は、南西部にあたる水田部分で行ったが、現水田層直下に砂礫層が露出し、削平を受けている状況が明らかであった。2010 年度は北東部の確認調査を行ったが、やはり現耕作土と客土層直下から黄褐色土・砂礫層が露出し、削平を受けている状況が明らかになった。

以上の状況から、今回の調査対象地については面的調査の必要はないものと判断した。

（８）田島塚

田島古墳は、市教委が丘陵の尾根先端近くに立地する古墳として登録してきた。佐久地域では、竪穴系埋葬施設をもつ瀧の峯古墳群（佐久市根岸）、兜山１号古墳・兜山２号古墳（佐久市蓬田）など、標高 800 m内外の丘陵尾根上に立地することが多く認められており、同じ尾根上に立地する水堀古墳とともに、立地的にみても当該期の古墳である可能性を考えていた。

2007 年度は、現況地形測量および空撮を実施するとともに、墳丘部近くにまで工事用道路建設によって掘削される西斜面部について確認調査を行ったが、周溝などの施設は確認できなかった。地形測量の結果から、墳丘の高さ約２m、径 11.7 mほどの方墳であると考えた。南側部分では一部で盛り上がっている箇所があり、突出部が存在すると想定した。また、現況では横穴式石室の形跡がないため、竪穴系の埋葬施設を有する可能性が高いと考えた。

2008 年度は、近接する水堀古墳と同時並行で調査を進め、内部施設の有無の確認、盛土の観察・掘下げ等を行った。その結果、盛土内から奈良時代後半以降の土器や文久永宝（1863 年初鋳）が出土し、また埋葬施設もないことから、古墳ではなく、近世末（幕末）以降に構築された塚であることが判明した。塚の規模・形状は径 12 m程の円形状を呈する。なお、塚構築以前の遺構は認められなかった。この調査結果を受けた市教委は、2009 年２月に「田島塚」へと遺跡名を変更した。

（９）水堀塚

水堀古墳は、田島古墳とともに市教委が丘陵の尾根上に立地する古墳として登録してきた。

2008 年度は、まず清掃作業を行い、現況地形の空中写真撮影および地形測量を実施した。その後、内部施設の有無の確認、盛土の観察・掘下げ等を行った。その結果、田島古墳同様、盛土内から古代以降の土器や銭貨（1068 年初鋳の熙寧通寶・1078 年初鋳の元豊通寶他）・鉄釘等が出土し、埋葬施設もないことから、当初想定していた古墳ではなく、中世以降に構築された塚であることが判明した。この調査結果を受けた市教委は、田島古墳が「田島塚」へと遺跡名を変更するのと同時に、本古墳も「水堀塚」へと変更した。

2　整理等作業

（１）基礎整理作業

発掘作業中および発掘年度の冬期間は、各遺跡ごとに記録類の点検や写真整理、遺物洗浄と注記などの基礎整理作業を実施した。

（２）本格整理作業

臼田地区 11 遺跡の本格整理作業は 2015（平成 27）年度に着手し、まずは記録類や遺物の全体量とその内容把握を行った。次に、発掘作業で作成した図面・写真・台帳等を点検・照合し、台帳の不備を整えるとともに、遺構図や土層図等の必要な図面修正を施した。遺物については、保管状況を確認し、種類別に仕分け直し、その上で遺物台帳等の整備を行い注記を行った。

続く 2016 年度にかけて、遺構については調査所見の整理、各遺構の概要を把握するための情報整備、修正図をもとにデジタルトレースなどを行って、報告書に掲載する個別遺構図・遺構全体図・土層柱状図・周辺遺跡分布図等の作成を進めた。遺物については、報告書に掲載する遺物の選別・登録を行い、土器接合に着手した。

2017 年度は、報告書刊行を 2018 年度末に設定し、報告書に掲載する個別遺構図等の仮版組を行うとともに、土器の接合・復元を進めて写真撮影も行った。さらに、調査成果の総合的な検討を行い、一部原稿の作成に取り掛かっている。

2018 年は、編集会議で報告書作成にかかる統一的な方針を固めた上で、遺物の実測・トレース、仮版組を行い、原稿や遺物観察表等の作成を行った。

なお、2017・2018 年度の事業予算の関係で、報告書の刊行および収納は 2019 年度に繰り越した。

3　普及啓発活動

（１）遺跡説明会および発掘体験等

2008.8.3・10	田鳥塚・水堀塚遺跡現地説明会	491 名
2010.6.19	上滝・中滝・下滝遺跡現地説明会	99 名
2011.7.30	和田遺跡　和田１号墳　滝遺跡現地説明会	51 名

（２）展示会および講演会等

2011.3.12～5.15	上滝・中滝・下滝遺跡　速報展「長野県の遺跡発掘 2011」 長野県立歴史館	10,138 名
2011.7.7～7.31	上滝・中滝・下滝遺跡　速報展「長野県の遺跡発掘 2011」 長野県伊那文化会館	872 名
2012.3.17～5.13	和田遺跡　和田１号塚　滝遺跡　速報展「長野県の遺跡発掘 2012」 長野県立歴史館	10,659 名
2012.7.26～8.19	和田遺跡　和田１号塚　滝遺跡　速報展「長野県の遺跡発掘 2012」 長野県伊那文化会館	1,438 名
2013.3.21～6.1	寺久保遺跡　速報展「長野県の遺跡発掘 2013」　長野県立歴史館	15,237 名
2013.7.13～8.4	寺久保遺跡　速報展「長野県の遺跡発掘 2013」　長野県伊那文化会館	1,255 名

（３）調査情報誌等の発行

2009.3.19	「発掘調査の概要　田鳥塚・水堀塚」『年報』25
2011.3.31	「発掘調査の概要　上滝・中滝・下滝遺跡　和田遺跡　和田１号墳　家浦遺跡」『年報』27
2012.3.31	「発掘調査の概要　滝ノ沢遺跡　滝遺跡　和田遺跡　和田１号墳」『年報』28

2013.3.31　「発掘調査の概要　寺久保遺跡　庚申古墳」『年報』29
2016.3.18　「整理作業の概要　地家遺跡ほか」『年報』32
2017.3.24　「整理等作業の概要　佐久市地家遺跡ほか」『年報』33

（４）その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

４　作業日誌抄録

2007（平成19）年度

9月18日　田島古墳　清掃作業開始
9月26日　田島古墳　全景の空中写真撮影と地形測量
10月4日　田島古墳　西斜面の確認調査開始
10月10日　田島古墳　確認調査終了
12月25日　田島古墳　基礎整理作業開始
3月31日　田島古墳　基礎整理作業終了

2008年度

6月2日　田島古墳　発掘作業開始
6月18日　田島古墳　盛土精査開始
7月1日　上滝・中滝・下滝　確認調査開始
7月15日　上滝・中滝・下滝　遺構がないことを確認し終了
7月16日　田島古墳　盛土から「文久永宝」出土し塚の可能性が高くなる
7月22日　田島古墳、水堀古墳　寺尾真純氏地質指導
7月28日　家浦　確認調査開始
8月3日　田島古墳、水堀古墳　切原地区住民対象の遺跡見学会（10日も）
8月7日　家浦　遺構がないことを確認し終了
8月19日　水堀古墳　盛土上から古銭出土　塚の可能性
8月20日　田島古墳　空中写真撮影
8月21日　水堀古墳　金属探知機による探査実施
8月25日　台ヶ沢　確認調査開始
9月1日　台ヶ坂　遺構がないことを確認し終了
9月8日　田島古墳　盛土最下部の礫の写真撮影
9月10日　水堀古墳　空中写真撮影
9月17日　田島古墳　盛土精査終了
9月18日　水堀古墳　盛土精査終了
10月2日　田島古墳、水堀古墳　発掘作業終了
10月6日　田島古墳、水堀古墳　基礎整理作業開始
12月25日　台ヶ坂等　基礎整理作業開始
2月　市教委は、田島古墳、水堀古墳をそれぞれ田島塚、水堀塚と名称変更
3月31日　台ヶ坂等　基礎整理作業終了

2009年度

3月8日　上滝・中滝・下滝　表土掘削開始
3月18日　上滝・中滝・下滝　竪穴建物跡検出
3月31日　上滝・中滝・下滝　表土掘削完了

2010年度

4月5日　上滝・中滝・下滝　発掘作業開始
4月18日　上滝・中滝・下滝　遺構精査開始
6月3日　上滝・中滝・下滝　切原小遺跡見学（11日も）
6月10日　上滝・中滝・下滝　ＳＢ03床面からＳ字口縁の甕と高坏が出土
6月19日　上滝・中滝・下滝　遺跡見学会
7月22日　家浦　確認調査開始
7月23日　上滝・中滝・下滝　平安時代の竪穴建物の多くが重複していることを確認
7月30日　上滝・中滝・下滝　平安時代の遺物は９世紀初めから10世紀半ばと見立て
8月19日　家浦　遺構がないことを確認し終了
10月21日　和田　確認調査開始
11月1日　和田　弥生時代の遺構・遺物確認
11月17日　上滝・中滝・下滝　発掘作業終了
11月25日　和田　確認調査終了
12月20日　上滝・中滝・下滝　基礎整理作業開始
3月31日　基礎整理作業終了

2011年度

4月14日　和田　発掘作業開始
4月25日　和田　竪穴建物跡の検出面から赤彩土器片や櫛描波状文土器片出土
和田１号墳　現況写真撮影
5月10日　滝　発掘作業開始
5月17日　和田　竪穴建物跡４軒検出
5月18日　滝　竪穴建物跡検出
5月25日　和田１号墳　墳頂部の掘削開始
6月6日　和田１号墳　斜面部の掘削開始
6月7日　滝　竪穴建物跡３軒精査
6月8日　和田　４号竪穴建物跡の貯蔵穴から脚部を人為的に切断した高坏の坏部出土
6月15日　滝　不明遺構を精査の結果、竪穴建物跡と判明し、ＳＢ04とする
6月17日　滝　ＳＢ04から重口縁壺小片出土
6月21日　和田　３号竪穴建物跡の埋土３層から弥生後期土器と多量の炭化物出土
6月29日　和田、和田１号墳　空中写真撮影
7月14日　滝　全景の空中写真撮影
7月22日　滝　発掘作業終了
7月28日　和田１号墳　墳頂掘削で獣歯出土
7月30日　和田、和田１号墳　遺跡見学会
8月29日　和田１号墳　記録作業終了
9月9日　和田　発掘作業終了
9月14日　滝ノ沢　確認調査開始
11月9日　滝ノ沢　遺構がないことを確認し終了
基礎整理作業開始
基礎整理作業終了

2012 年度

７月 25 日	寺久保　発掘作業開始	10 月４日	寺久保　ＳＢ 01 から完形の坏出土
８月１日	庚申古墳　発掘作業開始	10 月 10 日	庚申古墳　盛土内からの出土遺物は近・現代のみ
８月７日	寺久保　平安時代の竪穴建物跡検出	11 月 16 日	寺久保・庚申古墳　発掘作業終了
９月 21 日	庚申古墳　盛土の掘削開始		基礎整理作業開始
９月 27 日	寺久保　竪穴建物跡精査		基礎整理作業終了

2013 年度

９月 30 日	滝ノ沢　確認調査開始	12 月 17 日	寺久保　遺構がないことを確認し終了
10 月 17 日	滝ノ沢　遺構がないことを確認し終了	12 月 20 日	滝ノ沢、寺久保　基礎整理作業開始
11 月 26 日	寺久保　確認調査開始	３月 31 日	滝ノ沢、寺久保　基礎整理作業開始

2014 年度

７月３日	寺久保　確認調査開始	12 月 15 日	寺久保　基礎整理作業開始
７月 22 日	寺久保　遺構がないことを確認し終了	３月 31 日	寺久保　基礎整理作業終了

2015 年度

４月１日	本格整理作業開始	８月 28 日	石器の注記と選別
	基礎整理内容の確認	９月 11 日	中部横断関連遺跡分布図作成
	図面・写真等記録・台帳の点検照合	11 月 16 日	写真アルバム・台帳整理
５月 21 日	図面整理と２次原図作成	１月 21 日	遺構図デジタルトレース
５月 26 日	遺物整理	２月 15 日	土器の分類・接合・計測
６月 22 日	全体図・トレンチ図・土層図デジタルトレース	３月 31 日	本格整理作業終了

2016 年度

４月１日	本格整理作業開始	７月１日	土器実測
４月 13 日	遺構検討　遺構図デジタルトレース	３月 31 日	本格整理作業終了
４月 14 日	土器の接合・接着・復元		

2017 年度

４月１日	本格整理作業開始	12 月６日	土坑一覧・遺物観察表作成
４月 24 日	石器分類	３月 31 日	本格整理作業終了

2018 年度

４月１日	本格整理作業開始	９月 28 日	遺物実測図のトレース委託１納品
４月５日	遺構デジタルトレース図の確認	10 月 11 日	遺物実測・トレース委託２
５月７日	所見類の整理	１月９日	遺物写真委託撮影
５月８日	編集会議	１月 31 日	遺物実測・トレース委託２納品
６月 11 日	遺物実測図確認	３月４日	委託撮影写真納品
７月 24 日	遺物実測図のトレース委託１	３月 26 日	編集会議
８月 27 日	遺物観察表作成	３月 29 日	本格整理作業終了

2019 年度

４月１日	本格整理作業開始	７月 31 日	発掘調査報告書印刷・製本契約
５月 30 日	編集会議	９月 30 日	発掘調査報告書刊行

引用・参考文献

長野県教育委員会 1997『大規模開発事業地内遺跡―遺跡詳細分布調査報告書―』

長野県教育委員会 2000『大規模開発事業地内遺跡―遺跡詳細分布調査―』２

長野県教育委員会 2003『大規模開発事業地内遺跡―遺跡詳細分布調査―』３

長野県教育委員会 2007『大規模開発事業地内遺跡―遺跡詳細分布調査―』４

長野県教育委員会 2010『県内遺跡発掘調査報告書―遺跡詳細分布調査―』５

長野県教育委員会 2013『県内遺跡発掘調査報告書―遺跡詳細分布調査―』６

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

佐久盆地は長野県の東に位置し、東と南を秩父山地、西を八ヶ岳連峰、北を浅間連山に囲まれている。盆地の中央には秩父山地の甲武信ヶ岳を源流とする千曲川が北流し、左（西）岸域は八ヶ岳連峰から下る小河川が開析谷や扇状地を形成し、河岸段丘や氾濫原を分断して千曲川に注ぐ。

中部横断道は、八千穂高原ＩＣから佐久南ＩＣまでの間、八ヶ岳連峰から東ないし北東方向に延びる開析谷と尾根とを南北方向に横切るため、今回調査した遺跡の多くは、尾根の頂部や斜面部、麓の小河川に面した平坦部に立地している。したがって、規模は小さいが、地理的な環境を活かした個性的な遺跡がある。例えば、尾根の頂部に築かれた田島塚・水堀塚、和田１号塚、傾斜面を利用した奥日影遺跡の窯跡、三方を尾根によって閉塞された空間に中世墓地を営んだ地家遺跡のごとくである。また、佐久南ＩＣ周辺は千曲川の段丘と低湿地からなり、段丘上には比較的規模の大きな北裏遺跡群が形成され、低湿地には北畑遺跡群や仁東餅遺跡のように水田域が広がる。

第２節　歴史的環境

今回調査した遺跡では、旧石器時代から中・近世の遺構と遺物を発見した。本節では、各遺跡の所在する佐久市から佐久穂町における周辺の遺跡を、時代別に紹介する。

旧石器時代

遺跡数は少なく、今回調査した佐久市高尾Ａ遺跡（№410）、佐久穂町満り久保遺跡（№B54）、満り久保東遺跡（№B57）がある。とくに高尾Ａ遺跡で発見した石器群は、佐久市立科Ｆ遺跡、八風山遺跡群八風山Ⅱ遺跡、香坂山遺跡と同様の古い段階と考えている。

縄文時代

調査例は少ないが、遺物は採取されている。今回取り上げた遺跡の半分弱が縄文時代の遺跡である。

草創期は、佐久市井上遺跡（№691）、佐久穂町崎田原遺跡（№B１）で神子柴型石斧が採取されている。早期は、片貝川周辺の佐久市堂浦遺跡（№640）、大門地遺跡（№641）で押型文・貝殻条痕文系土器、佐久穂町反り峯遺跡（№B36）で当該期の土器が採取されているが、いずれも遺構は確認されていない。なお、千曲川右岸の佐久穂町後平遺跡では早期後半の竪穴建物跡３軒が調査されている。前期は、佐久穂町上ノ原遺跡（№A19）、清水上遺跡（№A59）などで前葉、佐久市後澤遺跡（№400）で中葉の集落跡が調査されている。佐久市井上遺跡（№691）では、遺構外から羽状縄文系土器が出土している。また、佐久穂町細久保遺跡（№B10）、千ケ日向遺跡（№B11）で後葉の土器が採取されている。中期は各所で遺物が採取され、遺跡数も多い。佐久穂町佐久西小学校裏遺跡（№A10）、崎田原遺跡（№B１）で集落跡を調査している。

後・晩期の遺跡数は少ない。佐久穂町宮の本遺跡（№A29）では敷石住居跡が調査され、佐久穂町竹の

下遺跡（№B６）では浮線文系土器が見つかっている。今回の調査で、佐久市小山の神Ｂ遺跡（№402）や高尾Ａ遺跡（№410）、上滝・中滝・下滝遺跡（№620）で前期の竪穴建物跡を、佐久市北裏遺跡群（№318）や地家遺跡（№480）ほかで早期から晩期の資料を報告した。

弥生時代

大規模な遺跡は、佐久盆地北部の千曲川に沿いにある自然堤防や段丘、比較的平坦な丘陵台地にあり、山間部にはほとんどない。前期から中期前半は、佐久穂町中原遺跡（№A18）、佐久市井上遺跡（№691）、丸山遺跡（№610）で遺物が採取されている。中期後半から後期は、片貝川流域で佐久市勝間原遺跡（№611）、丸山遺跡（№610）で竪穴建物跡が調査され、一帯となって大規模な集落跡になり、佐久市域における該期の集落跡の南限と推測されている。段丘や丘陵上では、佐久市北裏遺跡群（№318）、西裏遺跡群（№317）、後澤遺跡（№400）などが拠点集落とされる。一方、佐久穂町では宮の本遺跡（№A29）で土器の出土例があるが、この地域の遺跡は少ない。今回、佐久市北裏遺跡群（№318）、西東山遺跡（№319）、和田遺跡（№616）などで集落跡を、佐久地域の山間部にある岩陰遺跡として月明沢岩陰遺跡群（№1162）を調査した。

古墳時代

佐久地域では前期の遺跡数は減少し、集落の規模も小さいとされ、中期以降、その数が増してくる。

周辺には、中期の佐久市雛山遺跡（№658）や中期から後期の井上遺跡（№691）などの集落遺跡がある。一方、古墳は６世紀後半以降に築造された佐久市三河田大塚古墳（№244）を除いて、周辺は７世紀から８世紀に築造された後期から終末期の古墳で占められる。７世紀以降の古墳は左岸には少なく、佐久穂町塚畑古墳（№A１）が南限と考えられている。今回、佐久市上滝・中滝・下滝遺跡（№620）、和田遺跡（№616）、滝遺跡（№615）で前期から中期の小規模な集落跡を調査した。また、新発見の古墳として、兜山古墳（№1163）、尾垂古墳（№1164）、高尾５号墳（№556）を報告した。

古代

千曲川左岸では、佐久市勝間原遺跡（№611）・丸山遺跡（№610）・美里在家遺跡（№598）・蛇塚遺跡（№597）などがある。佐久穂町では佐久西小学校裏遺跡（№A10）で集落が調査され、勝見沢遺跡（№B13）では八稜鏡が出土している。今回、佐久市小山の神Ｂ遺跡（№402）、上滝・中滝・下滝遺跡（№620）、地家遺跡（№480）、寺久保遺跡（№603）、佐久穂町小山寺窪遺跡（№A30）、馬越下遺跡（№B56）などで集落跡を調査した。こうした古代の集落跡は、水田耕作には不向きな山間（麓）部に分布が広がる。その近隣の佐久市洞源遺跡（№473）では製鉄炉を、佐久穂町奥日影遺跡（№A60）では須恵器の窯跡を発見しており、山間（麓）部に暮らす人々の生活基盤（生業）を検討するうえで、貴重な調査例となった。

中世以降

周辺遺跡のうちほぼ半数が城跡・砦・狼火台で、今回調査した荒城跡（№478）もその一つである。一方、佐久市地家遺跡（№480）・尾垂遺跡（№472）は寺院関連遺跡、佐久市北裏遺跡群（№318）・佐久穂町奥日影遺跡（№A60）・小山寺窪遺跡（№A30）などは集落遺跡として報告した。尾根の頂部に築かれた佐久市和田１号塚（№791）などは地域史を考える上で、新たな発見といえる。

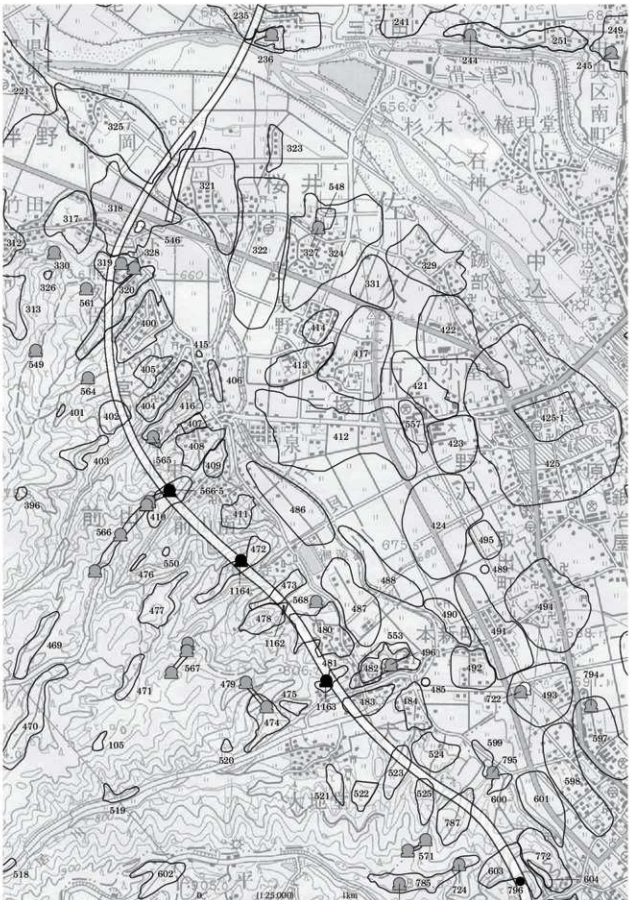
引用・参考文献

佐久市　1995　『佐久市志』　歴史編（一）原始古代

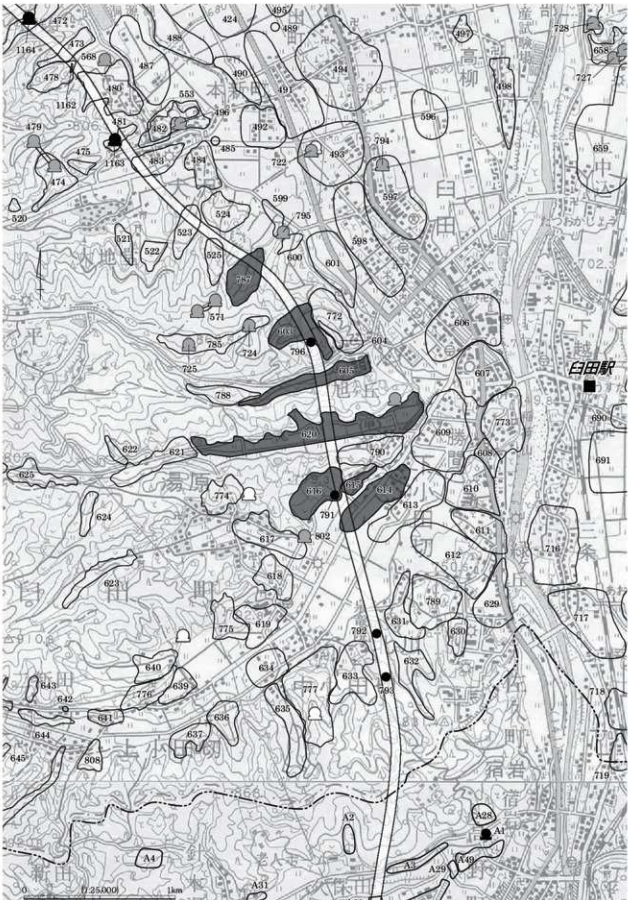
佐久市・臼田町誌刊行会　2007『臼田町誌』第三巻　考古古代・中世編

佐久町誌刊行会　2004　『佐久町誌』歴史編一　原始・古代・中世

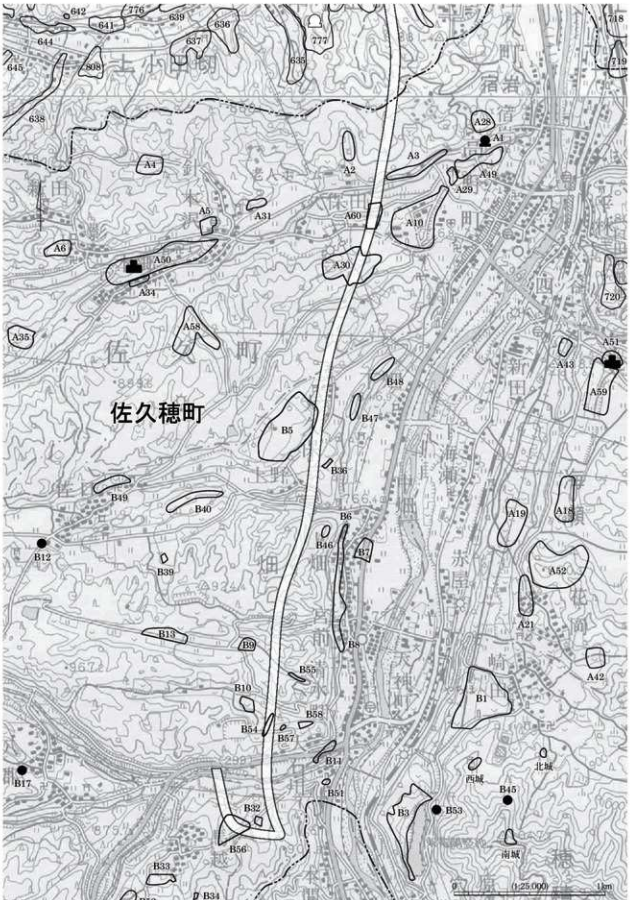
八千穂村誌刊行会　2003　「八千穂村誌」第四巻　歴史編



第３図　周辺遺跡分布図（１）



第４図　周辺遺跡分布図（２）



第５図　周辺遺跡分布図（３）

第５表　周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺　跡　名	所在地	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
105	上野Ｂ遺跡								
221	下原屋敷遺跡群	伊野		○	○	○	○		
235	今井宮の前遺跡	今井					○	○	
236	今井城跡	今井						○	
241	中原遺跡群	今井		○	○	○	○	○	
244	三河田大塚古墳	三河田				○			
245	蟹ヶ沢古墳	中込				○			
249	大塚遺跡群	中込			○		○		
251	梨の木遺跡Ｉ	中込						○	
312	西村中遺跡	根岸		○		○	○		
313	水操遺跡群	根岸					○		
317	西裏遺跡群	伊野		○	○		○	○	
318	北裏遺跡群	伊野		○	○	○	○	○	
319	西東山遺跡	伊野		○	○		○		
320	東山遺跡	伊野		○		○	○	○	
321	北畑遺跡群	桜井		○	○	○	○		
322	宮浦遺跡群	桜井			○	○	○		
323	上北谷遺跡群	桜井				○	○		
324	平馬塚遺跡群	桜井		○		○	○		
325	仁東畑遺跡	伊野		○			○		
326	虚空蔵山鉄火台	根岸						○	
327	平馬塚古墳	桜井				○			
328	西東山古墳群	伊野				○			
328	１号墳	伊野				○			
328	２号墳	伊野				○			
329	跡部儘田遺跡群	跡部				○	○		
330	高日影古墳	根岸				○			
331	町田遺跡群	三塚				○	○	○	
396	遊石遺跡	小宮山		○					
400	後滝遺跡	小宮山		○	○	○	○		
401	小山の神Ａ遺跡	小宮山		○					
402	小山の神Ｂ遺跡	小宮山		○	○		○	○	
403	長ヶ窪遺跡	小宮山		○		○	○		
404	西の張遺跡	小宮山		○	○	○			
405	上の山遺跡	小宮山		○					
406	町後遺跡	前山					○	○	
407	居屋敷遺跡	前山					○		
408	蘆の下遺跡	前山		○	○		○		
409	象ヶ岡遺跡	前山		○			○		
410	高尾Ａ遺跡	前山		○	○	○	○		
411	倉澤遺跡	前山					○		
412	中道遺跡群	前山				○	○		
413	壱町田遺跡	三塚							
414	三塚鶴田遺跡	三塚					○		
415	小宮山砦	小宮山						○	
416	前山城跡	小宮山					○	○	
417	三千束遺跡群	三塚				○	○		
421	長明塚遺跡	野沢				○	○		
422	金山遺跡	跡部				○	○		
423	東五里田遺跡	野沢					○		
424	儘田遺跡	野沢				○	○		
425	野沢城跡	野沢					○	○	
469	峠原遺跡	小宮山		○					
470	免ゝづ原遺跡	前山		○		○	○	○	
471	上野遺跡	前山				○			
472	尾垂遺跡	前山		○	○	○	○	○	
473	洞源遺跡	前山		○			○		
474	一丁田遺跡	大沢		○			○		
475	大棚遺跡	大沢				○	○		
476	高尾Ｂ遺跡	前山		○					
477	前山古城跡	前山						○	
478	荒城跡	前山						○	
479	一丁田古墳群	大沢				○			

遺跡番号	遺　跡　名	所在地	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
479	１号墳	大沢				○			
479	２号墳	大沢				○			
480	地家遺跡	大沢		○	○	○	○	○	
481	兜山遺跡	大沢		○		○	○		
482	城山遺跡	大沢		○	○	○	○	○	
483	大沢屋敷遺跡	大沢		○		○	○		
484	大中沢遺跡	大沢				○	○		
485	蔵下遺跡	大沢		○					
486	大門下遺跡	前山			○	○			
487	大堀遺跡	前山		○					
488	御嶽遺跡	大沢				○			
489	高畑遺跡	本新町				○			
490	大沢前田遺跡	本新町				○			
491	西裏遺跡群	本新町		○		○	○		
492	下町屋遺跡	大沢					○	○	
493	原遺跡	大沢				○			
494	白鉛子遺跡群	取手					○		
495	伊勢道遺跡	取手					○		
496	城山古墳	大沢				○			
497	向畑遺跡	鍛冶屋					○		
498	前堀遺跡	高柳				○			
518	日向小阪遺跡	大沢				○	○		
519	日向崩岩遺跡	大沢				○	○		
520	山田遺跡	大沢					○		
521	金山久保Ａ遺跡	大沢			○	○	○		
522	金山久保Ｂ遺跡	大沢			○				
523	前の久保遺跡	大沢			○	○	○		
524	三枚平Ａ遺跡	大沢		○		○	○		
525	三枚平Ｂ遺跡	大沢		○	○	○	○		
546	宝生寺山砦	伊野						○	
548	泉屋敷跡	桜井						○	
549	水操古墳	根岸				○			
550	川越石窯址	前山							○
553	荒山城跡	大沢						○	
557	蔵澤遺跡	野沢					○		
561	山の神古墳	伊野				○			
564	清来寺古墳	小宮山				○			
565	鱗渓古墳	前山				○			
566	高尾古墳群	前山				○			
566	１号墳					○			
566	２号墳					○			
566	３号墳					○			
566	４号墳					○			
566	５号墳					○			
567	洞源古墳群	前山				○			
567	１号墳					○			
567	２号墳					○			
567	３号墳					○			
568	鷺林古墳	前山				○			
571	三枚平古墳群	大沢				○			
571	１号墳					○			
571	２号墳					○			
596	原田遺跡	臼田				○	○		
597	蛇塚遺跡	臼田		○	○	○	○		
598	美里在家遺跡	臼田		○	○	○	○		
599	滝ノ沢入口遺跡	臼田					○		
600	荒谷遺跡	臼田		○			○		
601	七曲り下遺跡	臼田			○	○	○	○	
602	平遺跡	臼田		○			○		
603	**寺久保遺跡**	**臼田**		○		○	○		
604	下ノ城遺跡	臼田		○	○	○	○		
605	**台ヶ坂遺跡**	**臼田**		○		○	○		
606	反田遺跡	臼田		○					

遺跡番号	遺　跡　名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
607	城下遺跡	臼田		○					
608	城山遺跡	臼田		○		○	○		
609	小山崎遺跡群	臼田		○	○	○	○	○	
610	夷山遺跡	下小田切		○	○	○	○		
611	勝間原遺跡	下小田切		○	○	○	○		
612	奥ノ木遺跡	下小田切		○	○	○	○		
613	日影遺跡	下小田切				○	○		
614	**家浦遺跡**	**下小田切**		○		○	○	○	○
615	**滝遺跡**	**湯原**				○	○		
616	**和田遺跡**	**湯原**		○	○	○	○	○	
617	北側遺跡	湯原		○		○	○		
618	中島遺跡	湯原				○	○		
619	向城遺跡	中小田切		○		○	○		
620	**上滝・中滝・下滝遺跡**	**湯原**		○	○	○	○		
621	見玉・大平遺跡	湯原					○		
622	ジンジロ遺跡	湯原					○		
623	山の神遺跡	湯原		○			○		
624	梨子久保遺跡	湯原		○					
625	五里久保遺跡	湯原		○			○		
629	北川勝間遺跡	北川				○	○		
630	千曲台団地遺跡	北川				○	○		
631	広沢遺跡	北川		○	○	○	○		
632	田島久保遺跡	北川		○			○		
633	城影遺跡	中小田切		○		○	○		
634	札場吉原遺跡	中小田切		○		○	○		
635	南久保・居村遺跡	中小田切		○			○		
636	前久保遺跡	上小田切		○			○		
637	広久保・梅の久保遺跡	上小田切					○		
639	家裏遺跡	上小田切		○			○		
640	堂浦遺跡	上小田切		○		○	○		
641	大門地遺跡	十二新田		○			○		
642	岩下洞窟遺跡	十二新田					○		
643	日向遺跡	十二新田		○			○		
644	岩下遺跡	十二新田		○			○		
645	十二新田寺久保遺跡	十二新田		○		○	○	○	
658	離山遺跡	上中込		○	○	○	○	○	
659	中反田遺跡群	大奈良				○	○		
690	戸井口遺跡	三分		○		○	○		
691	井上遺跡	三分		○	○	○	○		
716	観正田遺跡	三条					○	○	
717	南裏遺跡	三条					○		
718	東荒谷遺跡	十日町		○			○		
719	十日町遺跡	十日町						○	
720	唐松Ａ遺跡	岩水		○					
722	境塚古墳	臼田				○			
724	滝ノ沢古墳	臼田				○			
725	滝ノ沢経塚古墳	臼田						○	
727	離山２号古墳	上中込				○			
728	離山３号古墳	上中込				○			
772	医王寺城跡	臼田						○	
773	稲荷山城跡	臼田						○	
774	湯原城跡	湯原						○	
775	向城跡	中小田切						○	
776	上小田切城跡	上小田切						○	
777	雁峰城跡	中小田切						○	
785	上ノ城跡	臼田						○	
787	**滝ノ沢遺跡**	**臼田**		○		○	○	○	
788	山神久保遺跡	臼田		○	○	○	○		
789	田島遺跡	臼田		○	○				
790	下滝遺跡	臼田							○
791	**和田１号塚**	**湯原**							○
792	**田島塚**	**北川**							○
793	**水堀塚**	**小田切**							○

遺跡番号	遺　跡　名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
794	法印塚古墳	法印塚				○			
795	荒谷古墳	荒谷				○			
796	**庚申塚**	**庚申**							○
802	北側１号墳	北側				○			
808	冷久保遺跡	冷久保					○		
1162	月明沢岩陰遺跡群	前山			○				
1163	兜山古墳	大沢				○			
1164	尾垂古墳	前山				○			
A1	塚畑古墳	高野町				○	○		
A2	雁明遺跡	高野町			○		○		
A3	北沢遺跡	高野町		○	○		○		
A4	たつま久保遺跡	上		○			○		
A5	下影遺跡	上		○			○		
A6	影遺跡	上		○			○		
A10	佐久西小学校裏遺跡	高野町		○	○	○	○		
A18	中原遺跡	海瀬		○	○		○		
A19	上ノ原遺跡	海瀬		○			○		
A21	中山遺跡	海瀬		○			○	○	
A28	窯窪遺跡	高野町					○		
A29	宮の本遺跡	高野町		○	○	○	○	○	
A30	小山寺窪遺跡	高野町		○	○		○	○	○
A31	施餓鬼畑遺跡	上		○			○		
A34	本郷遺跡	上		○					
A35	寺久保遺跡	上		○			○	○	
A42	家山遺跡	海瀬		○					
A43	下原遺跡	海瀬		○					
A49	高野城跡	高野町						○	
A50	福田城跡	上						○	
A51	海瀬城跡	海瀬						○	
A52	花岡城跡	海瀬						○	
A58	舟ノ窪遺跡	上					○		
A59	清水上遺跡	海瀬		○					
A60	奥日影遺跡	高野町		○			○	○	○
B1	畑田原遺跡	穂積		○	○		○		
B3	関谷遺跡	穂積	○	○			○		
B5	上野月夜原遺跡	畑		○			○		
B6	竹の下遺跡	畑		○			○		
B7	封地遺跡	畑		○			○	○	
B8	么ジナ沢遺跡	畑		○	○		○		
B9	宮の入遺跡	畑		○			○		
B10	細久保遺跡	畑		○					
B11	千ケ日向遺跡	畑		○					
B12	佐口遺跡	畑		○					
B13	勝見沢遺跡	畑		○			○		
B32	中原遺跡	千代里		○					
B33	古屋敷遺跡	千代里		○					
B34	向窪遺跡	千代里		○					
B36	反り峯遺跡	畑		○					
B39	南平遺跡	畑		○			○		
B40	馬込遺跡	畑		○			○		
B45	蟻城跡	穂積						○	
B46	権現山砦跡	畑						○	
B47	下畑城跡	畑						○	
B48	下畑下の城跡	畑						○	
B49	佐口城跡	畑						○	
B51	大石川峰火台跡	千代里						○	
B52	馬越城跡	千代里						○	
B53	関谷東遺跡	穂積		○			○		
B54	満り久保遺跡	畑	○	○			○	○	
B55	畑寺久保遺跡	畑		○					
B56	馬越下遺跡	千代里		○			○	○	
B57	満り久保東遺跡	畑	○						
B58	千ケ日向団地上遺跡	畑		○					

第３章　発掘調査の方法

第１節　発掘作業

埋文センターでは、県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則って発掘調査を実施している。

１　遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺跡記号は調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット３文字で表した記号である。１文字目は長野県を 10 分割した地区記号で、北佐久郡・南佐久郡・小諸市・佐久市を示す「Ｄ」、２文字目と３文字目は遺跡名のローマ字表記から２文字を選択したものである。各種記録類や遺物注記に遺跡記号を利用している。なお、和田１号塚については、当初名称「和田１号墳」の墳（ＦＵＮ）から３文字目をとってＤＷＦとした。

滝ノ沢遺跡（ＴＡＫＩＮＯＳＡＷＡ）：ＤＴＳ
寺久保遺跡（ＴＥＲＡＫＵＢＯ）：ＤＴＫ
庚申塚（ＫＯＳＨＩＮＺＵＫＡ）：ＤＫＨ
台ヶ坂遺跡（ＤＡＩＧＡＳＡＫＡ）：ＤＤＳ
上滝・中滝・下滝遺跡（ＫＡＭＩＴＡＫＩＮＡＫＡＴＡＫＩＳＨＩＭＯＴＡＫＩ）：ＤＫＩ
和田遺跡（ＷＡＤＡ）：ＤＷＡ
和田１号塚（ＷＡＤＡＩＣＨＩＧＯＺＵＫＡ）：ＤＷＦ
滝遺跡（ＴＡＫＩ）：ＤＴＩ
家浦遺跡（ＹＡＵＲＡ）：ＤＹＵ
田島塚（ＴＡＪＩＭＡＺＵＫＡ）：ＤＴＭ
水堀塚（ＭＩＺＵＢＯＲＩＺＵＫＡ）：ＤＭＺ

２　遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は検出時に決定するため、遺構の性格に適合しない場合もあるが、主に平面形状や分布の特徴で区分した。遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則として変更していない。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また発掘段階で遺構番号が付いていなかったものについては整理段階で新たに付与した。

今回の発掘調査で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

ＳＢ：２ｍを目安とし、それ以上の大きさの方形、長方形、円形、楕円形の掘込み
【竪穴建物跡、竪穴状遺構】
ＳＤ：帯状の掘込み【溝跡、自然流路跡】
ＳＫ：単独もしくは他の掘込みとの関係が認められないＳＢより平面形が小さな掘込み
【土坑、井戸】

ＳＭ：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり
【古墳、墳墓、周溝墓、土坑墓、木棺墓もここに含める】
ＳＴ：ＳＢよりも平面形が小さな掘込みが一定間隔で方形、長方形、円形に配置し、複数の掘込み相互が組み合わさって一定の機能をもつもの　【掘立柱建物跡】
ＳＦ：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるものおよび炭化物の集中範囲
ＳＸ：その他、性格不明遺構

なお、ＳＢ内の柱穴・貯蔵穴等やＳＴを構成する個々の掘込みにはピット（Ｐ）を付した。また、自然流路跡に「ＮＲ」を付した場合がある。

３　調査グリッドの設定（第６図）

寺久保遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡、和田１号塚、家浦遺跡、田島塚、水堀塚では、以下の方式で調査グリッドを設定した。その他の遺跡では、調査グリッドは設定していない。

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（Ｘ＝0.0000，Ｙ＝0.0000）を基点に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設ける。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画する。

大々地区は200×200ｍの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与える。和田遺跡・和田１号塚、そして田島塚・水堀塚については、それぞれ同一丘陵上に隣接するため、２遺跡を統一して、前者はⅠ～Ⅱまで、後者はⅠ～Ⅳまでを設定した。

大地区は、大々地区を40×40ｍの25区画に分割し、北西から南東へＡ～Ｙのアルファベット番号を与える。

中地区は、大地区を８×８ｍの25区画に分割し、北西から南東へ01～25の算用数字番号を与える。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、中地区を２×２ｍの16区画に分割し、北西から南東へ01～16の算用数字番号を与える。中地区番号との間にはハイフンを挿入する。

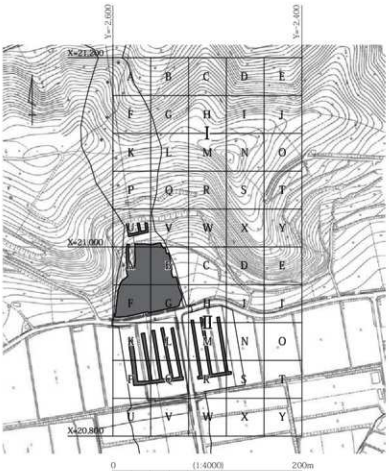
グリッド名の実際の表記においては、読取りやすさを考え、大々～中地区番号の間にも適宜ハイフンを挿入することがあり、本書の図中でもそうした表記になっている場合がある。

グリッド杭の設定は、表土掘削が終了し、遺構検出をほぼ終えた段階で業務委託により実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

なお、上記の調査グリッドとは別に、地形や土地区画の状況、調査の進ちょく状況に合わせて調査範囲を任意に分割し、「１区、２区・・・・」等と呼称した遺跡がある。また、和田１号塚では独自の任意グリッドも設定した。

４　表土の掘削と遺構の検出

庚申塚、和田１号塚、田島塚、水堀塚を除く７遺跡では、まず、遺構・遺物包含層の有無と分布状況、土層堆積状況を把握するためのトレンチ調査を行った。トレンチの掘削は、滝ノ沢遺跡の一部で人力によるほかは、重機を使用した。トレンチ調査の結果に基づき、面的調査の有無、範囲、遺構検出面を決定した。面的調査を実施した寺久保遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡、滝遺跡のいずれも遺構検出は１面である。表土を含む遺構検出面までの堆積層は重機により掘削した。表土掘削が終了した部分から、手作業で掘削面の清掃を行って遺構を検出した。遺物は上記の地区名・グリッド名・出土層位、遺構に関連

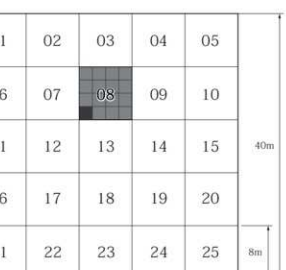


大々地区（200×200m グリッド）：Ⅰ・Ⅱ　　上流・中流・下流遺跡 調査対象地

例：ⅡM08-13 グリッドの座標位置

大地区（40×40m グリッド）：ⅡA…ⅡY

小地区（2×2m グリッド）：
ⅡM08-01…ⅡM08-13…ⅡM08-16



中地区（8×8m グリッド）：ⅡM01・ⅡM02…ⅡM08…ⅡM25

第６図　調査グリッドの呼称

するものは帰属遺構名をポリ袋に記して取り上げた。

庚申塚、和田１号塚、田島塚、水堀塚は、当初、いずれも古墳として登録されており、地表面でマウンド状隆起が明瞭であった。マウンド頂部および斜面部にトレンチを設定し、表土から手作業で掘下げを進めた。その結果、盛土による構築ではあるが、古墳ではないことが判明した。

５　遺構の発掘

竪穴建物跡の調査は、土層観察用のベルトに沿った先行トレンチで床面を確認するとともに、土層の堆積状況を把握・記録して、層位ごとに埋土を床面まで掘下げ、柱穴、炉、カマド、周溝などの建物内施設の精査・記録を行った。ベルト部分の掘下げと住建物内施設の発掘は、多くの場合、並行して進めた。完掘状態の記録を行った後に床面下（掘方）の状況を確認した。

土坑は、埋土を半截し、土層の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。ただし、埋土中の遺物出土状況によっては、上位を全体に掘下げ、出土状況を記録してから下位の掘下げへと進んだ。

掘立柱建物跡の柱穴は、プラン内全体を若干掘下げて柱痕跡を確認し、柱痕跡が断面にかかるように埋土を半截した。以後、土坑と同様な手順で調査を進めた。

溝および自然流路跡は、全体のプランを検出した後、延長方向に直交するベルトを複数箇所設定し、それぞれの土層堆積状況を観察しながら掘り下げた。

出土遺物については、その出土状況に特徴のあるものなどは、付番して出土状況図の作成、写真撮影を行って取り上げた。

庚申塚、和田１号塚、田島塚、水堀塚については、トレンチ調査で把握したマウンド構造をさらに精査し、出土遺物の記録・取上げを行いつつ、盛土全体を掘下げ、基底面（構築開始面）の状況を確認・記録した。

６　記録作成

遺構図・土層図は、埋文センター職員およびその指導のもとに発掘作業員が作成した。測量基準杭を基準とする簡易遣り方測量を基本としたが、遺構実測支援システム「遺構くん Cubic」を用いた測量も一部実施した。遺構図は中地区（８ｍ×８ｍ）単位に区切った割付図や建物跡などの個別図を作成した。縮尺は１：20を基本とし、必要に応じて１：10図、１：40図も作成した。調査区・トレンチ配置図、地形図の作成は、業務委託を基本としたが、一部、遺構実測支援システムを用いて埋文センター職員および発掘作業員が行った。

写真撮影は、６×７フィルムカメラ（マミヤＲＢ/ペンタックス）、35mm フィルムカメラ（ニコンＦＭ２）または 35mm 相当の一眼レフデジタルカメラ（ペンタックスＫ－７）を併用して行った。フィルムはモノクロネガフィルム（フジネオパン 100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム 100 Ｆ）を使用した。撮影はすべて埋文センター職員が行い、現像と焼付けは業務委託とした。上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡、和田１号塚、田島塚、水堀塚では、業務委託により遺跡全景の空中撮影を実施した。

７　自然科学分析

業務委託により、火山灰分析、樹種同定、放射性炭素年代測定を実施した。

火山灰分析は、和田遺跡において、遺跡の基盤となる堆積層の形成年代にかかわる対比指標を得ることを目的として、テフラの検出同定分析、重軽鉱物分析、屈折率測定を実施した。

樹種同定は、上滝・中滝・下滝遺跡において、竪穴建物跡から出土した炭化材の樹種の検討を目的とし

て実施した。

放射性炭素年代測定は、上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡、和田１号塚、滝遺跡において、遺構のより明確な年代推定を行うための資料を得ることを目的として、遺構出土の炭化物について実施した。

第２節　整理等作業

１　遺物の整理

遺物は、取上げ単位ごとに台帳登録し、洗浄・クリーニングと注記を行い、材質別に土器・土製品・陶磁器、石器・石製品、金属製品に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品・陶磁器は、接合を行いながら、観察と分類、破片数と重量の計測を進め、遺構・遺跡の時期や特徴を示すために報告書掲載が必要な遺物を抽出し、必要に応じて補強と復元を行った。石器・石製品は観察・分類を行いつつ、大きさと重量の計測を行い、掲載遺物を抽出した。金属製品は観察・計測を行って、掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は、遺跡ごと、材質ごとに管理番号を付して遺物管理台帳に登録した。

実測は、手実測により１：１縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器や須恵器、銭貨は拓本も行った。トレースは、石器・石製品と金属製品は埋文センターにおいて製図ペンを用いた手トレースを行ったが、土器・土製品・陶磁器については業務委託による描画ソフト Illustrator を用いたデジタルトレースを実施した。手トレースした遺物図はデジタルスキャンし、デジタルトレースした遺物図と合わせて、Illustrator を用いてデジタル図版データを作成した。

２　記録類の整理

（１）遺構図類の整理

遺構図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、竪穴建物跡など一部の個別図についてはトレースのための２次原図を作成した。修正図や２次原図をもとに、Illustrator を用いてデジタルトレースを行い、個別遺構図、土層図、遺構分布図（全体図）などのデジタル図版データを作成した。

（２）写真記録の整理

発掘作業で作成したフィルム写真およびデジタル写真については、遺跡別に写真台帳を作成し、発掘年度、撮影日、撮影方向、内容を記載した。フィルム写真は遺跡別に、撮影順にアルバムに収納した。モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムは、35mm はマウント仕様、６×７はスリーブ仕様で収納している。デジタル写真はＪＰＥＧおよびＬＡＷデータを遺跡別に、撮影順にハードディスクに記録した。

遺物写真撮影は業務委託により実施した。撮影には一眼レフデジタルカメラを使用した。

３　報告書作成と資料収納

（１）報告書作成

報告書の本格的な編集作業は、平成 30 年度に着手した。第１章から第３章に 11 遺跡全体を通した調査経緯、地理的・歴史的環境、基本的調査方法についてまとめ、第４章から第 11 章で各遺跡の報告を行

い、第 12 章に総括を掲載した。第４章から第 11 章は、遺跡の特徴を理解しやすいよう工夫し、章末に小結を設けた。第５章の寺久保遺跡と庚申塚、第８章の和田遺跡と和田１号塚、第 11 章の田島塚と水堀塚については、近接する地点において一連の工程で行った調査であるため、それぞれ２遺跡を同一章にまとめた。

報告書作成にあたり、2019（平成31）年３月 26 日、2019 年５月 30 日の２回、編集会議を行った。会議で指摘を受けた事項について検討を行い、報告書の内容を整備した。

（２）資料の収納

遺物は、遺跡ごと、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・グリッド等の地点別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図類は、手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真収納台帳に登録し、アルバム（ファイル）に収納した。

デジタルデータについては、埋文センターで作成したデータはハードディスクに記録した。業務委託によるデータは、納入時点でＣＤないしＤＶＤに記録済みである。

第４章　滝ノ沢遺跡

第１節　遺跡の概観

滝ノ沢遺跡は佐久市南部（旧臼田町）の千曲川左岸にあり、北八ヶ岳から北東に延びる丘陵の北斜面に立地する。標高は 778～710 m を測る。現況は尾根上が雑木林で、谷沿いは畑地として利用されていた。

旧臼田町教育委員会遺跡詳細分布調査（以下「町分布調査」という。）では、平安時代の土師器や灰釉陶器が採集されている（臼田町教育委員会 1988）。発掘調査歴はない。

第２節　調査の概要

2011（平成 23）年度と 2013 年度の２か年にわたり発掘作業を実施した（第７・８図）。調査対象面積は 7,790㎡である。2011 年度は重機の進入が困難であったため、２×２ m のテストピット（ＴＰ）とトレンチを尾根の北東斜面に 12 か所（ＴＰ１～11、17、Ｔ１～11）、低地に５か所（ＴＰ 12～16）を設定し、人力で掘削した。

2013 年度は谷部北半に６本（Ｔ 12～17）、西側尾根部に４本（Ｔ 18～21）のトレンチを設定し、重機で掘削した。

その結果、表土層（耕作土）から少量の遺物が出土したが、遺構を検出できなかった。基本層序は、次のとおりとした（第９図）。

Ⅰａ層：表土（耕作土）

Ⅰｂ層：南尾根部の造成に伴う盛土

Ⅱ 層：旧表土、黒色～黒褐色土

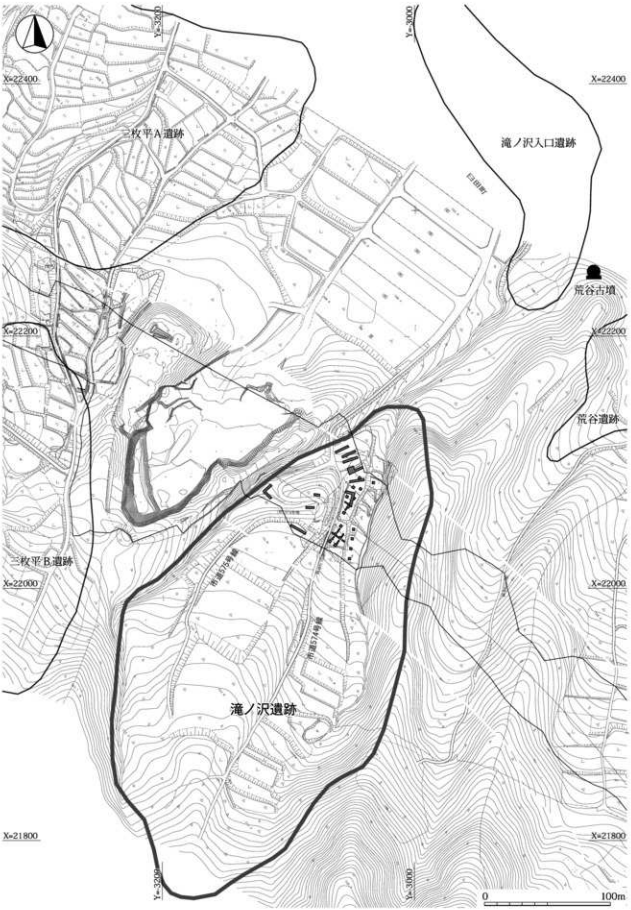
Ⅲ 層：旧流路にあたる小礫混じりで酸化鉄が点状あるいは斑状に集まる褐灰～灰黄褐色土

Ⅳ 層：地山の黄褐色土

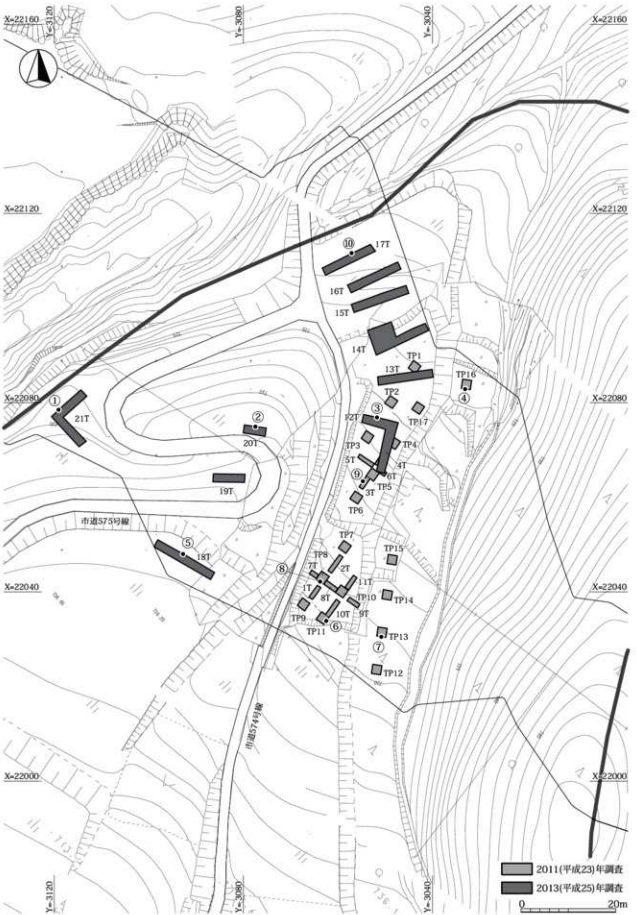
Ⅴ 層：岩盤

出土遺物は、縄文時代から古代の土器片、中・近世の陶磁器片、ほかに石器が出土している（第 10 図、ＰＬ７）。１～５は縄文土器である。１は太めの縦位沈線間に斜位沈線を施す。後期前葉であろう。２・３は半截竹管状工具により、２は曲線的、３は縦位の平行沈線文を施す。４は薄手で、横位・斜位の沈線文を施す。５は胴部無文の鉢形土器で、屈曲部に刻目隆帯が巡り、８字状貼付文がある。堀之内２式期に属する。６は瀬戸製品の皿の底部小破片で、大窯１～２段階と思われる。年代的には 15 世紀末～16 世紀中頃であろう。

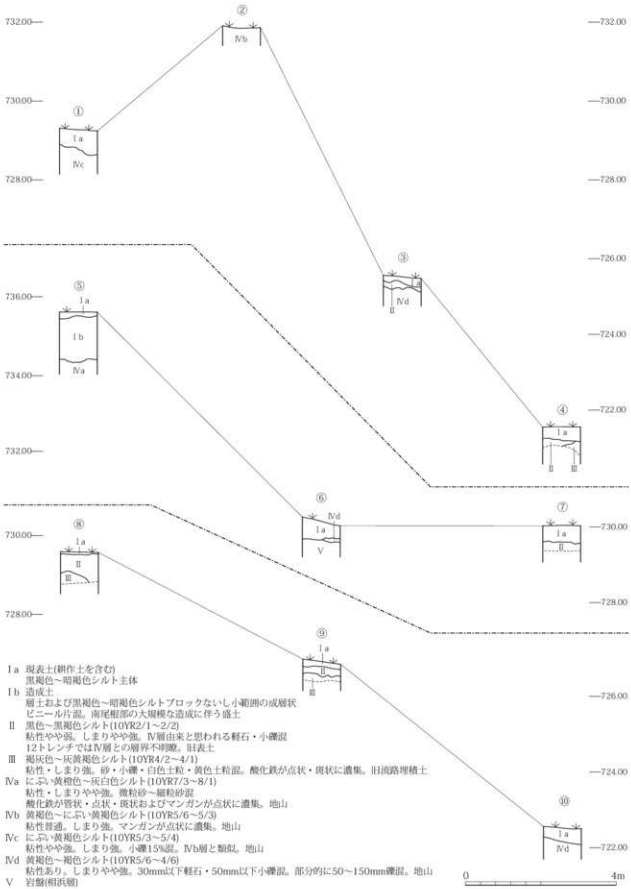
石器は黒曜石製の有茎石鏃２点がある。１は凸基鏃で周縁のみ細かく加工し、両面に広く第一次剥離面を残す。２は、側縁が非対称的である。


X=22400
X=22200
X=22000
X=21800
Y=-28000
Y=-30000
三枚平A遺跡
三枚平B遺跡
滝ノ沢入口遺跡
荒谷古墳
荒谷遺跡
滝ノ沢遺跡
0
100m

第７図　遺跡範囲・位置図

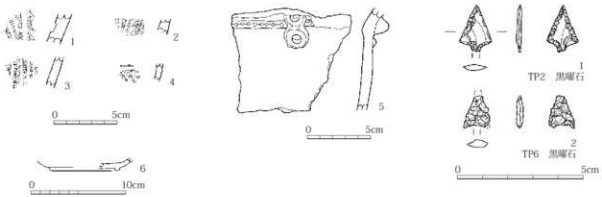


第８図　トレンチ・テストピット配置図



Ⅰa　現表土(耕作土を含む)
　　黒褐色～暗褐色シルト主体
Ⅰb　造成土
　　層土および黒褐色～暗褐色シルトブロックないし小範囲の成層状
　　ビニール片混。南尾根部の大規模な造成に伴う盛土
Ⅱ　黒色～黒褐色シルト(10YR2/1～2/2)
　　粘性やや強。しまりやや強。Ⅳ層由来と思われる軽石・小礫混
　　12トレンチではⅣ層との層界不明瞭。旧表土
Ⅲ　褐灰色～灰黄褐色シルト(10YR4/2～4/1)
　　粘性・しまり強。砂・小礫・白色土粒・黄色土粒混。酸化鉄が点状・斑状に濃集。旧道路埋積土
Ⅳa　にぶい黄褐色～茶白色シルト(10YR7/3～8/1)
　　粘性・しまりやや強。微粒砂～細粒砂混
　　酸化鉄が管状・点状・斑状およびマンガンが点状に濃集。地山
Ⅳb　黄褐色～にぶい黄褐色シルト(10YR5/6～5/3)
　　粘性普通。しまり強。マンガンが点状に濃集。地山
Ⅳc　にぶい黄褐色シルト(10YR5/3～5/4)
　　粘性やや強。しまり強。小礫15%混。Ⅳb層と類似。地山
Ⅳd　黄褐色～褐色シルト(10YR5/6～4/6)
　　粘性あり。しまりやや強。30mm以下軽石・50mm以下小礫混。部分的に50～150mm礫混。地山
Ⅴ　岩盤(相浜層)

第９図　土層柱状図



第10図　出土遺物

第3節　小結

谷部南半の表土層から、縄文・奈良・平安時代、中・近世の遺物がわずかに出土した。調査区域は西側尾根部・東側尾根部とも痩せ尾根で急峻な地形である。河川沿いの低地となる谷部は狭く、耕作土直下で礫層となり、その下層は基盤である。居住に適した場所とは考え難く、遺構が存在する可能性は低いと判断した。

今回の調査対象地の南側約 150m には谷がやや開けた、傾斜の緩やかな場所がある。表土層から出土した遺物は、そこから流れてきたものと推測している。

引用・参考文献

臼田町教育委員会 1988『臼田町遺跡詳細分布調査報告書』臼田町埋蔵文化財調査報告書第 4 集

第５章　寺久保遺跡　庚申塚

第１節　遺跡の概観と調査の概要

寺久保遺跡は佐久市南部の千曲川左岸にある。千曲川に合流する片貝川に向かって東に流れる小河川（相沢川）の左岸、八ヶ岳北麓から北東方向に延びる丘陵の南緩斜面、標高 745～765 m に立地する。遺跡周辺は果樹園・畑地等として利用されていた。『町分布調査』では、縄文時代中期、古墳時代の遺跡として登録されている。寺久保地籍には相法寺・正明寺・根龍寺・薬師堂・地蔵見堂という５つの寺院が存在したという伝承が残り、現在、弥勒寺にある暦應の年号が入った板碑は、元は寺久保にあったものと伝えられる（佐久市・臼田町誌刊行会 2007）。

庚申塚は、寺久保遺跡の南西部に接して所在する。当初、「庚申古墳」として登録されていたが、今回の発掘調査の結果、古墳ではないことが判明したため、市教委は「庚申塚」へと遺跡名を変更した。

引用・参考文献

佐久市・臼田町誌刊行会 2007『臼田町誌』第３巻　考古　古代・中世編

第２節　寺久保遺跡

１　調査の概要と経過

発掘作業は、2012（平成 24）年度～2014 年度の３か年実施し、対象面積は 18,040㎡である（第 11・12 図）。2012 年度は、遺跡の内容を把握するためトレンチを 49 本設定し、調査に臨んだ。その結果、南西から北東側に下る傾斜面に平安時代の竪穴建物跡１軒を検出した。遺物の出土は希薄であった。2013・14 年度は、前年度調査区域の北西側の丘陵尾根頂部、南斜面部に合計 28 本のトレンチを設定し、調査した。その結果、多くの箇所で表土層直下が基盤層あるいは岩盤となり、遺構・遺物がなかったことから、面的調査を行わず終了した。

２　基本層序

基本層序はⅠ～Ⅴ層に大別した（第 13 図）。

Ⅰ層：耕作土・造成土・かく乱を含む調査範囲全体の表土

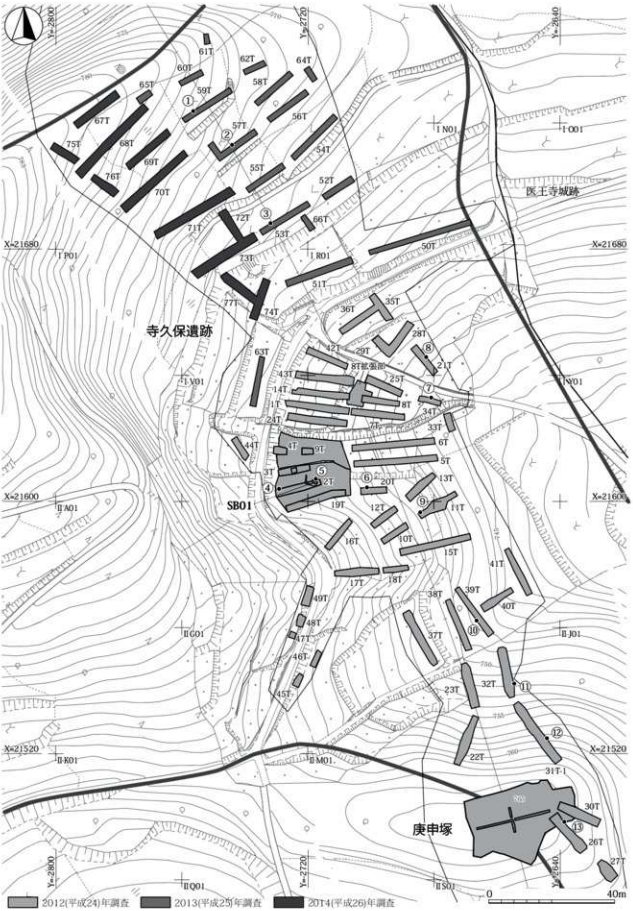
Ⅱ層：調査範囲中央部の緩斜面部～谷部において、Ⅰ層とⅣ層の間に介在する黒褐色土。Ⅱａ層とⅡｂ層に細分でき、Ⅱａ層は竪穴建物跡ＳＢ 01 を覆う

Ⅲ層：庚申塚が位置する南尾根部のみに残存する黄褐色土。上部は軟質だが下位ほど硬質となる

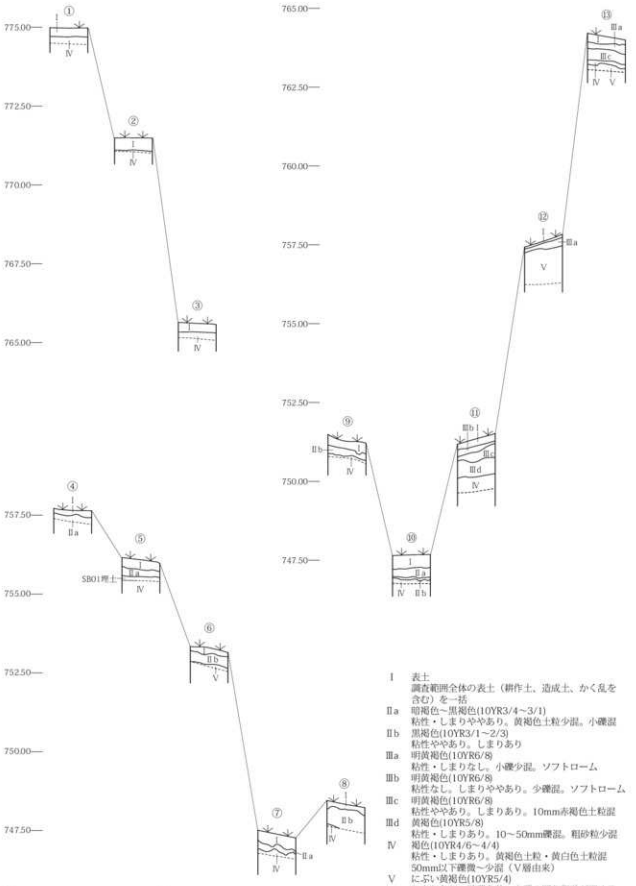
Ⅳ層：硬質の褐色土、調査範囲全域に広く分布する。竪穴建物跡ＳＢ 01 の検出面は本層上面

Ⅴ層：小礫と粗砂で構成される

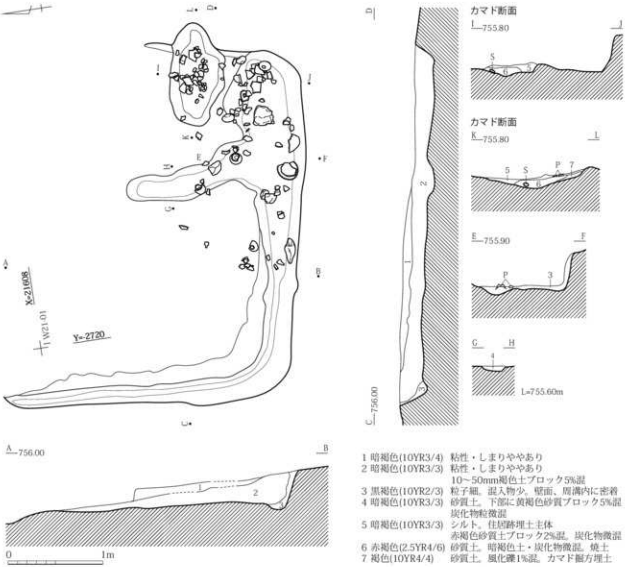
第11図　遺跡範囲・位置図



第12図　トレンチ・調査区配置図


775.00
772.50
770.00
767.50
765.00
765.00
762.50
760.00
757.50
755.00
752.50
750.00
747.50
757.50
755.00
752.50
750.00
747.50
SB01埋土
0
5m
Ⅰ　表土
調査範囲全体の表土（耕作土、造成土、かく乱を含む）を一括
Ⅱa　暗褐色～黒褐色(10YR3/4～3/1)
粘性・しまりややあり。黄褐色土粒少混。小礫混
Ⅱb　黒褐色(10YR3/1～2/3)
粘性ややあり。しまりあり
Ⅲa　明黄褐色(10YR6/8)
粘性・しまりなし。小礫少混。ソフトローム
Ⅲb　明黄褐色(10YR6/8)
粘性なし。しまりややあり。少礫混。ソフトローム
Ⅲc　明黄褐色(10YR6/8)
粘性ややあり。しまりあり。10mm赤褐色土粒混
Ⅲd　黄褐色(10YR5/8)
粘性・しまりあり。10～50mm礫混。粗砂粒少混
Ⅳ　褐色(10YR4/6～4/4)
粘性・しまりあり。黄褐色土粒・黄白色土粒混
50mm以下礫微～少混（Ⅴ層由来）
Ⅴ　にぶい黄褐色(10YR5/4)
しまりあり。砂礫主体。小礫の間を粗砂が埋める
八千穂層群

第13図　土層柱状図



第14図　ＳＢ０１　遺構図

３　遺構と遺物

（１）遺構

ＳＢ01（第14図、ＰＬ７）

位置：ⅠＶ20・ⅠＶ25・ⅠＷ16・ⅠＷ21グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で検出した。**重複関係**：なし。**構造**：床面は地山を平坦にならして形成する。北側は削平されていた。壁は急な角度で立ち上がる。周溝は西・南壁際で検出した。床面には、南壁中央のやや東寄りからカマドの焚口に向かって枝分かれする溝が設けられている。排水などにかかわる溝と推測する。**カマド**：東壁の南寄りにあり、南壁際に袖石と考える礫が出土した。カマドの燃焼部に硬化面はないが、焼土が広がる。**出土遺物**：南側の床面で土師器と須恵器の坏・甕が、カマド右側の周溝内から灰釉陶器皿・埦、須恵器四耳壺、土師器坏・埦・甕が、カマド内から土師器甕、カマド周辺で土師器坏、床面で羽釜や土師器甕が出土した。**時期**：出土遺物から10世紀後半と考える。

（２）遺構出土遺物（第15図）

１～14がＳＢ01から出土した。供膳形態は灰釉陶器皿・埦、黒色土器坏、土師器坏・埦が占め、煮炊

形態は土師器甕と羽釜が共存する。

１～３は灰釉陶器である。１は皿で、底部は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデを施す。口径 12.7cm、器高 2.5cm、底径 6.6cm（全て推定）を測る。２・３は埦である。２の底径は推定 7.0cm、器高は残存部で 2.8cm を測る。３は底部が欠損し、口径は推定で 15.2cm、器高は残存部で 2.4cm を測る。４は黒色土器の坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデの後内面にミガキを施す。口径 11.4cm、器高 3.2cm、底径 5.4cm を測る。５～８は土師器の坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデを施す。５は口径 10.6cm、器高 3.8cm、底径 4.5cm、６は口径 11.3cm、器高 3.7cm、底径 3.7cm を測る。７は口唇部が短く外反しており、口径 10.6cm、器高 3.0cm、底径 4.9cm、８は口径が推定 11.3cm、器高 3.6cm、底径が推定 4.9cm を測る。９は高い高台が付く土師器の埦で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデを施す。また、口唇部には垂れるような付着物が残る。口径 11.2cm、器高 5.6cm、底径 6.3cm を測る。

10～12 は土師器の甕である。10 は小型の甕で、口唇部から体部にかけてナデを施す。口径は推定 23.2cm、器高は残存部で 6.9cm を測り、体部下半から底部は欠損する。11 は中型の甕で、口縁部はナデ、体部上方は粗いナデ、以下は底部にかけてハケを施す。口径 17.2cm、器高 18cm、底径は推定 7.5cm を測る。12 は大型の甕で、口縁部の内外面はナデ、体部の外面は縦方向のハケ、体部の内面は横方向のハケを施す。口径は推定 18.8cm、器高 26.0cm、底径は 9.5cm を測る。13 は同一個体の可能性が高い、羽釜の口縁部から体部上半と体部下半から底部で、外面は鍔状の突帯下部から底部にかけてハケ、内面はナデを施す。口径は 17.0cm、底部は 9.0cm を測る（全て推定）。14 は須恵器の四耳壺で、外面はタタキを施し、内面は当て具痕が残る。口縁部が欠損しており、器高は残存部で 27.2cm、底径 12.8cm を測る。

（３）遺構外出土遺物（第 15 図）

遺構外からは、以下の遺物が出土した。

１～３は縄文土器である。１は幅狭い磨消縄文で三角状、円形の幾何学文を描く。堀之内２式の朝顔形深鉢である。２は胴部に節の大きな斜縄文をまばらに縦位施文する。中期末葉の土器であろうか。３は無文の口縁部が外反する注口土器の把手部分である。４は黒曜石製の平基無茎鏃である。全面に剥離を施し、整った二等辺三角形を呈する。２は黒曜石製で正面・背面に自然面を残し、厚手の不整三角形を呈する。正面の右側縁に連続した急角度の剥離痕があることから、掻器と考える。

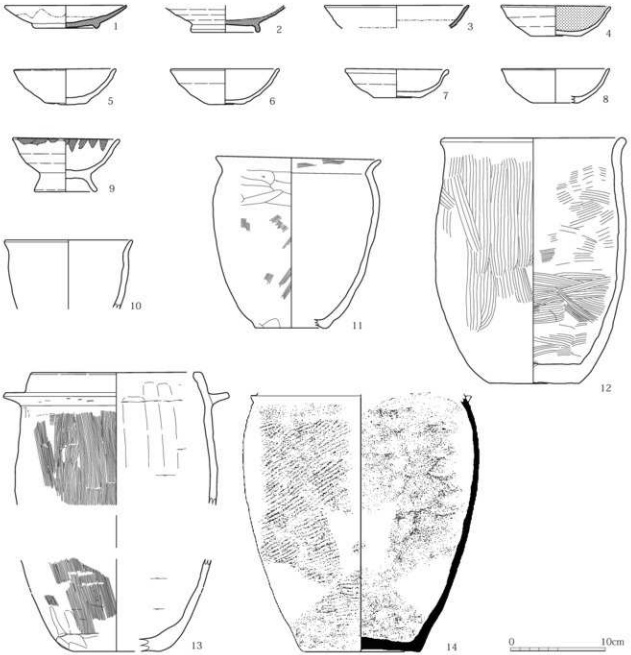
このほか小破片のため図示していないが、Ｔ９－Ｔ 10 拡張部（東西短）の２層中から鉄製品の破片が出土した。残存部は 10 × 7 ㎜の長方形で、厚さ３～1.5㎜、一方の長辺から他方の長辺に向けて薄くなる断面三角形状を呈する。刀子の刀身部の可能性はあるが、現状では用途不明の鉄製品としておく。

第３節　庚申塚

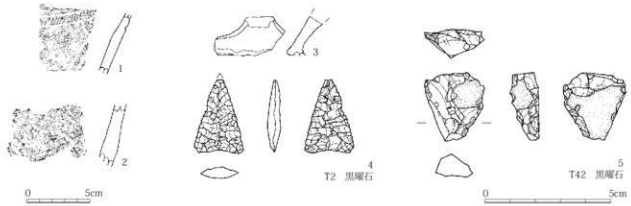
１　調査の方法と経過（第 17 図）

発掘作業は 2012（平成 24）年度に実施した。調査対象面積は 200㎡である。発掘調査以前は、庚申古墳として佐久市の周知の埋蔵文化財包蔵地とされていた。このため、古墳の埋葬施設や版築などの造成痕跡を探るため、墳丘の墳頂部を中心として十文字にトレンチを設定し、作業を進めた。

SB01



遺構外

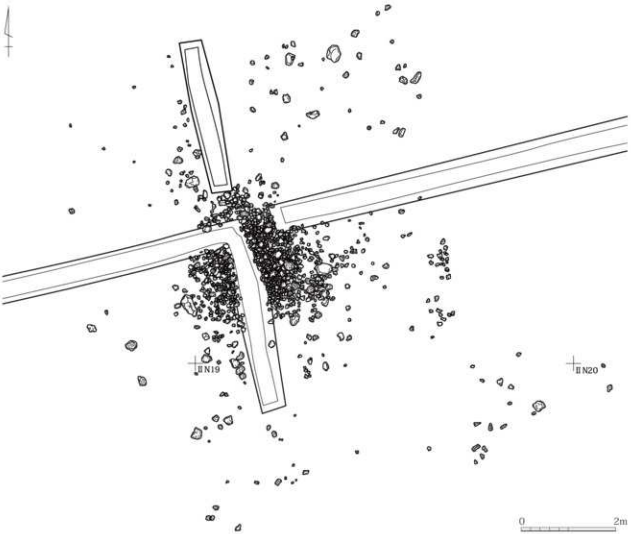


第15図　寺久保遺跡　ＳＢ01、遺構外出土遺物

２　塚の構造と出土遺物（第16・17図）

墳丘部の規模は腐葉土（表土）を取り除いた状態で、直径約3m、高さ60cmを測る。墳丘頂部から約60cmの深さで地山層（寺久保遺跡基本層序Ⅲ層）となる。墳丘部の土層は、１層が腐葉土からなる表土、２層は直径約5cm～20cmの礫を含むにぶい黄褐色の盛土、３層はしまりの弱い黒褐色土である。

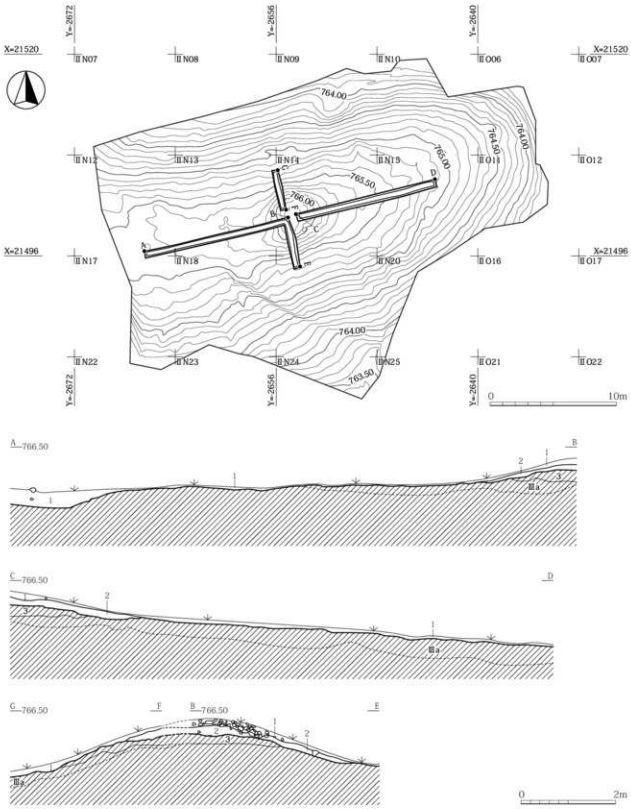
１～３層を除去したが、石室などの施設は確認できなかった。遺物は、１・２層から近現代の陶磁器片と鉄製鎌が出土した。３層からは出土していない。**時期：**出土遺物から近世末期から近代と考える。



第16図　礫出土状況図

第４節　小結

寺久保遺跡で確認された遺構は竪穴建物跡１軒である。佐久平南部では山間部で平安時代後期に小規模集落（山棲み集落）が発見されている。このような集落の成立要因は明確できないが、新たな事例を提示できたと考えている。また、庚申塚は古墳でないことが明らかになったが、近世以降に土と礫を盛り上げたこのような遺構の性格は不明である。中部横断道建設に伴う調査では、「古墳」として調査を始め、調査後「塚」となった事例がほかにもあり、庚申塚もそのうちの一つで、規模的には最も小さい。



1　にぶい黄褐色(10YR5/4)　しまりなし。腐葉土主体層
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)　粘性・しまりなし。盛土。本層上面・1層下部に礫集中
3　黒褐色(10YR3/2)　粘性なし。しまり弱。粒子細。旧表土
Ⅲa　にぶい黄褐色(10YR5/4)　しまり弱。ソフトローム。地山

第17図　平面・断面図

第６章　台ヶ坂遺跡

第１節　遺跡の概観

台ヶ坂遺跡は佐久市南部、旧臼田町の中心街から西方約 700 mに所在する。佐久盆地の千曲川左岸地域には八ヶ岳の北端部から延びる丘陵が幾重にも張り出しているが、遺跡はそうした丘陵北斜面の段丘面上に立地する。標高は 730～727 mを測る。遺跡の範囲は、南北の幅約 100 m、東西方向は遺跡の北側を流れる相沢川に並行する形で約 800 mの長さで段丘面上に広がっている。遺跡の東側は宅地として造成され旭ヶ丘団地となっているが、調査区やその西側は果樹園や畑地として利用されていた。

「町分布調査」によれば、遺跡からは縄文時代の打製石斧と黒曜石製剥片、古墳時代から平安時代の土師器が採取されている。発掘調査歴はない。

第２節　調査の概要

発掘作業は 2008（平成 20）年度に実施し、対象面積は 6,040㎡である。調査はトレンチを設定して行った（第 18・19 図）。その結果、遺構は確認できなかった。調査区の土層は以下のとおりである（第 19 図）。

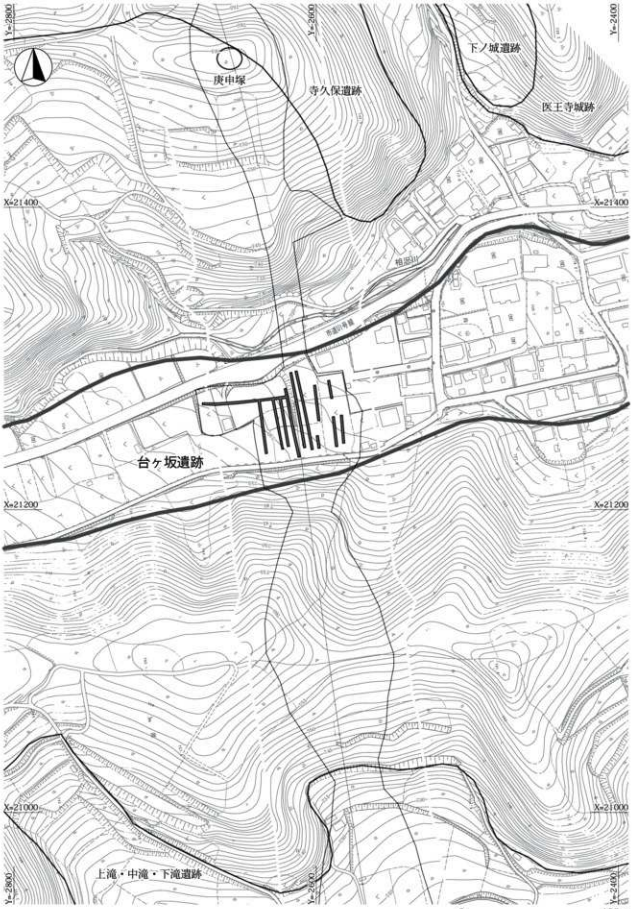
Ⅰ層：表土層である黒色耕作土層　　Ⅱ層：褐灰色粘質土　　Ⅲ層：黒褐色粘質土

Ⅳ層：褐色粘質土（地山）　　Ⅴ層：褐色粘質土　　Ⅵ層：にぶい橙色粘質土（基盤層）

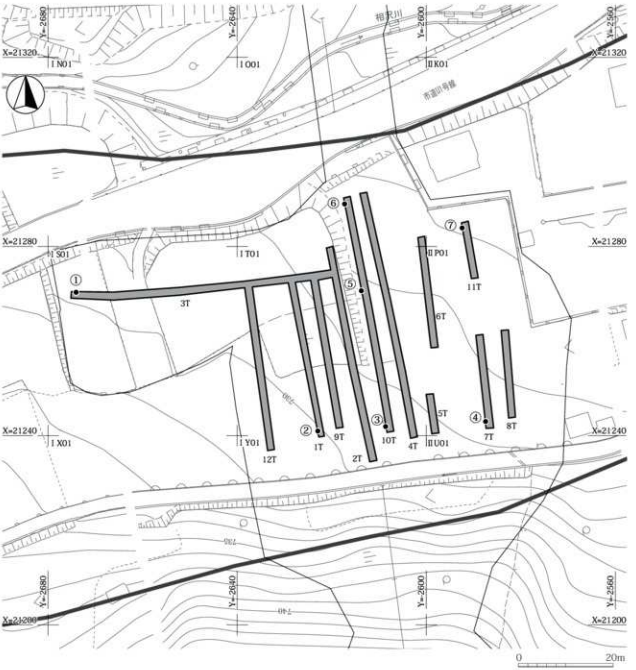
Ｔ８のⅢ層中から縄文時代後期前葉の深鉢胴部片１点、Ｔ２より安山岩製の打製石斧１点（ＰＬ 10）が出土した。

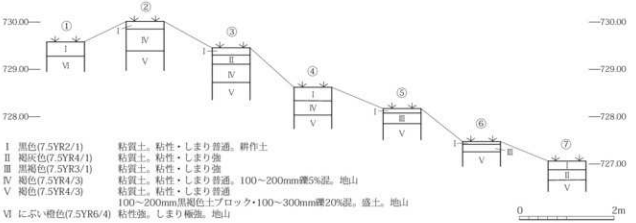
第３節　小結

台ヶ坂遺跡では、調査区域の要所にトレンチを設定、掘削したが遺構は検出できなかった。今回の調査区では耕作土直下にⅣ層やⅤ層が露出している。後世において、農耕地としての開発により、削平を受け遺構が消失した可能性がある。



第18図　遺跡範囲・位置図





Ⅰ　黒色(7.5YR2/1)　粘質土。粘性・しまり普通。耕作土
Ⅱ　褐灰色(7.5YR4/1)　粘質土。粘性・しまり強
Ⅲ　黒褐色(7.5YR3/1)　粘質土。粘性・しまり強
Ⅳ　褐色(7.5YR4/3)　粘質土。粘性・しまり普通。100～200mm礫5%混。地山
Ⅴ　褐色(7.5YR4/3)　粘質土。粘性・しまり普通
100～200mm黒褐色土ブロック・100～300mm礫20%混。盛土。地山
Ⅵ　にぶい橙色(7.5YR6/4)　粘性強。しまり極強。地山

第19図　トレンチ配置図・土層柱状図

第７章　上滝・中滝・下滝遺跡

第１節　遺跡の概観と調査の概要

１　遺跡の概観

上滝・中滝・下滝遺跡は佐久市南部の千曲川左岸に所在する（第20図）。この地域には、八ヶ岳北端部から幾筋もの小河川が流下している。本遺跡は、そのような河川のひとつ滝川左岸沿いの低地部から北側の丘陵裾部に立地する。遺跡範囲は南北方向に最大で約250ｍ、滝川に沿って東西方向に約800ｍの幅をもって広がる。

『長野県史』によると、本遺跡からは縄文時代早期～中期の山形・格子目・楕円押型文土器、撚糸文土器、田戸下層式、茅山式、有尾式、加曽利Ｅ式土器、石鏃などの石器類や石皿の石製品、そして平安時代の須恵器が採集されているという。また、「町分布調査」では、古墳時代～平安時代の土師器が採集されている。

２　調査の概要と経過

発掘作業は、2008（平成20）年度と2010年度に実施した。調査面積は16,640㎡である。

2008年度は、丘陵南裾沿いの市道Ｕ54号線から滝川左岸までの水田地帯の10,540㎡を対象として、トレンチを10本設定し確認調査を行った。その結果、一帯は滝川の氾濫原で、地表下約２ｍまでは場整備によるかく乱を受けており、遺構・遺物は検出できなかった（第21図）。

2010年度は、2008年度調査区の北側、丘陵の南緩斜面部6,100㎡の調査を行った。調査区は地境を基に４地区に分けた（第21図）。

３　基本層序

層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別した（第22図）。

第Ⅰ層：耕作土・造成土・かく乱を含む表土

第Ⅱ層：丘陵斜面部の１区～４区に堆積し、Ⅰ・Ⅳ層の間に介在する黒色土。畑地造成前の旧表土

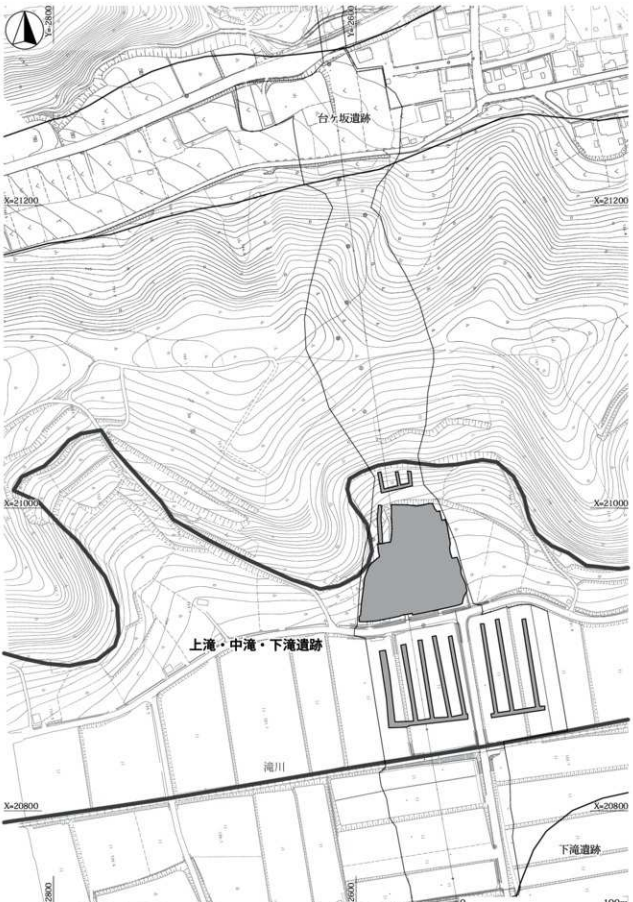
第Ⅲ層：市道Ｕ54号線より南の滝川沿い低地部にみられる滝川が運搬した土砂礫堆積

第Ⅳ層：丘陵斜面部の１区～４区に堆積し、基盤をなす黄褐色土。本層上面が遺構検出面

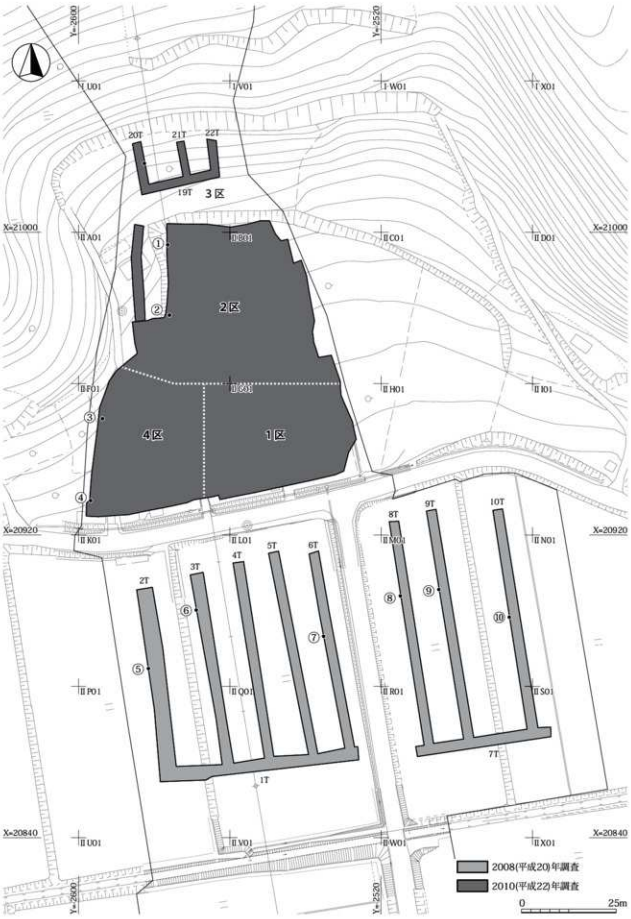
開田前の滝川沿い低地部は、滝川の氾濫や流路変更が繰り返され、不安定な地盤環境にあったことを推測しうる。

引用・参考文献

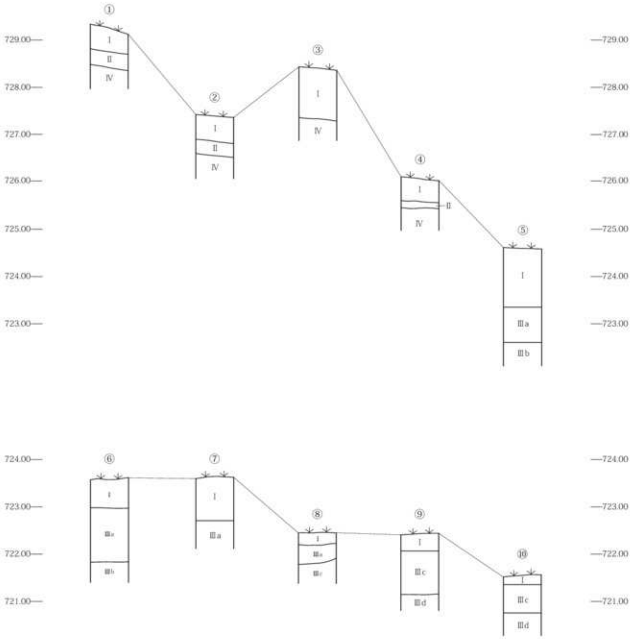
長野県史刊行会 1981『長野県史』考古資料編　全１巻（１）遺跡地名表



第20図　遺跡範囲・位置図



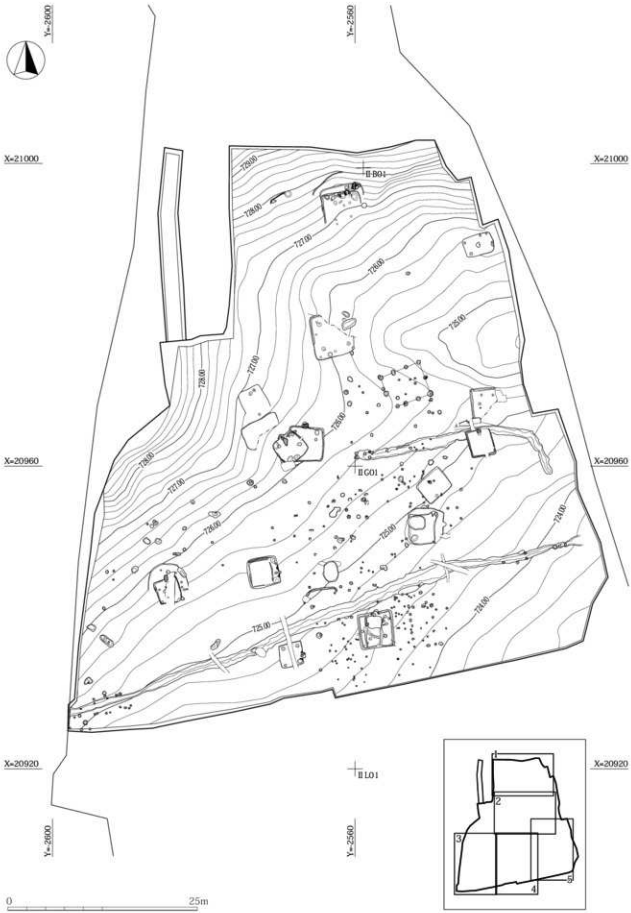
第21図　トレンチ・調査区配置図



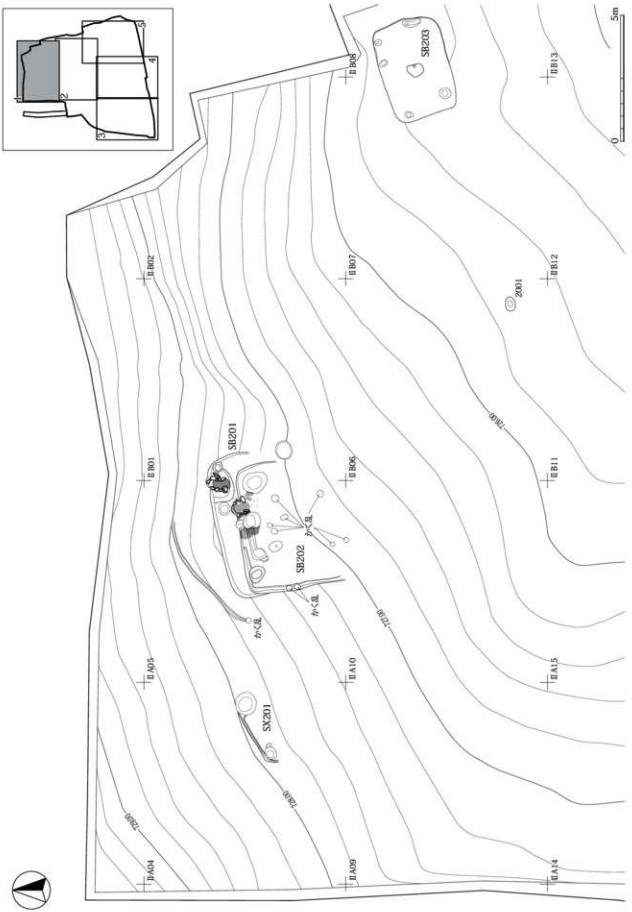
Ⅰ	表土	調査範囲全体（耕作土、造成土、かく乱を含む）の表土を一括する
Ⅱ	黒色(10YR2/1)	シルト。粘性普通。しまり強。5～10mm小礫10%混
Ⅲa	褐色(7.5YR4/3)	粗砂。粘性なし。しまり普通。100～700mm礫20%混
Ⅲb	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色・褐灰色シルト粒10%混 シルト
Ⅲc	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト。粘性・しまり強。2～3mm赤褐色土粒少混
Ⅲd	褐灰色(7.5YR4/1)	粗砂。粘性なし。しまり弱。10～500mm礫20%混
Ⅳ	にぶい黄橙色～明黄褐色 (10YR6/4～6/6)	シルト。粘性普通。しまり強。粗砂・10～100mm礫10%混。地山

0　　2m

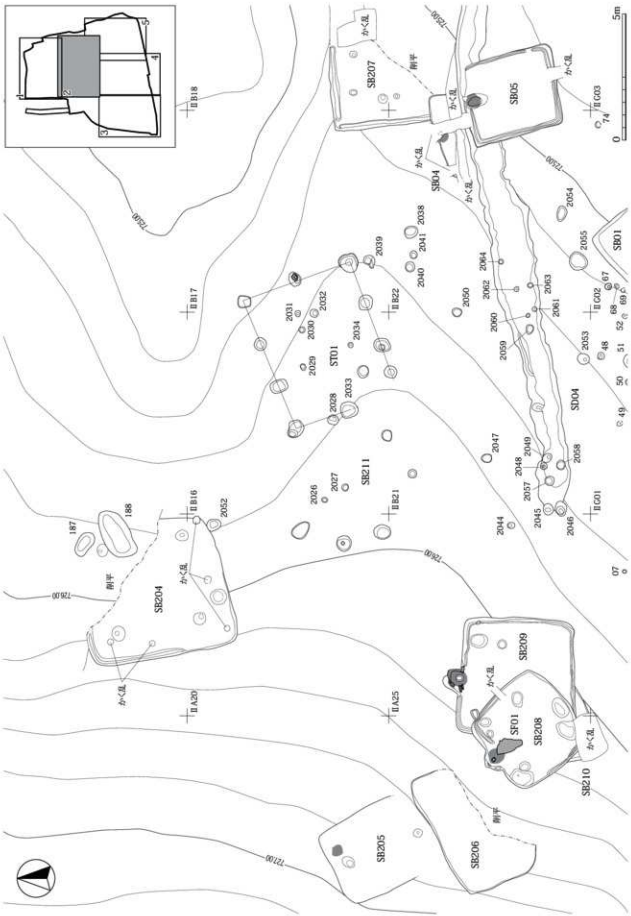
第22図　土層柱状図



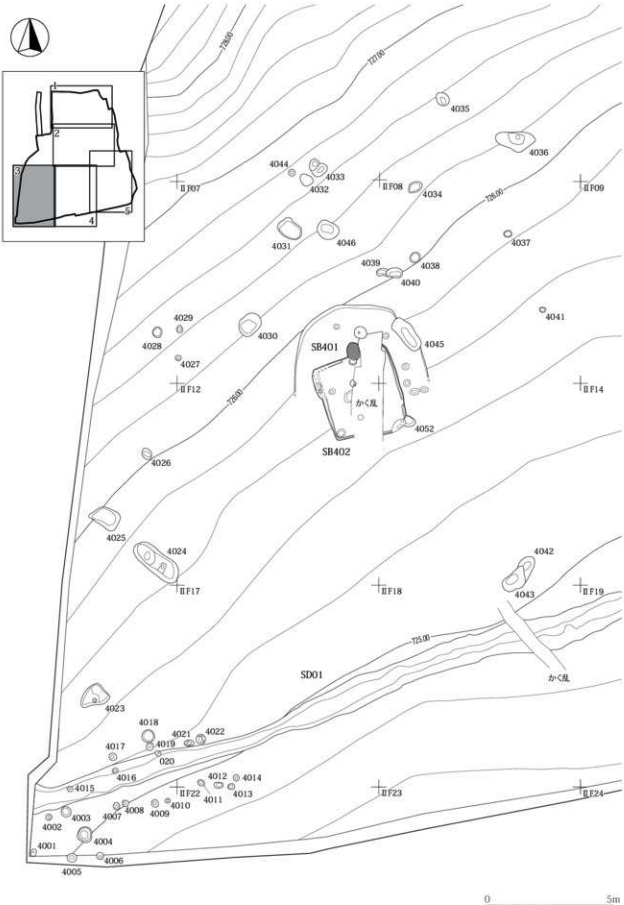
第23図　遺構分布全体図


SB203
SB201
SB202
SX201
2001
かく乱
かく乱
かく乱
B03
B02
B01
B07
B06
B12
B11
B13
A05
A10
A15
A04
A09
A14
0
5m

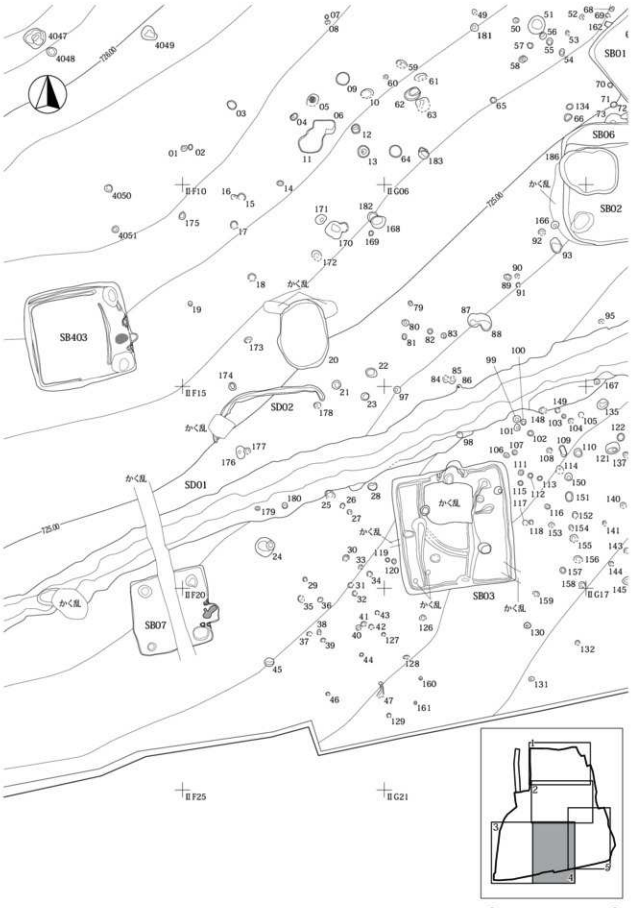
第 24 図　遺構分布図（1）


SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SB08
SB09
SB10
SB11
SB204
SB205
SB206
SB207
SD01
SD04
SF01
海岸
かく乱
5m

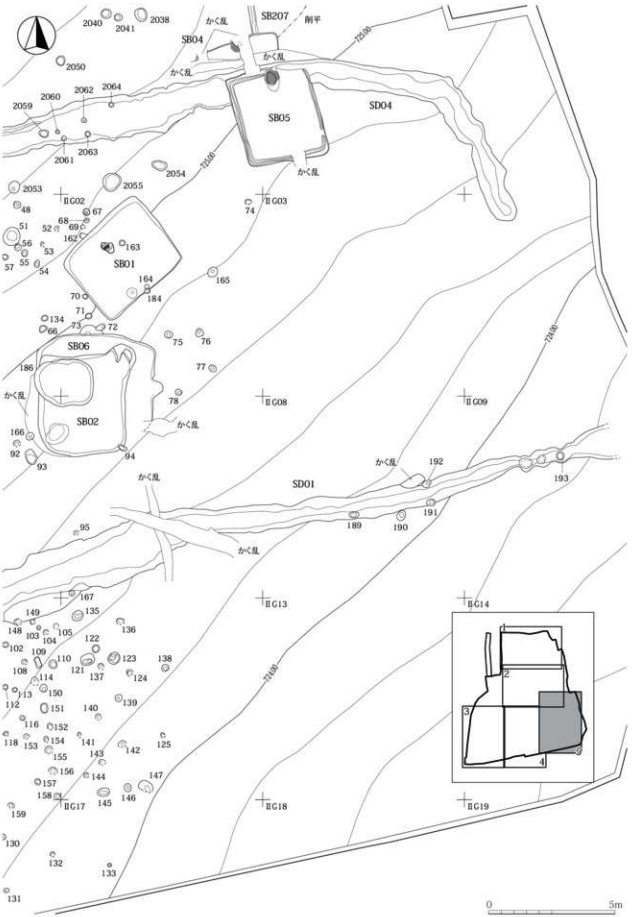
第25図　遺構分布図（２）


1
2
3
4
5
727.00
4035
4036
4044
4033
4032
Ⅱ F07
Ⅱ F08
4034
Ⅱ F09
726.00
4031
4046
4037
4039
4038
4040
4041
4029
4028
4030
SB401
4045
4027
Ⅱ F12
Ⅱ F14
728.00
かく乱
4052
SB402
4026
4025
4024
4042
Ⅱ F17
Ⅱ F18
4043
Ⅱ F19
725.00
SD01
かく乱
4023
4018
4021
4022
4019
4017
020
4016
4012
4014
4015
Ⅱ F22
4011
4013
Ⅱ F23
Ⅱ F24
4010
4008
4009
4007
4003
4002
4004
4001
4006
4005
0
5m

第 26 図　遺構分布図（3）


SB01
SB02
SB03
SB06
SB07
SD01
SD02
かく乱
ⅡF10
ⅡG06
ⅡF15
ⅡF20
ⅡG17
ⅡF25
ⅡG21
72.00
0
5m

第 27 図　遺構分布図（4）


SB04
SB05
SB01
SB02
SB06
SB207
削平
SD01
SD04
かく乱
ⅡG02
ⅡG03
ⅡG08
ⅡG09
ⅡG13
ⅡG14
ⅡG17
ⅡG18
ⅡG19
0
5m

第28図　遺構分布図（５）

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構

竪穴建物跡３軒、土坑１基を検出した。

（１）竪穴建物跡

ＳＢ 203（第29図、ＰＬ３）

位置：Ⅱ B 07・08 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で、黒褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係：**なし。**構造：**床は浅い掘方を伴い、地山の暗褐色土を踏み固めたもの。壁は北東側はほぼ垂直に立ち上がるが、他は後世の削平により残存状況が悪い。柱穴は６基としたがいずれも掘込みが浅い。**炉：**床面の中央にある。検出時に床面上に焼土粒子を認めたが、明瞭な火床面や掘込みはない。**出土遺物：**埋土中より縄文時代前期前葉の土器が出土した。**時期：**出土土器の時期から、縄文時代前期前葉と考える。

ＳＢ 401（第29図、ＰＬ５）

位置：Ⅱ F 07・08 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で、黒褐色土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係：**ＳＢ 402、ＳＫ 4045 に切られる。**構造：**床は地山を利用している。壁は南側が後世の削平のため消失している。残存する西壁から北壁部分では、平坦な床面からやや傾斜した立ち上がりである。柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ７、Ｐ９～15を検出し、Ｐ１・７・９・11・12・13が主柱穴と考えている。柱痕跡は認められない。炉は不明である。**出土遺物：**北西部の床面直上で縄文時代中期初頭の深鉢（第48図３～５）が出土した。**時期：**出土土器の時期から、縄文時代中期初頭と考える。

ＳＢ 211（第29図）

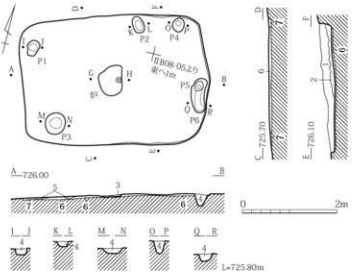
位置：Ⅱ A 20・25、B 16・21 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で検出した。整理作業において、ＳＫ 2037・2043・2042・2036・2035・2028 およびＳＴ 01 Ｐ１が多角形状に並ぶことがわかった。削平された竪穴建物跡の柱穴の残存と判断し、ＳＢ 211 を付番した。ＳＴ 01 Ｐ１は本遺構の柱穴とＳＴ 01 の柱穴とが重複していると考える。ＳＴ 01 Ｐ１の底面北西側にある一段低い落込みが本遺構の柱穴に相当する可能性があろう。**重複関係：**発掘では切合いが明らかにならなかったが、古代のＳＴ 01 に切られると判断する。**構造：**七角形状の配置を取る柱穴のみ残存する。壁・床・その他の付属施設は残存していない。Ｐ１～３、Ｐ５～７の６基が主柱穴と思われる。南端のＰ４は他６基に比べて小形で、性格が異なるかもしれない。**出土遺物：**ＳＴ 01 Ｐ１から、古代土器片とともに、縄文時代中期末から後期初頭と思われる深鉢口縁部片１点が出土している。**時期：**柱穴の配置形態とＳＴ 01 Ｐ１出土土器をもって、縄文時代中期末から後期初頭と推測する。

（２）土坑

ＳＫ 20（第30図）

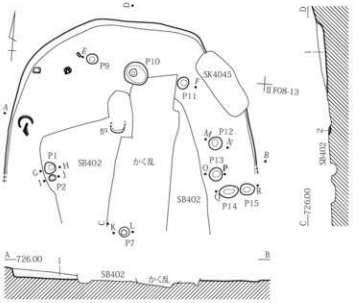
位置：Ⅱ F10 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で、黒褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 2.7m、短軸 1.9m を測り、楕円形を呈す。深さ 22cm を測る。**遺物：**縄文土器の深鉢口縁部から胴部破片とチャート製石匙１点が出土した。**時期：**出土土器の時期から、縄文時代前期初頭と考える。

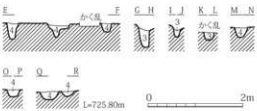
SB203



1 黒褐色(10YR2/2)
粘性強。粒子細。細～10mm黄褐色土粒少混。やや暗色
Ⅳ層に類似
2 暗褐色(10YR3/4)
黄褐色土ブロック・褐色土・10～20mm礫混。やや暗色
Ⅴ層に類似
3 黒褐色～極暗赤褐色(5YR2/2～2/3)
5mm焼土粒少混。暗色。赤化。西側は黄色強
4 黒褐色(10YR2/2～2/3)
粘性・しまりあり。粒子。
細～10mm黄褐色土粒ブロック少混
5 黒褐色(10YR2/2)
黄褐色土粒混。黒色強。掘方理土
6 暗褐色～にぶい黄褐色(10YR3/3～3/4)
黄褐色土と暗褐色土の混合層。黄褐色土粒多混
部分的に黒色強・黄色強。掘方理土
7 暗褐色～褐色(10YR3/4～4/4)
やや暗色。Ⅴ層に類似。掘方理土

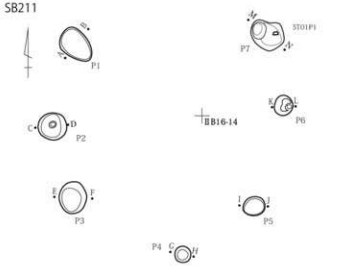
SB401

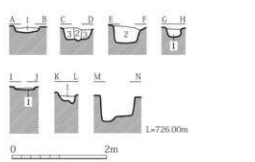




1 黒褐色(10YR2/2～3/2)
粘性あり。粒子細
1～2mm赤褐色土粒・黄褐色土微粒・5～10mm礫混
2 暗赤褐色～にぶい赤褐色(5YR3/4～4/4)
焼土ブロック主体。暗黄褐色土混
3 黒褐色(10YR2/2～2/3)
黄褐色土細粒混。部分的に黄褐色土ブロック混
4 暗褐色(10YR3/3～3/4)
黄褐色土細粒多混

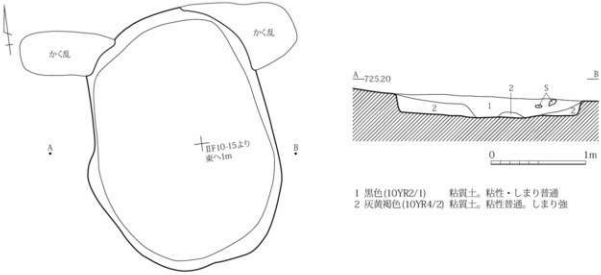
SB211





1 黒褐色(10YR3/1)
粘性普通。しまり強。5 ～ 10mm赤褐色土粒少混
2 黒褐色(10YR3/1)
粘性普通。しまり弱。黄褐色土粒少混
3 にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性・しまり普通。黒褐色土ブロック30%混

第29図　ＳＢ２０３・４０１・２１１　遺構図



第30図　ＳＫ２０　遺構図

２　遺物

（１）土器

ＳＢ 203（第 48 図１・２）

いずれも胎土に繊維を含む。１は縄文ＲＬを縦位施文する。２は異原体で横位羽状縄文を施文する。前期前葉であろう。

ＳＢ 401（第 48 図３～５）

３は小形の鉢である。磨滅が著しい。口縁部には、幅が異なる爪形文２列を施す隆帯が巡り、４単位の橋状把手となる。把手下には同種の隆帯で、一対となる同心円文と菱形文を配す。底部外周に口縁部と同様の隆帯が巡り、意匠文から垂下する隆帯と接するらしい。胎土に粗粒砂・細礫を多く含み、黒褐色を呈する。本例は在地で製作された北裏ＣⅡ式系に属す可能性があり、五領ヶ台式系との共伴事例として重要である。４は筒状の深鉢胴部である。４単位の低い縦位隆帯から、やや離れて両側に沈線が垂下する。地文と隆帯上に縄文 LR を施文し、一部羽状となる。胎土に多量の雲母を含み、橙褐色を呈する。５は外反する頸部から屈曲して、口縁部が直立する深鉢である。口縁部は形態が異なる５単位の波状と推定でき、波頂部に円孔を空ける部分がある。波頂部下を縦区画する。口縁部の横位隆帯間に、幅狭い多截竹管状工具で、深い右下がりと浅い左下がりの斜格子文を施した後、幅広い同種工具でクランク文を描き、横位隆帯をなぞってはみ出した格子目文を消す。頸部は縄文 LR を施文後、下図部分のみに縦位平行沈線文を描く。砂を多く含み、橙褐色を呈する。

ＳＫ 20（第 52 図）

いずれも胎土に繊維を含む。１・２は外反する無文の口縁部に隆帯が巡り、口端部とともに斜めに刻む。隆帯以下は斜縄文を施す。３・４は異原体で菱形羽状縄文を構成する。５～７は斜縄文を施し、胴下半部から底部付近である。磨滅のため原体は不明瞭であるが、６など０段多条の原体と推定する。これらは前期初頭の塚田式土器である。

遺構外（第53図１～23）

１は口縁部を巡る隆帯に、上下交互の押圧を施す。縄文時代早期末葉の可能性がある。２は羽状縄文を施す底部付近の破片、３・４は斜構成の縄文で前期初頭と推測する。３は内面に擦痕が残る。５は口縁部に最大径をもつ深鉢である。磨滅が著しいが、横位施文した縄文ＬＲが観察できる。縄文時代前期後半に属する可能性がある。６～15は縄文時代中期初頭の土器である。６～10・12は半截竹管状工具で集合沈線文・斜格子目文を施す。11・13～15は多截竹管状工具の内面で描いた縦・横の半隆起線文間に斜格子目文を施す。14は雲形文風の意匠である。16は節が大きい縄文ＬＲを施す。時期は不詳であるが、５と同種の可能性がある。17は２条単位の低隆帯で意匠を描く。加曽利ＥⅢ式新段階の土器であろう。18は無文の口縁部に隆帯を貼り付け、連続して強く押圧する。縄文時代後期初頭の土器と推測する。19は３条の沈線が斜行し、縄文ＬＲを施す。縄文時代後期前葉の土器と推測する。20は外反する無文の口頸部に、Ｖ字状の刻み隆線がある。堀之内２式期の鉢である。

21は２条の沈線と節が細かい縄文ＬＲを施す。胎土に砂が少なく、内面に擦痕が見えることから、弥生時代中期の壺形土器と考える。22・23は弥生時代中期の甕形土器で、22の口縁部には櫛描波状文と簾状文を、23の胴部には矢羽状の条線を描く。

出土土器のまとめ

本遺跡では縄文時代前期初頭・前葉、中期初頭・末葉、後期前葉の土器が散発的に出土している。この中で、竪穴建物跡ＳＢ401出土資料は注目される。第48図５の口縁部の格子目文と円孔は、新潟県上越市和泉Ａ遺跡（新潟県教育委員会1999）のほか、飯綱町上赤塩遺跡（寺内1991）、長野市上浅野遺跡（笹澤ほか2001）など、北信地方の五領ヶ台式並行期土器に見られる。格子目文にクランク文を描く土器は、上田市上田原遺跡25号土坑（上田市教育委員会1996）に１点、明瞭なクランク文を描いた例がある。辰野町北湯舟Ａ遺跡Ｃ地区１号住居跡（辰野町教育委員会1995）には、多数出土した個体の複数にクランク文が見られる。同住居跡出土土器は、五領ヶ台Ⅱａ式の一括資料といわれており（縄文セミナーの会2009ｂ）[1]、本遺跡例の帰属時期を推定する根拠となる。

第48図３はやや器高が低いものの、円筒形深鉢に近い器形である。爪形文を施す複列の横位隆帯、小ぶりの橋状把手は、東海地方に分布の中核がある北裏Ｃ式に見られ、同心円文は環状文に通ずる。北裏ＣⅠ式は長野県の九兵衛尾根Ⅰ式、北裏ＣⅡ式は九兵衛尾根Ⅱ式に並行することが確認されている（増子2008）[2]。円筒形深鉢の器形と、五領ヶ台Ⅱａ式と考えた第48図５との共伴関係から、本例を北裏ＣⅡ式、九兵衛尾根Ⅱ式の古い部分に並行するものと推定する。胎土の状態から、在地で製作された可能性が高い。松本盆地が分布の北限となることが知られているが、本例はそれを超えた位置にあり、五領ヶ台式系との共伴事例としても重要である。

（２）石器・石製品

石鏃（第54図１～17、ＰＬ10）

石材は１・３～５・10・13・が黒曜石、そのほかはチャートである。３・11～17は未製品またはその可能性があるものである。完成品と考える形態は、10が有茎で他は凹基無茎鏃である。５以外基部の抉りは浅く、側縁が直線的か外湾気味で、短い脚部が尖るものが多い。６・７はやや長身で、その他は長さと幅が近い。10は長身の凸基有茎鏃である。未製品の３・11・12は厚身で基部を加工していない。14～16は完成品の可能性もあるが、側縁が非対称形である。17は素材の形状に近いものであろう。13は

1　同書154ページの今村啓爾氏のコメント。

2　北裏Ｃ式土器に関する記述全般は、同書を参考にした。

周縁に細かい剥離を行い、削器の可能性もある。

石錐（第54図18～20、ＰＬ10）

18はチャート、19・20は黒曜石製である。18は縦長剥片を素材とし、一側縁を剥離成形して、幅広いつまみ部を作る。最も薄い先端には加工を施さず錐部としている。19・20は厚手の剥片が素材らしく、急角度の剥離により全体を角錐状に成形する。

石匙（第54図21～23、ＰＬ10）

３点ともチャート製である。21・22は横型である。21は全周縁を剥離し、下縁は細かく剥離して直線的な刃部を作る。22は横長剥片を素材とし、刃部の半分程度を欠損する。つまみは刃部に対して斜めに付く可能性がある。23はつまみを欠損した縦型と推定するが、石匙としては長身であり、先端を欠損した石槍の可能性もある。全体に厚みがあり、断面は紡錘形を呈す。両側縁から全面を剥離し、直線的な刃部を作る。

微細な剥離がある剥片（第54図24～26、ＰＬ10）

いずれも黒曜石である。24は縦長剥片の一側縁に細かい剥離痕が並ぶ。25は断面三角形の厚みがある剥片の２側縁に、急角度の剥離痕がある。26は横長剥片の側縁の一部に剥離痕がある。

削器（第54図27）

厚みのある黒曜石の横長剥片を素材とする。下縁に表裏両面から剥離を行い、直線的な刃部を作る。

両極石器（第55図28、ＰＬ10）

黒曜石で、角柱状の側面に上下端からの剥離面がある。下端は潰れている。

玦状耳飾（第55図29・30、ＰＬ10）

いずれも軟玉製で、複数の孔を有する欠損品である。29は環体の断面が偏楕円形に近く、丸みがある。30は断面が長方形に近く、稜がある。孔はいずれも両面穿孔である。

打製石斧（第55図31～33、ＰＬ10）

いずれも安山岩で、横長剥片を素材とする。31は欠損部が見られないが長さが短く、相当使い込まれたものであろう。32は基部側の側縁が幅狭く剥離されている。着柄のための加工と推定する。33は刃部幅が広い撥形を呈する。

石鍬（第55図34、ＰＬ10）

安山岩の板状礫の周縁を剥離し、両面に自然面を広く残す。基部側半分程度を欠損し、刃部幅は10.1cmを測る。

礫器（第55図35）

安山岩の厚手剥片を素材とし、背面に第１次剥離面が残る。上側の周縁を剥離して刃潰し、下側の周縁には、使用によると推定する細かな剥離痕が並ぶ。背面に微弱な摩耗痕がある。

横刃型石器（第55図36、ＰＬ10）

安山岩である。側縁から大まかな剥離を行って薄身に成形し、下端側を細かく剥離して削器状の刃部を作る。

砥石（第55図37・38、ＰＬ10）

いずれも凝灰岩である。37はやや不整な角柱状の大形品である。四面を砥面とし、長軸方向の擦痕がある。38は扁平の小形品である。正面・背面を砥面とし、長軸・短軸、斜め方向の擦痕がある。

敲石（第55図39、ＰＬ10）

棒状円礫の下端に敲打痕が集中し、背面の一部に浅い凹状の敲打痕がある。

凹石・磨石類（第 56 図 40～43、ＰＬ 10）

石材はいずれも安山岩である。40～42 は不整な球状を呈する。40 は側面と上端に敲打痕、下端に磨痕がある。41 は断面が不整な菱形をなし、側面の１面に磨痕、両端部に微弱な敲打痕がある。42 は上端に微弱な敲打痕、側面と下端に磨痕がある。43 は平面が楕円形で、扁平の形状を呈する。平面に微弱な磨痕、周縁全体に敲打痕がある。

石核（第 56 図 44・45）

いずれもチャートである。44 は裏面に第一次剥離面を残し、厚い剥片が素材と推定する。45 は断面三角形を呈する。主に正面図の右側から加撃し、背面では打面転移している。

参考・引用文献

今村啓爾 1985『五領ヶ台式土器の編年』『東京大学文学部考古学研究室紀要』４

上田市教育委員会 1996『上田原遺跡』

笹澤浩ほか 2001「上浅野遺跡」『豊野町誌１豊野町の資料（１）考古資料』豊野町

縄文セミナーの会 1995a『第８回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』

縄文セミナーの会 1995b『第８回縄文セミナー　中期初頭の諸様相―記録集―』

縄文セミナーの会 2009a『第 22 回縄文セミナー　中期初頭の再検討』

縄文セミナーの会 2009b『第 22 回縄文セミナー　中期初頭の再検討―記録集―』

増子康眞 2008『北裏Ｃ～北屋敷Ⅱ式土器』『総覧縄文土器』アム・プロモーション

辰野町教育委員会 1995『北湯舟Ａ遺跡』

寺内隆夫 1991『長野県上水内郡三水村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について』『長野県考古学会誌』61・62

新潟県教育委員会 1999『和泉Ａ遺跡』

三上徹也 1987『梨久保式土器再考』『長野県埋蔵文化財センター紀要』１

第３節　古墳時代の遺構と遺物

１　遺構

竪穴建物跡を２軒検出した。

（１）竪穴建物跡

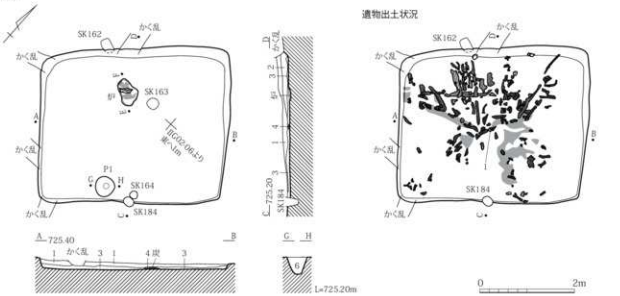
SB01（第 31 図、ＰＬ２）

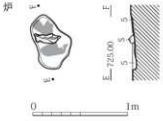
位置：Ⅱ G02 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で、土器破片および炭化材・炭化物粒土をわずかに混入する黒褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係：**SK162・163・164・184 に切られる。**構造：**床面は地山を利用したもの。壁は床面からやや急角度で立ち上がり、南東壁の一部が削平を受け不明瞭である。**炉：**浅い地床炉である。埋土に炭化物、焼土粒子が混じる。炉石は残存する。火床は炉の南東部で若干赤化を観察した。**出土遺物：**床面近くから台付甕の台部片、土師器の鉢もしくは高坏の坏部片が出土した。床面直上で炭化した建築部材が出土している。出土状態から、壁あるいは屋根の木舞、広木舞と推測されるが、柱材や梁材などの主要材は確認できなかった。**時期：**出土遺物から古墳時代前期と考える。

SB204（第 31 図、ＰＬ４）

位置：Ⅱ A15・20 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で黒褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。**重複関**

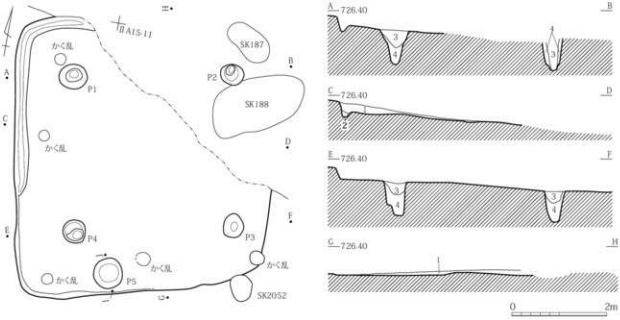
SB01





1 黒褐色(10YR3/1)
粘質土。粘性・しまり普通。10mm炭化材少混
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性普通。しまり強。5～10mmにぶい黄橙色土粒20%混
3 黒褐色(10YR3/1)
粘質土。粘性強。しまり普通。炭化材50%混
4 焼土ブロック
5 黒褐色(5YR3/1)
粘質土。粘性・しまり普通。5mm炭化材10%・10～20mm赤褐色粘土ブロック20%混
6 暗褐色～にぶい黄褐色(10YR3/4～4/3)
暗褐色土主体。にぶい黄褐色土大ブロック・10～20mm炭化物混

SB204



1 黒褐色(10YR3/1)
粘質土。粘性普通。しまり強。5mm赤褐色土粒少混
2 黒褐色(10YR3/1)
粘質土。粘性・しまり普通。5mm赤褐色土粒10%混
3 黒褐色(10YR3/1)
粘質土。粘性・しまり普通。5mm赤褐色土粒10%混
4 にぶい黄褐色(10YR5/4)
粘性普通。しまり強。黒褐色土40%混
5 黒色(10YR2/1)
粘質土。粘性普通。しまり弱。5mm赤褐色土粒・少礫少混
6 黒褐色(10YR3/1)
粘性弱。しまり普通。黄褐色土混

第31図　ＳＢ０１・２０４　遺構図

係：SK2052 に切られる。SK187・188 については、上部が削平されているため新旧関係は不明である。**構造**：床は浅い掘方を伴い、これを埋め戻して床面としている。壁は平坦な床面からやや外傾しながら立ち上がり、北東～南東部の壁が削平により失われていた。柱穴はＰ１～５の５基あり、Ｐ１～４が主柱穴と考えた。柱穴間は芯々で南北方向の東側と西側の列で共に 3.4m、東西方向の南側と北側列で同じく 3.4m を測り、平面形は正方形を呈している。Ｐ５は入口施設に伴うものと考えた。**炉**：なし。**出土遺物**：Ｐ３・４から台付甕、埋土中からはＳ字状口縁の甕の破片が出土した。**時期**：出土遺物から古墳時代前期と考える。

２　遺物

SB01（第 48 図８～10）

８は鉢もしくは高坏の坏部、９は縦にハケ調整される土師器甕で、いずれも小片である。11 は台付甕の台部である。

SB204（第 48 図６・７、ＰＬ７）

６は、最大径を上半部にもつ球胴の台付甕で、口縁部が大きく外反する。頸部下にわずかにハケ目が残るが大部分磨滅している。７はＳ字状口縁の甕の口縁部破片で、頸部下に斜めのハケ目が見える。

第４節　古代の遺構と遺物

１　遺構

竪穴建物跡 16 軒、掘立柱建物跡１棟、土坑 20 基、溝跡３条、焼土跡１か所などを検出した。

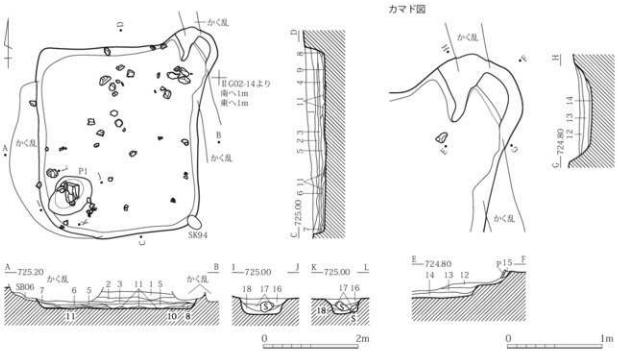
（１）竪穴建物跡

SB02（第 32 図、ＰＬ２）

位置：Ⅱ G01・02・06・07 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で軽石粒を含む黒褐色土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係**：SK94 に切られ、SB06、SK186 を切る。**構造**：床面は平坦で地山を利用したもの。壁は、床面からやや急角度で立ち上がる。Ｐ１を検出したが、柱穴はない。**カマド**：北東隅にある。構築材の礫がカマド西側の床面に散在する。火床は不明瞭である。**出土遺物**：埋土から内黒の坏破片、Ｐ１からは須恵器坏、西壁際では火襷の残る須恵器坏、住居跡中央の床面直上では須恵器坏が出土した。また、カマドやその周辺からは土錘が６点出土した。**時期**：出土遺物から８世紀前半と考える。

SB03（第 33 図、ＰＬ２）

位置：Ⅱ G11・16 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係**：なし。**構造**：床面は浅い掘方を伴い、埋め戻して平坦面を構築したもの、硬化面はない。壁は平坦な床面からやや急角度で立ち上がる。柱穴は、Ｐ１～４で、ほぼ正方形に配置する。柱穴間は芯々で南北方向の東列と西列で共に 2.0m、東西方向の南列で 2.0m、北列で 2.2m を測る。周溝はカマド部分を除く壁際で全周する。このほか付属施設として、床面の西側に南北に延びる溝、東側にも溝が確認できた。これらの溝は、間仕切りあるいは床板などを支える根太の痕跡という可能性もあるが、不明である。**カマド**：北壁の中央にあり、煙道部は住居跡の奥壁を掘り込んで構築している。カマドの焚口から燃焼部にかけて平坦で、燃焼部に硬化した火床はない。両袖の基部は灰褐色土を用いて構築されていたが、芯材の礫や粘土はない。**出土遺物**：カマドから土師器の武蔵甕、溝１内から須恵器甕、カマドの西脇の周溝内では須恵器甕



1　黒褐色(10YR3/1)　粘質シルト。5mm軽石混。耕作土か
2　褐灰色(10YR4/1)　シルト。小礫混
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)　シルト。黒褐色シルト混
4　暗褐色(10YR3/4)　極細粒砂混シルト　小礫・炭化物・焼土多混
5　暗褐色(10YR3/3)　細～極細粒砂混シルト。シルトやや強　褐色シルトブロック多混
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)　極細粒砂混シルト。小礫多混
7　褐色(10YR4/6)　極細粒砂混シルト。壁崩落土混
8　暗褐色(10YR3/3)　極細粒砂混シルト。シルトやや強
9　暗褐色(10YR3/4)　シルト。粘性やや強　小礫・炭化物粒・焼土混
10　暗褐色(10YR3/4)　極細粒砂混シルト。小礫混
11　にぶい黄褐色(10YR5/3)　シルト。小礫多混
12　暗褐色(10YR3/4)　極細粒砂混シルト。明赤褐色細粒砂ブロック・明黄褐色シルトブロック混
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)　シルト。明赤褐色細粒砂ブロック・黄褐色シルトブロック多混。炭化物粒混
14　暗褐色(10YR3/4)　細～極細粒砂混シルト。黄褐色シルトブロック・炭化物粒混
15　褐色(7.5YR4/4)　細～極細粒砂混シルト。焼土主体。煙道部埋土
16　黒褐色(10YR2/3)　シルト混極細粒砂。シルトやや強。小礫混
17　にぶい黄褐色(10YR4/3)　シルト。小礫・土器・石混
18　黒褐色(10YR3/2)　シルト。粘性やや強　明黄褐色細～極細粒砂混シルトブロック混

第32図　ＳＢ０２　遺構図

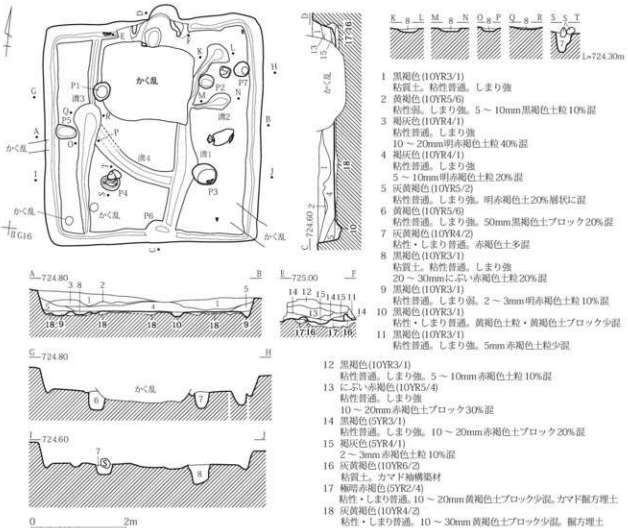
が出土し、その他、埋土から土師器の甕片、須恵器の坏片が少量出土している。**時期**：出土土器から８世紀代と考える。

SB04（第34図、ＰＬ２）

位置：Ⅱ B22・23グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で、南北方向のトレンチにより本跡のカマドの焼土が検出でき、その焼土の粒子が混入する暗褐色土の広がりを竪穴建物跡と認定した。本跡の南側やカマドの東側はかく乱により広範囲に破壊されていた。**重複関係**：SB207を切る。SB05、SD04に切られる。**構造**：床面は地山層を利用したもの。床面直上には炭化物粒子や焼土粒子を混入する褐色土が堆積していた。壁は床面から外傾しながら緩やかに立ち上がる。**カマド**：北壁の中央部にある。東側はかく乱により壊されているが、袖石の抜取り痕を確認できた。西側では袖石用の礫や赤化した火床面、焼土粒子を多量に混入する暗褐色土が残存していた。**出土遺物**：出土量はわずかで、埋土中より須恵器の坏片が出土した。**時期**：出土遺物から８世紀代と考える。

SB05（第34図、ＰＬ２）

位置：Ⅱ B22・23グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で検出した。かく乱の断面土層観察で、炭化物を混入する暗褐色土を埋土とする本跡を検出し、平面方形のプランを確定した。**重複関係**：SB04を切り、SD04に切られる。**構造**：床面は平坦で地山層を利用したもの。壁は床面からやや急角度で立ち上がる。周溝は北



第33図　ＳＢ０３　遺構図

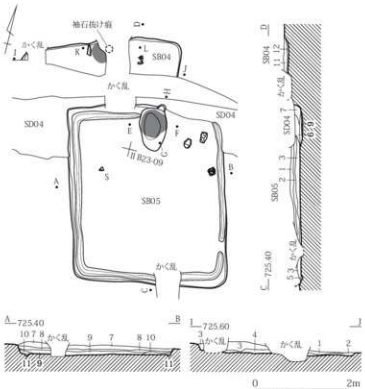
壁中央部のカマド部分とカマドの東側を除いた箇所でほぼ全周する。**カマド**：北壁の中央部にあり、火床と考えられる焼土の広がりを確認した。**出土遺物**：カマドおよびその周辺の床上から黒色土器の坏、埦、土師器の甕が出土した。**時期**：出土遺物から９世紀前半と考える。

SB06（第35図）

位置：Ⅱ G01・02・06・07 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で極細粒砂を混入する暗褐色シルト質土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係**：SB02、SK186 に切られる。**構造**：床は地山層を平坦にして利用している。壁は、南壁と西壁のほとんどは SB02 と重複で失われていた。残存する北と東の一部で、床面から緩やかに立ち上がる壁面を検出した。**カマド**：東壁のほぼ中央部に壁面を掘り込んだ煙道部分と考えられる張出しが認め、同箇所の床面に若干の焼土の散在があり、カマドが存在したと考える。**遺物**：なし。**時期**：SB02 より古く、カマドを伴うことから８世紀前半以前と考える。

SB07（第35図、ＰＬ３）

位置：Ⅱ F14・15・19・20 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黄褐色土粒ブロックが混入する灰褐色粘質土を埋土とする落込みを確認した。**重複関係**：なし。**構造**：床面は地山層を平坦にして利用している。壁は床面からやや外傾しながら直線的に立ち上がる。柱穴は、主柱穴と考えられるＰ１～４を検出した。いずれ



SB04

1　暗褐色(10YR3/4)
　極細粒砂質シルト
2　褐色(7.5YR4/3)
　極細粒砂質シルト。シルト強
　赤褐色極細粒砂質シルトブロック(焼土起源)極多混
3　暗褐色(10YR3/4)
　シルト。小礫混
4　暗褐色(10YR3/4)
　シルト。明褐色シルトブロック・赤褐色極細粒砂質
　シルトブロック(焼土起源)・炭化物粒多混
5　暗褐色(10YR3/4)
　極細粒砂質シルト。焼土ブロック・炭化物粒混
6　暗褐色(10YR3/4)
　シルト。小礫・炭化物粒混。カマド煙道部埋土

SB05

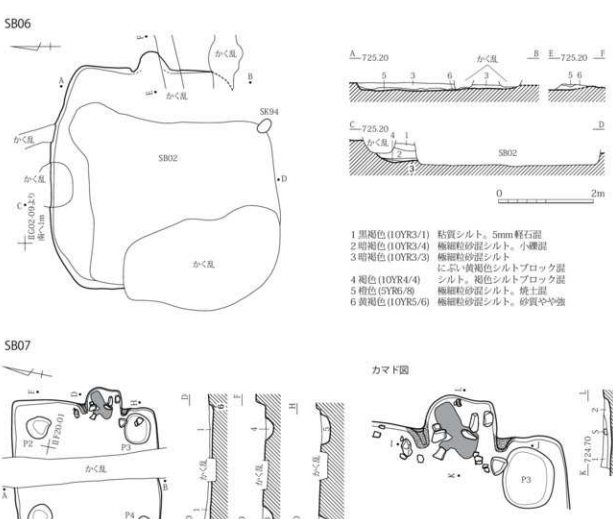
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　極細粒砂質シルト。1mm軽石・小礫混
8　褐色(10YR4/4)
　シルト。小礫混
9　暗褐色(10YR3/3)
　シルト。小礫多混
10　暗褐色(10YR3/3)
　細～極細粒砂質シルト。褐色シルト混極細粒砂ブロック・
　褐色極細粒砂ブロック・焼土多混。炭化物粒混
11　黒褐色(10YR3/2)
　シルト。暗赤褐色シルト(焼土起源)ブロック多混
12　褐色(10YR4/4)
　極細粒砂質シルト。砂質やや強
　暗赤褐色シルト(焼土起源)ブロック混
　カマド袖石抜け痕
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　極細粒砂質シルト。小礫・炭化物粒混
14　暗褐色(10YR3/3)
　シルト。明褐色シルトブロック・炭化物粒混
15　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　極細粒砂質シルト
　褐色シルトブロック・明褐色シルトブロック多混
　炭化物粒混
16　暗褐色(10YR3/4)
　シルト。小礫・炭化物粒混

第34図　　ＳＢ０４･０５　遺構図

も埋土は単層で、柱痕跡はない。柱穴間は、南北方向の東列（Ｐ2-3 間）と西列（Ｐ1-4 間）で共に 2.2m、東西方向の南列（Ｐ3-4 間）と北列（Ｐ1-2 間）はともに 2.0m を測る。**カマド：**東壁中央のやや南に寄った位置にあり、壁を「コ」に字状に掘り込んで構築されている。内側には火床が確認できた。また、袖芯材用の礫がカマド内や西壁付近に散在し、火床の両側には褐色土の袖基部が残存していた。**出土遺物：**カマド内、周辺の床面上から須恵器杯、黒色土器埦、武蔵甕、Ｐ３で須恵器坏、土師器甕が出土している。**時期：**出土遺物から８世紀後半と考える。

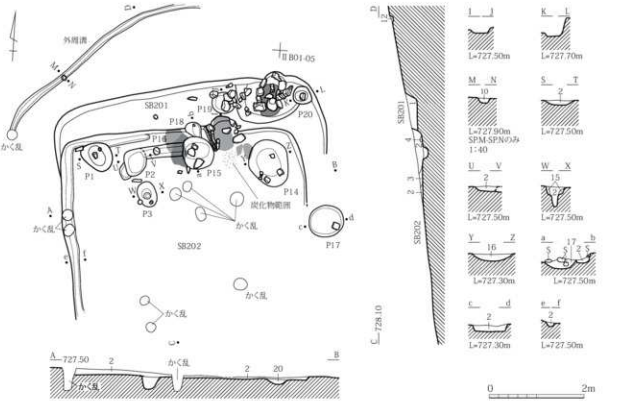
SB201（第36図、ＰＬ３）

位置：Ⅱ A05・B01 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で焼土と礫を混入する黒褐色～暗褐色粘質土を埋土とする台形プランを確認した。南東側は削平のため、欠落していた。**重複関係：**SB202 に切られる。**構造：**床



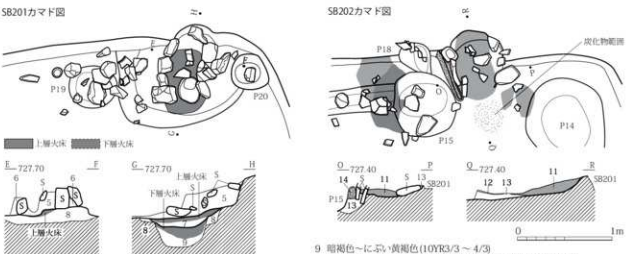
第35図　ＳＢ０６・０７　遺構図

面は地山を床面として利用している。壁は外傾ながら直線的に立ち上がる。柱穴はＰ 19・20 はカマドの両脇にあることからカマドに伴う支柱と考える。Ｐ 17 は掘込みが浅い。特徴的な付属施設として、北壁の外に幅 10～15㎝、深さ約 10cm の溝がある。丘陵の斜面上方からの雨水流入に対処するための外周溝と考える。**カマド**：北壁の東隅にある。両袖に大型礫を芯材として構築している。右袖の一部には方形に面取りされた礫を用いていた。両袖の粘土材は残っていないが、遺存状態は天井部分を除いて良好である。カマドの西側には天井部などの構築材に使われていたと推測する大型の礫が散在していた。**遺物**：床面直上からは緑釉陶器の香炉片、埋土からは黒色土器高台付坏、カマドやその周辺からは黒色土器高台付



SB201カマド図

SB202カマド図



SB201埋土

1　黒褐色～暗褐色(10YR3/2 ～ 3/3)
　粘性・しまり強。粒子細。黄褐色土粒微混。やや暗色

SB202埋土

2　黒褐色～暗褐色(10YR3/2 ～ 3/3)
　粘性・しまり強。粒子細。1 ～ 2mm黄褐色土粒5%混

3　褐色(10YR4/6)
　粘性・しまり強。粒子細。黄褐色土粒ブロック主体
　黄褐色土・5mm以下焼土粒・炭化物粒混

4　暗褐色(10YR3/4)
　黄褐色土粒25 ～ 40%混。炭化物粒混

SB201カマド

5　暗赤褐色(5YR3/2 ～ 3/3)
　粘性強。しまりあり。粒子細。黄褐色土細粒混
　下部に1 ～ 10mm焼土粒ブロック少混。炭化物粒少混

6　黒褐色～暗褐色(10YR3/2 ～ 3/3)
　粘性・しまり強。粒子細。SB埋土に類似

7　暗赤褐色・赤褐色(5YR3/6・4/6)
　しまり弱。焼土粒混。炭化物粒少混

8　黒褐色～暗褐色(10YR3/2 ～ 3/3)
　しまりあり。粒子細。50mm黄褐色土ブロック・黄褐色土細粒少混
　炭化物粒微混。カマド掘方埋土

9　暗褐色～にぶい黄褐色(10YR3/3 ～ 4/3)
　しまり強。細～ 20mm黄褐色土粒ブロック多混。炭化物微混
　掘方下部のピット埋土

SB201外周溝

10　暗褐色(10YR3/3)
　しまりあり。粒子細。黄褐色土細粒混。SB201外周溝埋土

SB202カマド

11　暗赤褐色(5YR3/4)
　粘性あり。粒子細。焼土粒ブロック多混。炭化物粒混。焼土

12　黒色～黒褐色(10YR2/1 ～ 2/2)
　炭化物層。薄いレンズ状堆積

13　暗褐色(10YR3/3)
　粘性・しまり強。粒子細。焼土細粒・炭化物粒少混

14　暗褐色(10YR3/3)
　黄褐色土ブロック多混。焼土粒少混。カマド袖構築材

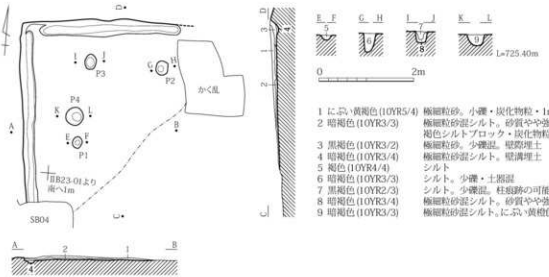
SB202ピット

15　褐色(10YR4/4 ～ 4/6)
　粘性・しまり強。粒子細。東側に黄褐色土ブロック混

16　黒褐色(10YR2/3)
　粘性強。しまりあり。粒子細。微細～ 2mm黄褐色土粒・1 ～ 10mm焼土粒
　ブロック・1mm以上炭化物粒多混。下部に黄褐色土ブロック混

17　黒褐色(10YR2/3)
　黄褐色土細粒・細～ 5mm焼土粒多混。炭化物粒混
　北側に黄褐色土ブロック混

第36図　ＳＢ２０１・２０２　遺構図



第37図　　ＳＢ２０７　遺構図

坏、土師器坏・甕、灰釉陶器皿が出土している。また、本跡北側の外周溝内からは灰釉陶器の埦が出土した。**時期**：出土遺物から10世紀前半と考える。

SB202（第36図、ＰＬ３）

位置：Ⅱ A05・B01 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面でSB201の南側に焼土粒子を混入する黒褐色土を埋土とする本跡を検出した。**重複関係**：SB201を切る。**形状・規模**：床面は地山を平坦にならして利用し、一部は踏み硬められていた。壁は平坦な床面からやや外傾しながら立ち上がっている。ピットは６基あり、柱穴はＰ３、Ｐ１とＰ14は貯蔵穴か、Ｐ２・15・18はカマドや上屋構造に伴うものか、用途・機能は不明である。**カマド**：北壁中央の東寄りにある。袖部分は芯材の礫が若干残る。左袖は基部が造出しにより掘り残された地山の黄褐色土が残存していた。煙道の煙出し部は被熱による赤化が著しい。また、カマドの西側約1mの床面には、被熱による赤化した焼土面がある。この焼土面は旧カマドの痕跡と考える。**出土遺物**：Ｐ１からは黒色土器坏、Ｐ３から黒色土器高台付坏と土師器高台坏、Ｐ14内では黒色土器の高台付坏が出土した。周溝からは紡錘車、西壁寄りの床面直上で鉄鎌が出土した。カマドからは須恵器甕、土師器甕、黒色土器坏、土錘が出土している。**時期**：出土遺物から９世紀後半と考える。

SB205（第40図、ＰＬ４）

位置：Ⅱ A19・24 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で、火床と考えられる被熱面と黒褐色土粒子を混入する黄褐色土のほぼ方形の浅い落込みを検出した。**重複関係**：SK2051、2056に切られる。**構造**：床は地山を利用し、床表面は踏込みによると考える黒褐色土が薄く固着し、硬化していた。壁は削平のため消失している。**カマド**：検出時に火床を確認し、上部は不明である。**出土遺物**：床面直上で黒色土器の高台付埦、須恵器坏が出土した。**時期**：出土土器から９世紀以降と考える。

SB206（第40図）

位置：Ⅱ A24 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色粒子を混入する埋土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**構造**：床は地山を利用し、南方向に若干傾斜する。壁は南東部が削平のため消失していた。壁面の立ち上がりは緩やかである。カマド（かま）などの施設は認められない。**出土遺物**：なし。**時期**：不明。

SB207（第37図、ＰＬ４）

位置：Ⅱ A22・23 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で炭化物粒子を若干混入する暗褐色土～黒色土の落込みを

検出した。**重複関係**：SB04 に切られる。**構造**：床は地山を利用し、東方向に緩やかに傾斜している。壁は東壁・南壁が削平とかく乱により消失している。壁面は、残存する箇所ではほぼ垂直に立ち上がる。柱穴はＰ１～４を検出した。Ｐ１～３が主柱穴と考えられる。周溝は壁が残存する北壁、西壁際で確認した。**カマド**：なし。**出土遺物**：黒色土器坏底部片が出土した。**時期**：出土遺物から９世紀前半と考える。

SB208（第38図、ＰＬ４）

位置：Ⅱ A24・25 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒子を少量含む黒褐色土の落込みを検出した。**重複関係**：SB209、SB210 を切る。本跡北西隅の一部はかく乱によって壊されていた。**構造**：床は、全体的に浅い掘方を埋め戻し、中央付近が硬化している。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴はＰ１～７を検出した。Ｐ７はカマドと正反対の南東壁中央付近に位置することから、入口施設にかかわる掘込みと考える。他のＰ１・３・４については、床面上の相対する位置になく、掘込みが浅い。周溝は一部に確認できた。**カマド**：北東壁の中央部にある。燃焼部の火床面と煙道の立ち上がり付近は、被熱により赤化し硬化が著しい。燃焼部中央には支脚石が残存する。構築材として用いられた礫や粘土などはない。**出土遺物**：カマド周辺から須恵器高台付坏、須恵器蓋、土師器甕が、カマド東脇の掘方内から黒色土器埦が出土している。南西の壁際では黒色土器埦が出土した。**時期**：出土遺物から８世紀後半と考える。

SB209（第38図、ＰＬ４）

位置：Ⅱ A24・25 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を埋土とする本跡を確認した。**重複関係**：SB208 に切られ、SB210 を切る。**構造**：地山を床面として利用している。南壁、東壁は、削平のため床面近くまで消失している。壁面は、北壁、西壁で平坦な床面から垂直に近い状態で直線的に立ち上がる。柱穴は、Ｐ１～４の４本を検出したが、位置的に主柱穴とは考えにくい。周溝は消失部以外ではカマドを除き全周する。**カマド**：北壁中央のやや西寄りにある。焚口付近から燃焼部や煙道部分は被熱により赤化し、硬化が著しい。袖の芯材礫が左袖に３点、右袖で１点残存していた。粘土等の構築材は確認できないが、支脚痕跡が検出できた。**出土遺物**：カマド内からは、土師器甕、須恵器坏、須恵器高台付盤、土師器坏が出土している。**時期**：出土遺物から８世紀前半と考える。

SB210（第38図）

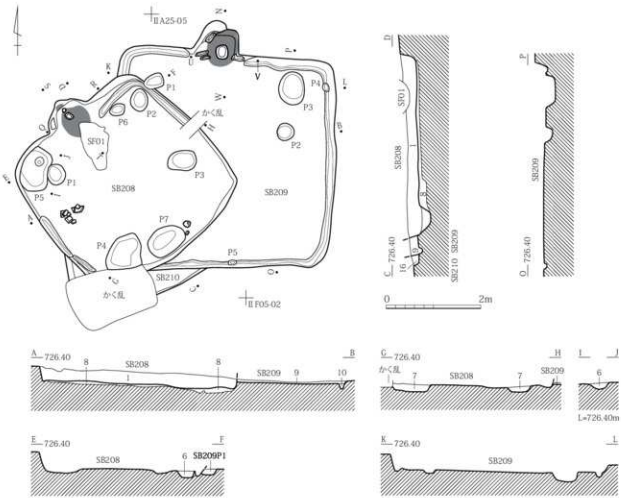
位置：Ⅱ A24・25、Ⅱ F04・05 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で SB209 と重複する黒褐色土の落込みを確認し、平面的に精査し建物跡と認定した。**重複関係**：SB208、SB209 に切られる。**構造**：残存する形状から方形建物跡と考える。床は地山を利用している。壁は平坦な床面から急角度で立ち上がる。**カマド**：なし。**出土遺物**：なし。**時期**：SB208 に切られることから８世紀後半以降と考える。

SB402（第39図、ＰＬ５）

位置：Ⅱ F07・08・12・13 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で、焼土粒子を混入する黒褐色土を埋土とする方形の落込みを検出した。**重複関係**：SB401 を切り、SK4052 に切られる。**構造**：地山を床面として利用している。壁面は、削平のため遺存状態は良くない。やや外傾しながら立ち上がる。柱穴は、Ｐ３～６・８の５基あるが、主柱穴は不明である。周溝の一部は壊されているが、本来は全周していたと推測する。**カマド**：北壁中央部のやや東寄りにある。被熱により赤化し、硬化した火床面が確認できた。**出土遺物**：カマド部分から土師器の甕が出土した。**時期**：出土遺物から８世紀代と考える。

SB403（第39図、ＰＬ５）

位置：Ⅱ F09・14 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で軽石粒を混入する暗褐色土を埋土とする本跡を検出した。**重複関係**：なし。**構造**：床は地山を利用している。壁は床面からやや外傾気味に立ち上がる。北壁と西壁では周溝と壁の間に幅６～10cm 程度の帯状の空間がある。壁に板材などを設置するために設けられたと考えられる。主柱穴は確認できない。周溝は部分的に残り、東壁から約 90cm 内側に東壁に並行する南北

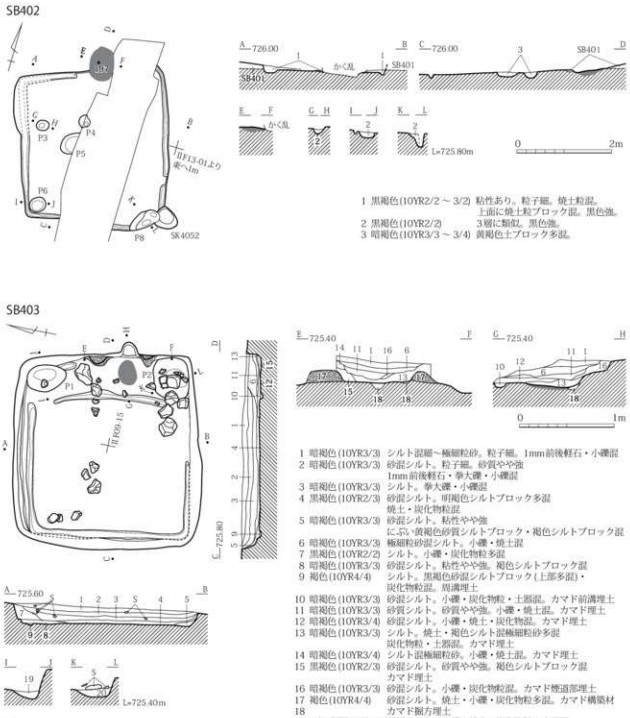


SB208カマド図

SB209カマド図

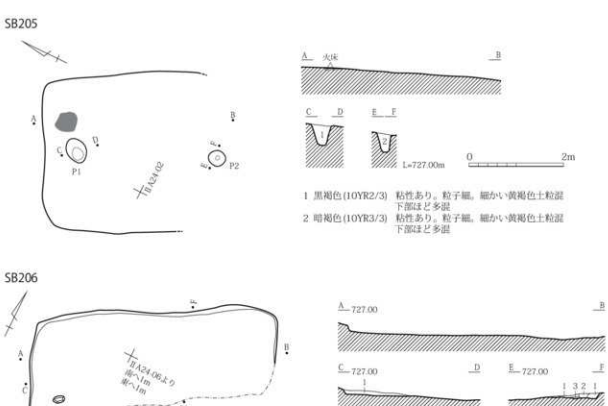
SB208
1　黒褐色(10YR3/1)　粘質土。粘性普通。しまり強
　　2～10mm赤褐色。土粒少混
2　黒褐色(10YR2/3)　しまり強。焼土粒少混
3　黒褐色(10YR2/2)　粘性・しまりあり。焼土粒混
4　暗褐色(7.5YR3/4)　粘性あり。しまり弱
　　焼土粒・炭化物・灰粒多混
5　黒褐色(10YR2/3)　粘性・しまりあり
　　SB209カマド支脚石掘方理土
6　黒褐色(10YR3/1)　粘性・しまり普通
　　50mm黄褐色土ブロック10%混
　　灰褐色土ブロック微に20%混
7　黒褐色(10YR3/1)　粘性・しまり普通
8　黒褐色(10YR3/1)　粘性・しまりあり。掘方理土
SB209
9　黒褐色(10YR3/1)　粘質土。粘性・しまり普通
　　5mm黄褐色土粒10%混
10　褐灰色(10YR4/1)　粘質土。粘性・しまり普通
　　5～10mm黄褐色土ブロック20%混
11　黒色(10YR2/1)　粘性・しまり普通
　　10～20mm黄褐色土ブロック少混
12　黒褐色(5YR3/1)　粘性・しまり普通
　　1～2mm焼土粒10%混
13　暗褐色(7.5YR3/4)　粘性あり。しまり弱
　　焼土粒・炭化物・灰粒多混
14　黒褐色(10YR2/2)　粘性・しまりあり。焼土粒混
15　黒色(10YR2/1)　粘性・しまり強
　　SB209カマド袖石掘方理土
SB210
16　黒色(10YR2/1)　粘土質。粘性普通。しまり強

第38図　　ＳＢ２０８・２０９・２１０　遺構図



第39図　ＳＢ４０２・４０３　遺構図

方向の溝がある。排水等にかかわる溝なのか不明である。**カマド**：東壁中央のやや南寄りにある。焚口付近から燃焼部にかけて被熱による赤化、硬化した火床が明瞭に残っており、焼土、炭化物、粘土が散在していた。袖石等の構築材は原形を留めていないが、袖の基部と考えられる褐色土が燃焼部の両側に残っていた。また、本跡カマド付近や床面西側では約 15～40㎝の被熱痕跡のある巨礫が散在していた。**出土遺物**：Ｐ１から須恵器高台付坏、Ｐ２では土師器甕が出土している。**時期**：出土遺物から８世紀前半と考える。

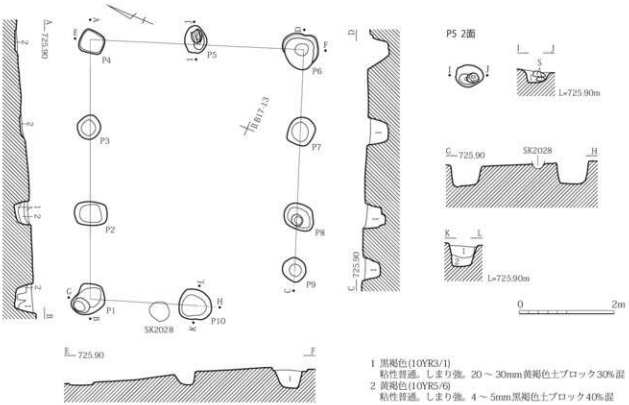


第40図　ＳＢ２０５･２０６　遺構図

（２）掘立柱建物跡

ST01（第41図）

位置：Ⅱ B16・17・21 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で検出した。黒褐色粘質土、黄褐色粘質土の落込みをピット群とする規則性をもつ集合体として認めた。**重複関係**：本跡のピット群に囲まれて位置する土坑SK2028～2034との関連性や先後関係は明らかではない。**埋土**：Ｐ１～10に共通する埋土は、１層に黒褐色粘質土、２層に黄褐色粘質土である。いずれからも柱痕は認められていないが、Ｐ８の底部には柱の当たりを示す段下げがある。本跡は中央付近から北西方向に削平されていたため、Ｐ３・４では埋土１層が削除され、２層のみが残る。なお、東側の南北柱穴列中央に位置するＰ５から礫が２点出土した。**形状・規模**：平面形状は東西方向に長軸をもち、芯々間で桁行5.4m、南北方向の梁行4.4mを測る長方形を呈する。北側の東西柱穴列は各柱間が1.8m間隔で均等に配されるが、南側の東西柱穴列では西側Ｐ８と９の間隔が1.1mと狭い。また、東側と西側の南北柱穴列は2.2mで均等を保つものの、南西隅柱穴に該当するＰ９が東側に短く不規則な状態である。**遺物**：Ｐ１より土師器坏、土師器甕、須恵器坏の小破片、縄文土器片が、Ｐ２より土師器坏、土師器甕の小破片が、Ｐ８から土師器甕・黒色土器坏の小破片、Ｐ９から土師器甕破片が出土した。なお、Ｐ２・６・７より出土した石器の剥片は混入遺物と判断している。時期：出土遺物から９世紀と考える。



第41図　　ＳＴ０１　遺構図

（３）土坑

SK05（第 42 図）

位置：Ⅱ F05 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む褐灰色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 50cm、短軸 45cm を測り、楕円形を呈する。最深部で 35cm を測る。上面中程より直径 20cm の柱痕跡を検出し、底部面まで垂直に届く。**遺物：**縄文土器片が１点出土した。**時期：**縄文土器が出土したが時期不明と判断する。

SK24（第 42 図）

位置：Ⅱ F15 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**直径 75cm の円形を呈する。東側底面は一段深く掘り下げられており、深さは 32cm を測る。**遺物：**埋土中より土師器の甕片が出土した。**時期：**出土遺物から８～９世紀と考える。

SK36（第 42 図）

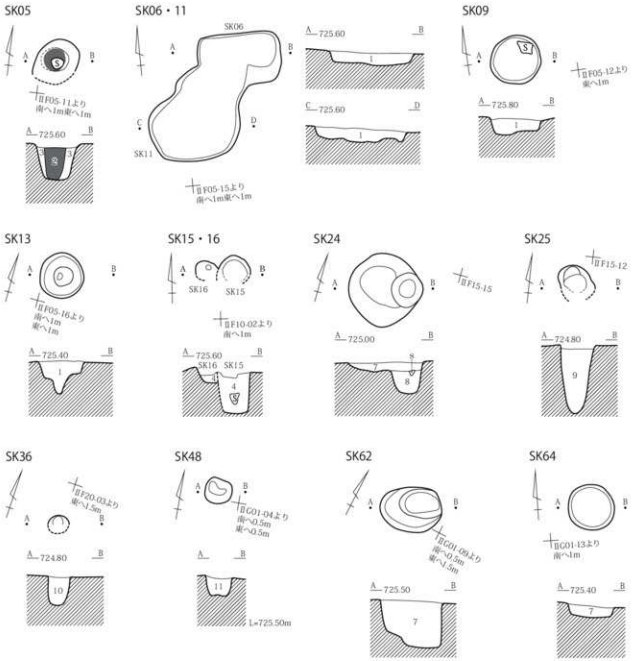
位置：Ⅱ F15 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 25cm、短軸 17cm のやや楕円形を呈し、、最深部で 30cm を測る。**遺物：**なし。**時期：**不明。

SK48（第 42 図）

位置：Ⅱ G01 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 28cm、短軸 26cm を測り、ほぼ円形を呈する。最深部で 28cm を測る。**遺物：**須恵器甕片と黒色土器坏片が出土した。**時期：**出土遺物から８～９世紀と考える。

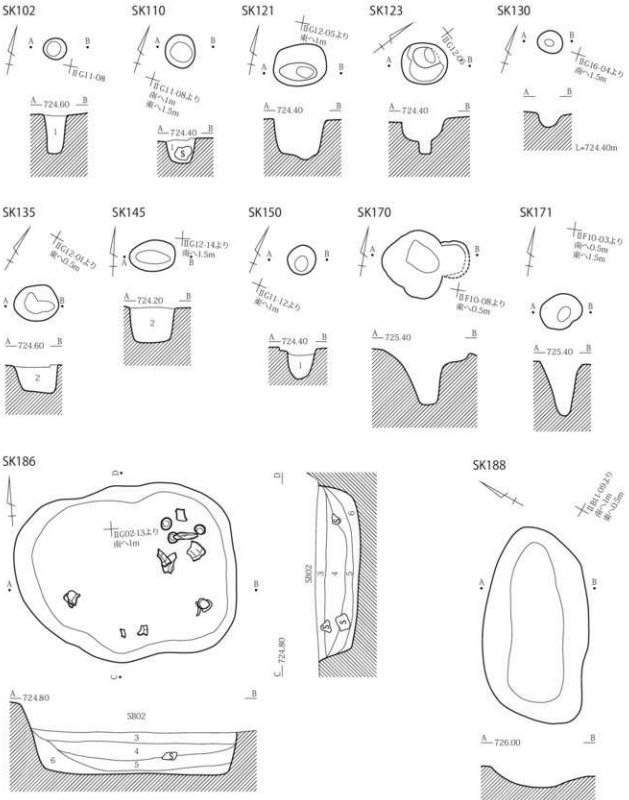
SK123（第 43 図）

位置：Ⅱ G12 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重**



1	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性普通。しまり強。5mm赤褐色土粒10%混
2	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性・しまり普通
3	褐灰色(10YR4/1)	粘性・しまり普通。5～10mm赤褐色土粒30%混
4	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性普通。しまり強。5mm赤褐色土粒10%混
5	黒色(10YR2/1)	粘質土。粘性・しまり普通
6	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質土。粘性普通。しまり強
7	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性普通。しまり強。5mm赤褐色土粒少混
8		土層注記不明
9	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性普通。しまり強 30～40mm赤褐色土ブロック20%混
10	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性・しまりややあり。5mm赤褐色土粒少混
11	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性ややあり。しまり強。5mm赤褐色土粒少混
12	黒褐色(10YR3/1)	粘質土。粘性普通。しまり強。5mm赤褐色土粒20%混

第42図　ＳＫ　遺構図（１）



1 黒褐色(10YR3/1)　粘質土。粘性普通。しまり強。5mm赤褐色土粒少混
2 黒褐色(10YR3/1)　粘質土。粘性ややあり。しまり強。5mm赤褐色土粒少混
3 暗褐色(10YR3/3)　シルト。黄褐色シルトブロック・灰黄褐色極細粒砂混シルトブロック多混。炭化物粒混
4 暗褐色(10YR3/3)　極細粒砂混シルト。砂質やや強。黄褐色シルトブロック・黒褐色シルトブロック多混
5 灰黄褐色(10YR4/2)　粘質シルト。粘性強。黄褐色極細粒砂混シルト・人頭大礫・土器混
6 褐色(10YR4/4)　細～極細粒砂混粘質シルト。小礫・炭化物粒混。土器多混。酸化鉄の沈着強

0　1m

第43図　ＳＫ　遺構図（２）

複関係：なし。**形状・規模**：長軸 50cm、短軸 43cmを測り、東西に長軸をもつやや楕円形を呈する。北側底面が一段深く掘り下げられており、最深部で 35cmを測る。**遺物**：なし。**時期**：不明。

SK130（第 43 図）

位置：Ⅱ G16 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状・規模**：長軸 28cm、短軸 24cmを測り、楕円形を呈する。最深部で 15cmを測る。**遺物**：土師器甕片が出土した。**時期**：出土土器が小片のため時期不明と判断する。

SK135（第 43 図）

位置：Ⅱ G12 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状・規模**：長軸 50cm、短軸 40cmを測り、楕円形を呈する。最深部で 30cmを測る。**遺物**：土師器甕片が出土した。**時期**：出土遺物から８～９世紀と考える。

SK145（第 43 図）

位置：Ⅱ G12 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状・規模**：長軸 50cm、短軸 32cmを測るほぼ楕円形を呈する。最深部で 37cmを測る。**遺物**：土師器甕片が出土した。**時期**：出土土器が小片のため時期不明と判断する。

SK150（第 43 図）

位置：Ⅱ G11 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状・規模**：直径 30cmの円形を呈する。最深部で 32cmを測る。**遺物**：灰釉陶器皿の底部片が出土した。**時期**：出土遺物から９世紀後半と考える。

SK170（第 43 図）

位置：Ⅱ F10 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状・規模**：小径の掘込みが東側に付属する不整形な平面を呈する。長軸 90cm、短軸 72cm、最深部で 54cmを測る。**遺物**：土師器甕片が出土した。**時期**：出土土器が小片のため時期不明と判断する。

SK171（第 43 図）

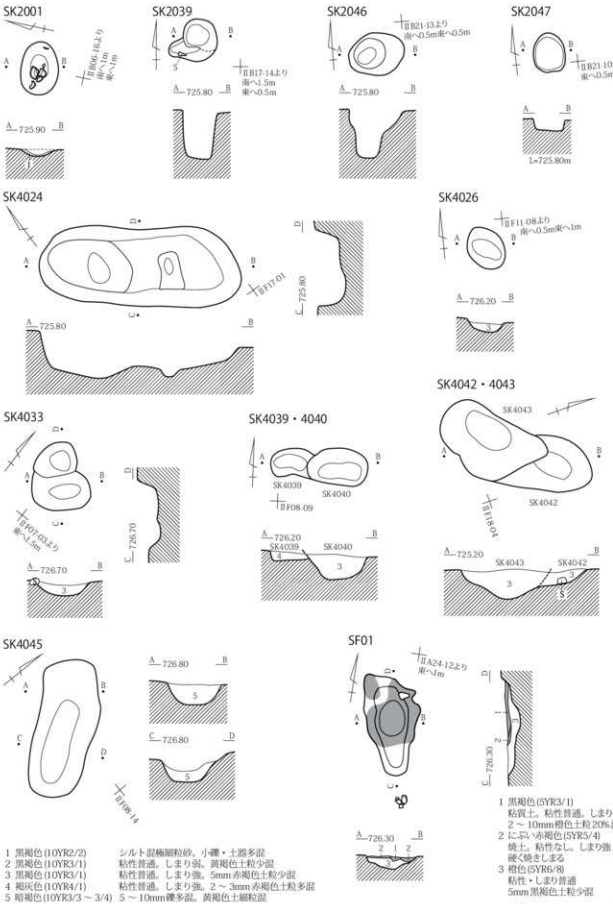
位置：Ⅱ F10 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状・規模**：長軸 45cm、短軸 35cmを測り、ほぼ楕円形を呈する。ロート状の断面形で、最深部は 56cmを測る。**遺物**：土師器甕片が出土した。**時期**：出土遺物から８～９世紀と考える。

SK186（第 43 図）

位置：Ⅱ G01・02・06・07 グリッド。**検出**：竪穴建物跡 SB02 の床面北西隅の精査により暗褐色シルト質土の落込みを検出した。**重複関係**：SB02、SB06 を切る。**埋土**：底面に多量の土器片と少量の炭化物や礫が混じる褐色粘質シルト質土が埋積し、その上に人頭大の礫や土器が混じる灰黄褐色粘質シルト、黄褐色シルトブロックや黒褐色シルトブロックが多量に混じる暗褐色砂質シルトが水平堆積する。**形状・規模**：長軸 2.3m、短軸 1.8m の楕円形を呈する。最深部で 50cmを測る。**遺物**：須恵器坏の完形品２点のほか土師器甕と須恵器甕が出土した。本跡出土の土師器甕と SB02 埋土中のものが接合している。**時期**：出土遺物から８世紀前半と考える。

SK188（第 43 図）

位置：Ⅱ A15、Ⅱ B11 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：SB204 Ｐ２に切られる。**形状・規模**：長軸 210cm、短軸 110cmの楕円形を呈する。最深部で 14cmを測る。**遺物**：なし。**時期**：SB204 以前だが、詳細な時期は不明である。



第44図　ＳＫ　遺構図（３）、ＳＦ０１　遺構図

SK2001（第 44 図）

位置：Ⅱ B06 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で黒褐色細粒砂の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 55cm、短軸に 40cmを測り、楕円形を呈する。最深部で 8cmを測る。**遺物：**須恵器坏、黒色土器の坏片が出土した。**時期：**出土遺物から９世紀と考える。

SK2043（第 44 図）

位置：Ⅱ A20 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 60cm、短軸 58cmを測り、ほぼ円形を呈する。中程より直径 14cmの柱痕跡を検出し、底部面まで垂直に届く。最深部で 25cmを測る。**遺物：**なし。**時期：**不明。

SK2046（第 44 図）

位置：Ⅱ A25、Ⅱ B21 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を少量含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**SD04 を切る。**形状・規模：**長軸 60cm、短軸 45cmを測り、楕円形を呈する。検出面から 10cm程度掘り下げ、直径 26cmの柱痕跡を検出した。最深部で 50cmを測る。**遺物：**なし。**時期：**SD04 を切ることから８世紀以降と判断する。

SK2050（第 28 図）

位置：Ⅱ B21・22 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 40cm、短軸 35cmを測り、やや楕円形を呈する。最深部で 20cmを測る。**遺物：**縄文土器片、黒色土器坏片が出土した。**時期：**出土遺物から９世紀と考える。

SK4024（第 44 図）

位置：Ⅱ F11 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 210cm、短軸 80cmを測り、楕円形を呈する。底面は西側で一段深く、最深部で 30cmを測る。**遺物：**縄文土器片が１点出土した。**時期：**縄文土器が出土したが、時期不明と判断する。

SK4033（第 44 図）

位置：Ⅱ F02 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で赤褐色土粒を含む黒褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸 70cm、短軸 70cmを測る不整形な平面形状を呈する。最深部で 20cmを測る。**遺物：**土師器の羽釜片が出土した。**時期：**出土遺物から 10 世紀と考える。

SK4045（第 44 図）

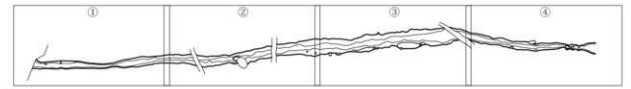
位置：Ⅱ F08 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で黄褐色粒砂を含む暗褐色土の落込みを検出した。**重複関係：**SB401 を切る。**形状・規模：**長軸 150cm、短軸 60cmを測り、楕円形を呈する。最深部で 28cmを測る。**遺物：**なし。**時期：**縄文時代中期初頭以降。

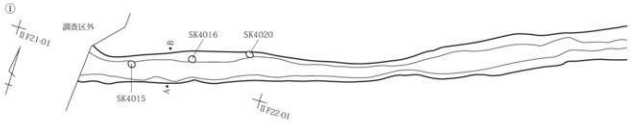
（４）溝跡

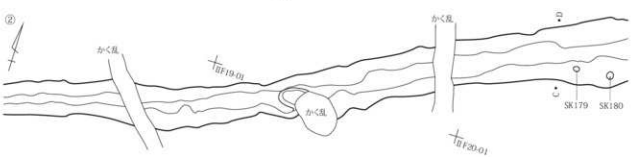
溝跡は１区から４区にかけて東西方向に長く延伸する溝跡 SD01 と、２区の東側を東西に横切ってから１区に向けて南へ折れ曲がる SD04、SD01 中央部北隣にあって山側に弧を描く小規模な SD02 を検出した。

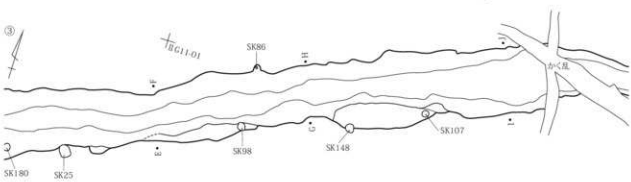
SD01（第 45 図）

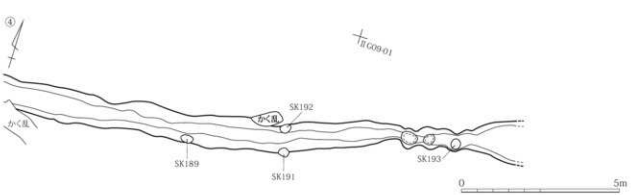
位置：Ⅱ F-14・15・16・17・18・19・21 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で東西方向に延びる帯状の黒褐色粘質土の落込みを検出した。東端部は削平されており明瞭ではない。**重複関係：**西側を SK4015・4016・4020 が、中央部より東方へ SK179・180・25・98・86・148・107・189・191・192・193 が切る。**埋土：**黒褐色粘質土を基本とし、中央部の幅広い箇所では底面に、5～10mmの小礫が混入する褐灰色砂質土や灰褐色粘質土が堆積していた。**形状・規模：**全長約 70m を測る。東西の調査区域外へ延びると推測する。

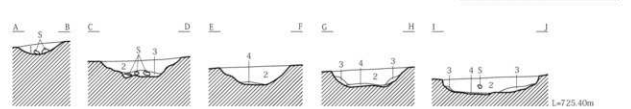






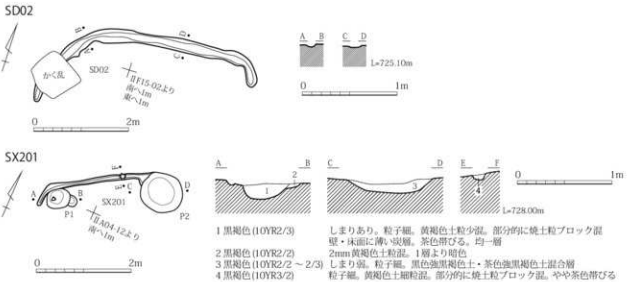






1 黒褐色(10YR3/1) 粘質土。粘性普通。しまり強。100mm大礫10%混
2 黒褐色(10YR3/1) 粘質土。粘性普通。しまり強
3 灰褐色(10YR4/2) 粘性普通。しまり強。にぶい橙色土混
4 褐灰色(10YR4/1) 砂質土。粘性・しまり弱。5～10mm小礫多混

第45図　ＳＤ０１　遺構図



第46図　ＳＤ０２、ＳＸ２０１　遺構図

溝幅は安定しておらず、東側の最も狭いところで0.5m、中央の最大幅2.5mを測る。溝底は、標高値により西から東方へ下る。**遺物**：埋土中より須恵器甕、土師器壺・甕の破片、珠状耳飾２点と鉄滓が出土している。このほか、弥生時代の壺・甕片と縄文時代の深鉢口縁部と胴部片が混入していた。**時期**：出土遺物から９世紀と考える。

SD02（第46図）

位置：Ⅱ F10・15グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で山側に弧を描いて東西方向に延びる帯状の落込みを検出した。**重複関係**：なし。西端部はかく乱により削平されていた。**形状・規模**：東西方向に全長約5.6m、幅0.3mを測る。**遺物**：なし。**時期**：不明。

SD04（第47図）

位置：Ⅱ B21・22・23・24、Ⅱ G04グリッド。**検出**：Ⅳ層上面より東西方向に延びる帯状の落込みを検出した。**重複関係**：本跡西端部より土坑SK2045～2049、SK2058～2064の12基が点在し重複する。SB05に切られ、SB04を切る。**形状・規模**：東西方向に全長約28mを測る。東端部は調査区域外へ延びると推測する。**遺物**：土師器坏と甕片、黒色土器埦、須恵器甕が出土した。**時期**：SB04・05との切合いと出土遺物から８世紀～９世紀前半と考える。

（５）焼土跡

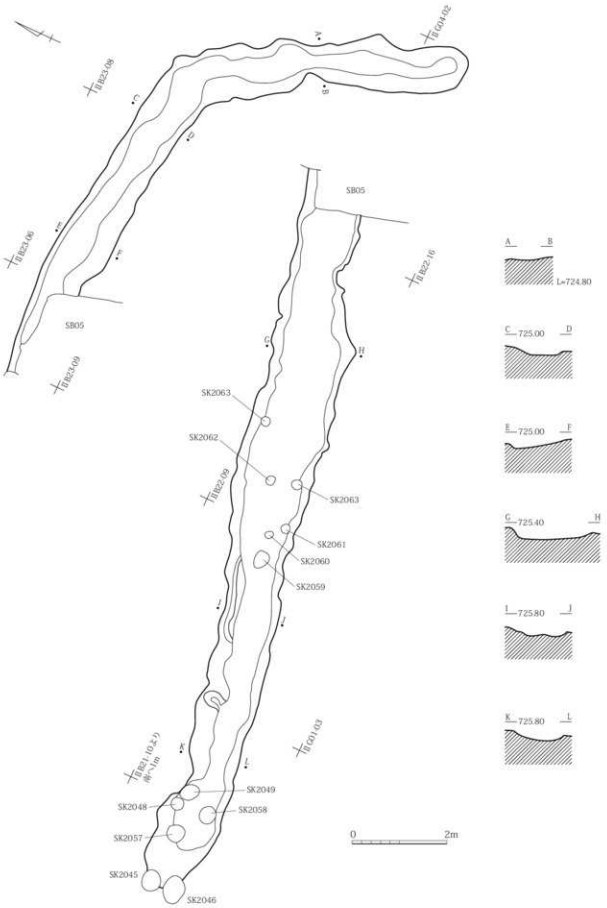
SF01（第44図）

位置：Ⅱ A24グリッド。**検出**：SB208の埋土１層で橙色土粒が多量に混じる範囲として検出した。**重複関係**：SB208を切る。**埋土**：黒褐色粘質土を基本とする３層に分けた。橙色土粒とにぶい赤褐色土が堅く焼き締まる１・２層が上部に、下部に橙色粘質土の３層が広がる。**形状・規模**：長軸110cm、短軸56cmを測り、不整形を呈する。最深部で15cmを測る。**遺物**：土師器の甕片が出土した。**時期**：SB208を切ることと出土遺物から９世紀と考える。

（６）性格不明遺構

SX201（第46図）

位置：Ⅱ A04グリッド。**検出**：Ⅳ層で黒褐色土の落込みを認める。**重複関係**：なし。**埋土**：Ｐ１は壁面に薄く炭化物粒土が付着し、部分的に焼土粒が混入していた。Ｐ２は他より締まりがない土質として確認



第47図　ＳＤ０４　遺構図

した。**形状・規模**：双方のピットは円形で、Ｐ１は直径 50cm、Ｐ２は直径 80cm を測る。溝の全長は 2.5m、幅 10cm と狭く、深さは 5cm を測る。**遺物**：Ｐ１底面直上より土師器坏片、帯状の窪み上部より灰釉陶器埦片、須恵器坏小片が出土した。**時期**：出土遺物から 10 世紀前半と考える。

2　遺物

（1）土器・土製品

SB02（第 48 図 11～30、ＰＬ７）

11 は扁平な須恵器坏蓋、12～17 は底面を手持ちヘラ削りする須恵器坏であるが、火襷のはっきりしたものが多く、特に 14・15 は火襷の元になった藁灰が残り、底部には焼成時の亀裂が走る。このように未使用かつ不良品が集落へ流通したとは考え難く、これらは近辺で焼成されたと推測する。18～21 の黒色土器坏も、底面が回転または手持ちヘラ削りされる。22～24 の須恵器甕は、外面が平行または格子叩きで、内面はナデ消されているが、22 は平行線、24 は同心円状の当て具痕が一部に残る。25～30 の土錘はカマドおよびその周辺からまとまって出土した。

SB03（第 49 図１～８）

１～６の土師器甕は、胴部から底部にかけて縦にヘラ削りするもの（１・３～５）、回転ナデ調整するもの（２）、縦にハケ調整するもの（６）がある。７・８の須恵器甕は、胴部外面が平行叩き（７）と格子叩き（８）があり、内面はともにナデ消されている。

SB04（第 49 図９～11）

図示できる遺物が少なく、９の須恵器坏、10・11 の須恵器甕は残存率が５％以下の小片である。

SB05（第 49 図 12～19、ＰＬ７）

12 の須恵器坏は底面が右回転糸切りのまま、13 の黒色土器高台付埦と 14～17 の黒色土器坏も底面が回転糸切りのままで、SB02 よりも新しくなる。カキメがある 18 の土師器甕も、底面は回転糸切りのままである。19 の土師器甕は、胴部外面の上半が横、下半が縦のヘラ削りで、内面下半部接合痕が段をなしている。

SB07（第 49 図 20～26、ＰＬ７）

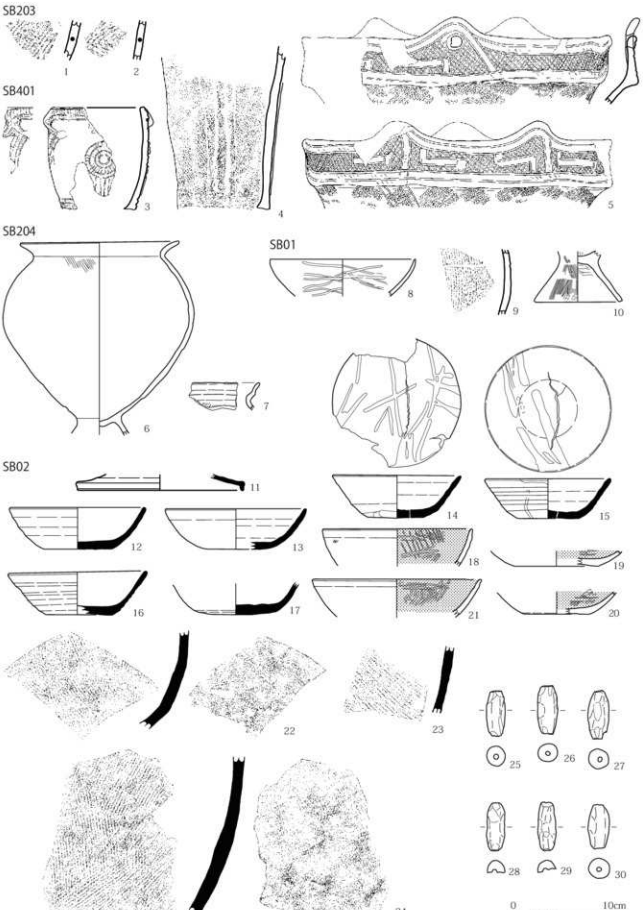
20・21 の須恵器坏は、底面が右回転糸切りのままで、21 は酸化焔焼成である。22 の黒色土器埦は内面に疎らなミガキが縦横に走る。23～25 の土師器小型甕は、胴部が縦のヘラ削り、26 の甕は頸部直下が横のヘラ削り、以下が縦のヘラ削りであるが、下半の一部に横のヘラ削りが混じる。

SB201（第 49 図 27～38、ＰＬ７）

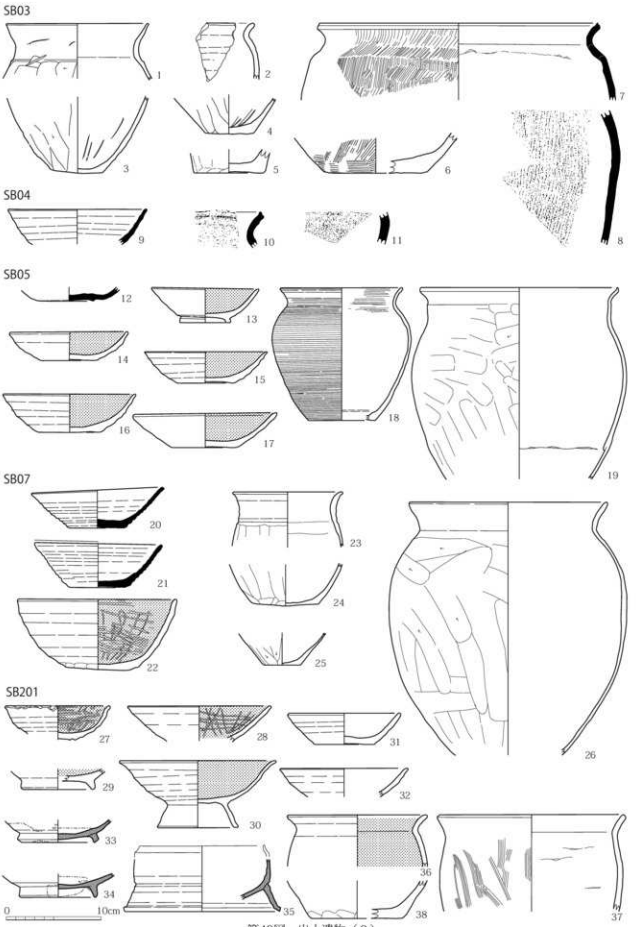
27～29 の黒色土器高台付埦と 31 の土師器坏は、内面が磨かれているが、32 の土師器坏は磨滅が著しく、ミガキの有無は不明である。33 の灰釉陶器埦と 34 の同皿は、底面が回転ヘラ削りされ、灰釉は漬掛けである。36 の黒色土器甕は胴部が回転ナデ、37 の土師器甕は縦ハケである。35 の緑釉陶器香炉は小片であるが、愛知県陶磁資料館蔵の伝滋賀県浅井町出土の香炉のような形態（愛知県陶磁資料館 1988）で、透かしのある蓋とセットになっていたと考える。

ＳＢ 202（第 50 図１～24、ＰＬ７）

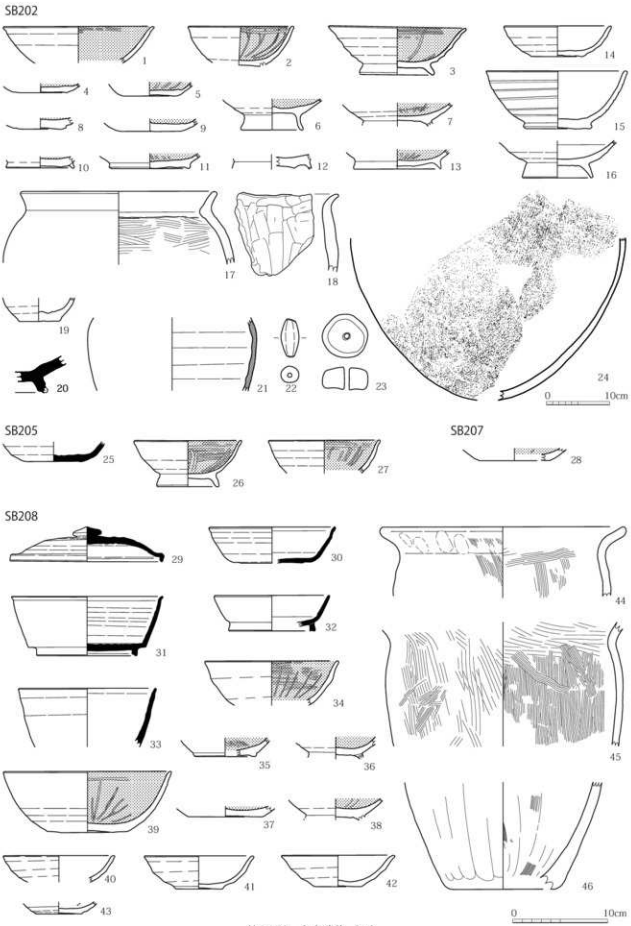
１～13 の黒色土器の坏や高台付埦が多数出土しているが、残存率 30％以下のものが多い。ほとんどが底面が回転糸切りのままだが、13 の高台付埦のみ外周を回転ヘラ削りする。内面は磨滅しているが、残っているものは口縁部を横、それ以下を放射状に粗く磨いた後に黒色処理される。14 の土師器坏、15・16 の高台付埦も底面は回転糸切りのままで、体部を回転ナデ調整するが、15 の高台付埦は回転ナデ後、凸部を回転ヘラ削りすることによって、凹部が凹線状に残る。17 の土師器甕は、球胴で口縁部と胴


SB203
1
2
SB401
3
4
5
SB204
6
7
SB01
8
9
10
SB02
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
10cm

第48図　出土遺物（１）



第49図　出土遺物（2）



第50図　出土遺物（３）

部外面が横ナデ、胴部内面が横ハケ調整されるのに対して、口縁部が短く緩やかに屈曲する 18 の土師器甕は、胴部外面が縦にヘラ削りされる。20 の須恵器は高台が付き、24 の須恵器甕は丸底で外面が平行叩き、内面がナデ消される。22 の土錘は、ＳＢ 02 出土のものよりやや小ぶりである。23 は土製紡錘車である。

ＳＢ 205（第 50 図 25～27）

出土遺物は少なく、図示できたのは３点のみである。25 の須恵器坏は底面が回転糸切りのままで、重ね焼きした別個体の一部が付着している。26・27 の黒色土器高台付埦は体部に丸みをもち、口縁部内面に横、体部～底部内面に放射状のミガキが施される。

ＳＢ 207（第 50 図 28）

図示できるものはほとんどなく、図示した 28 の黒色土器坏も残存率５％未満の小片で、内外面磨滅している。

ＳＢ 208（第 50 図 29～46、ＰＬ８）

天井部を回転ヘラ削りする 29 の須恵器蓋や、体部が直線的で底面を回転ヘラ削りする 30 の須恵器埦、同じく底面を回転ヘラ削りする 32 の須恵器高台付坏、底面回転糸切りながら底径が大きく盤状を呈する 31 の須恵器坏、底面を全面回転ヘラ削りする 37 の黒色土器埦、外周を手持ちヘラ削りする 39 の黒色土器埦は８世紀代の様相を呈するが、底面が回転糸切りのままの 40～42 の土師器坏は９世紀後半以降のもので、別遺構の遺物が混在しているかもしれない。44～46 の土師器甕は、口縁部が厚手で胴部内外面を縦ハケ調整する 44・45 と、外面を縦ヘラ削り、内面をヘラナデする 46 がある。

ＳＢ 209（第 51 図１～８、ＰＬ８）

１の須恵器坏、２・３の須恵器高台付盤、４の土師器坏、５の土師器埦は全て底面を回転または手持ちヘラ削りする。８の土師器甕は胴部外面の頸部直下が横、上半が斜め、下半が縦のヘラ削りされ、内面がヘラナデされるものである。

ＳＢ 402（第 51 図９・10）

図示できる遺物は少ない。口唇部が強くナデられて外反する９の土師器甕は、胴部がヘラ削りされ、底部が厚手の 10 の土師器甕は底面がヘラ削り、胴部外面下端が横ナデ調整される。

ＳＢ 403（第 51 図 11～13、ＰＬ８）

丸底気味の 11 の須恵器高台付坏は、底面が回転ヘラ削りされる。12・13 の土師器甕は、口縁部が「コ」の字に湾曲し、胴部外面がヘラ削りされる。

ＳＤ 01（第 51 図 14～17）

14 の土師器小型甕は体部上半が横ナデ、下半が縦にヘラ削りされ、厚手の 15 の土師器壺は底部が静止糸切り、胴部が回転ナデ調整される。16・17 の須恵器甕は外面が平行叩きで、17 の内面は当て具の外縁下半のみが見られる。

ＳＸ 201（第 52 図８～10）

８の須恵器坏、９の土師器坏ともに、底面は回転糸切りのままである。10 の灰釉陶器埦は、底面が回転ヘラ削りで体部が直線的となり、灰釉は漬掛けである。

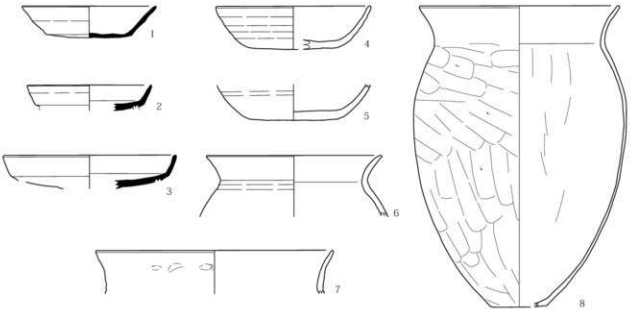
ＳＸ 2001（第 52 図 11・12）

11 の黒色土器坏は、内面を放射状に磨いた後、黒色処理されている。12 の灰釉陶器瓶は、長頸瓶などの胴部と思われるが、頸部は全く出土しておらず不明である。

ＳＫ 150（第 52 図 13）

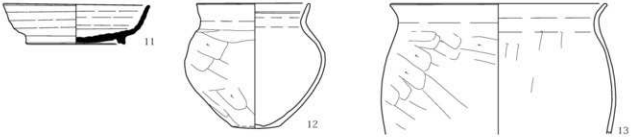
13 の灰釉陶器皿は、底部のみの小破片だが、高台外面が削られて稜をなし、接地面が尖り気味となる。

SB209

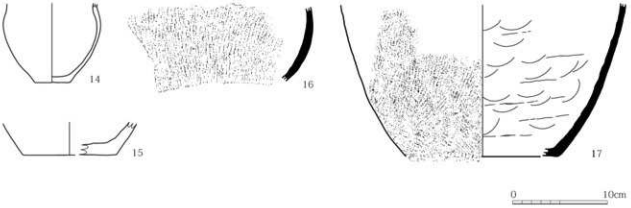


SB402

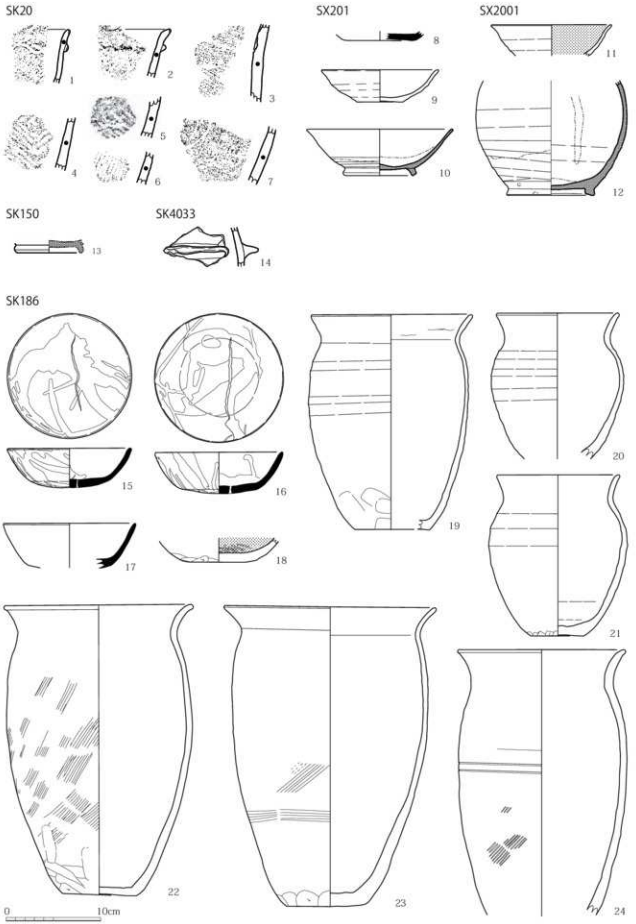
SB403



SD01



第51図　出土遺物（４）



第52図　出土遺物（５）

ＳＫ 4033（第52図14）

14の土師器羽釜は、本遺跡でほとんど出土していない羽釜の鍔部分の小片である。

ＳＫ 186（第52図15～24、ＰＬ８）

15～17の須恵器坏と18の黒色土器坏は底面を手持ちヘラ削り、または回転ヘラ削り後、一部手持ちヘラ削りする。15・16の須恵器坏は、ＳＢ02から出土した第48図14・15と同様、火襷が明瞭に残り、底部に焼成時の亀裂が走り、今回の調査範囲付近で焼成されたものと推測する。19～24の土師器甕は小～中型の19～21が回転ナデされるのに対して、大型の22～24は外面をハケ調整する。

遺構外（第53図24～32）

24の須恵器高台付埦は焼成時の歪みが著しく、上方からみた形状が楕円形を呈する。火襷や亀裂はないものの、ＳＢ02出土の第48図14・15や、ＳＫ186出土の第52図15・16と同様、窯での焼き損じ品と推測する。25の黒色土器皿は口唇が上方に折れ、上下逆転して蓋としても用いられたと推測する。26の土師器甕は胴部外面がヘラ削り、27の須恵器甕は平行叩きである。小型化した土師器坏の30は、残存部分では灯芯油痕が見られないが、底部内面から体部内面下端にかけて煤が付着し、灯明皿であったと推測する。31の灰釉陶器皿は灰釉漬掛けで、高台外面に稜をなす。32は羽口の小破片で、推定直径が８㎝程度である。

（２）金属製品（第53図１～４、ＰＬ10）

１は、SB202から出土したごく短い腸抉をもつ長三角形鏃である。鏃身部両面中軸に稜がある。両鍛造か両丸造か確定し難いものの、ここでは両鍛造と判断しておく。頸部は途中で折損しているため全体形状は不明確であるが、残存長が5㎝以上あり、長頸と推測する。鏃身部残存長3.9㎝、頸部残存長5.5㎝である。２はSB01から出土した鉄釘である。頭部は三方に突出する。胴部はサビ膨れのため形状不明確である。胴部は現状、先端側で屈曲している。残存長4.2㎝、頭部幅1.1㎝である。３はSB204から出土した板状の鉄製品で、片方の短辺側が折損している。残存する短辺の平面形は丸みを帯びている。用途は不明である。４はSB207から出土した棒状の鉄製品で、両端破断のため全体形状は不明である。残存長3.9㎝、幅0.55㎝、厚さ5.0㎝で、横断面方形を呈する。釘胴部あるいは鉄鏃の頸部と考えられる。

このほかに、図示していないが、１区検出面から鉄製品１点、ＳＢ204から銅製品１点が出土している。

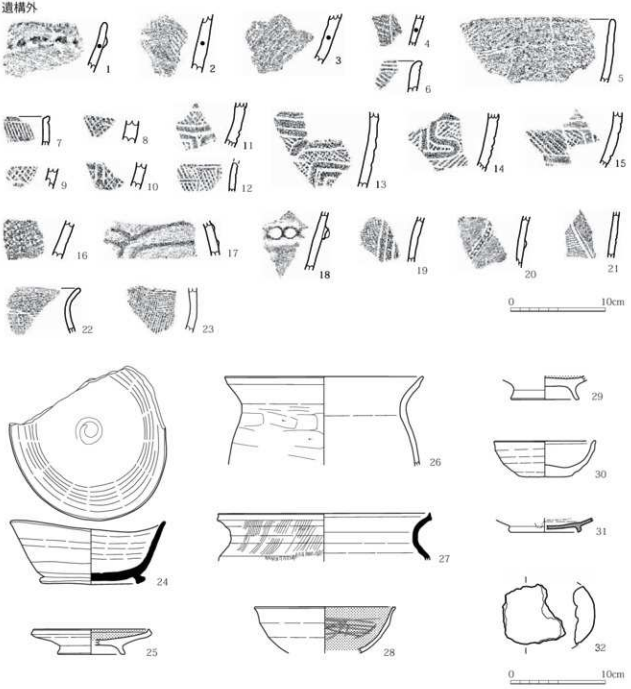
第５節　自然科学分析

2010（平成22）年度に、SB01から出土した炭化材２点を対象試料として、樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）による分析を株式会社加速器分析研究所に業務委託した。

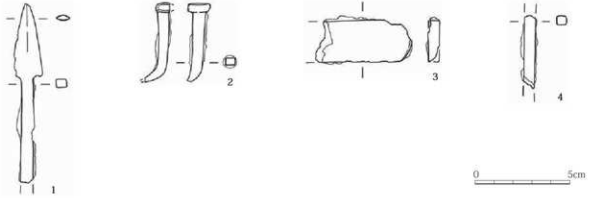
樹種同定の結果は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節とコナラ属コナラ亜属コナラ節であった。旧臼田町域での住居構築材の樹種同定分析事例が少ないため、新たな情報提供ができたと考える。

年代測定の結果は、暦年代範囲で試料の一つが235calAD-261calAD（27.4%）と281calAD-325calAD（40.8%）、別試料が254calAD-336calAD（68.2%）である。３世紀前半から４世紀前半に相当する測定値が得られた。調査分析した考古学年代観とおよそ矛盾しない結果である。なお、詳細なデータは添付ＤＶＤに掲載した。

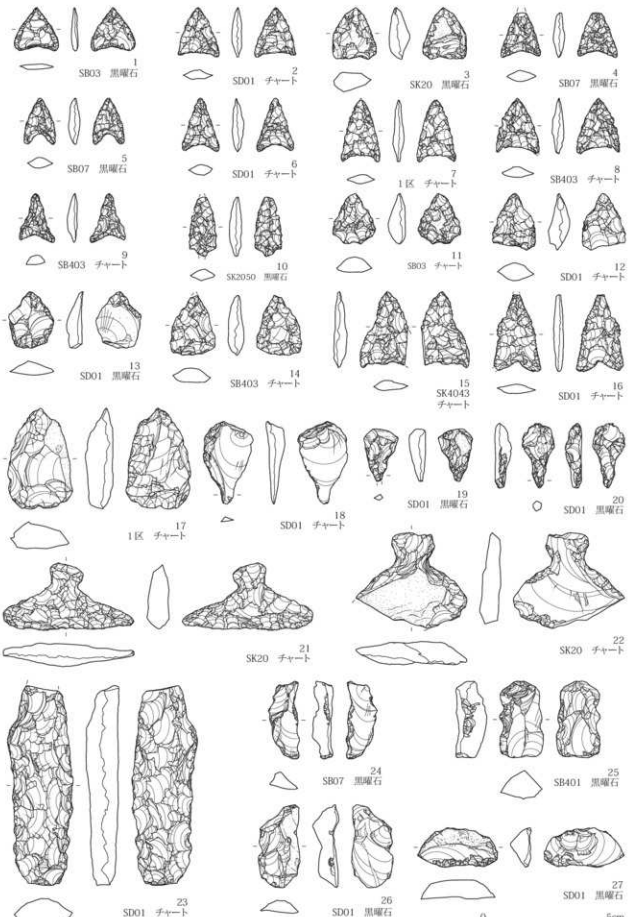
遺構外



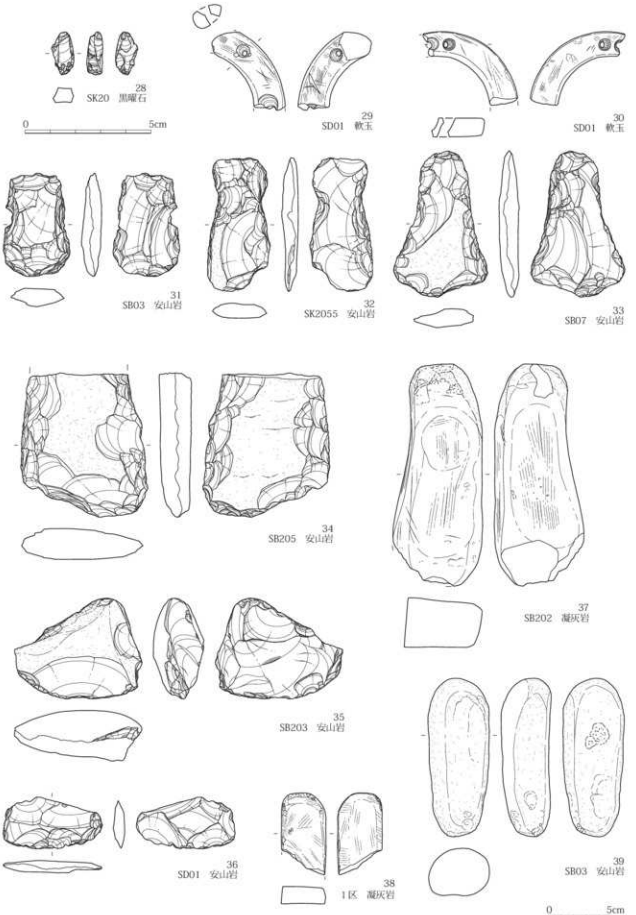
金属製品



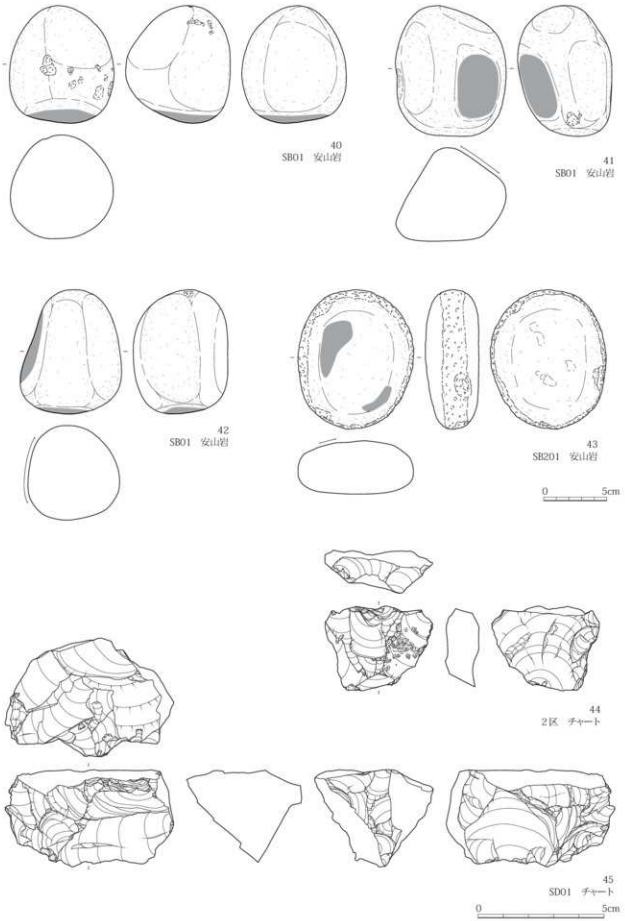
第53図　出土遺物（６）


1
SB03　黒曜石
SD01　チャート　2
SK20　黒曜石　3
SB07　黒曜石　4
SB07　黒曜石　5
SD01　チャート　6
1区　チャート　7
SB403　チャート　8
SB403　チャート　9
SK2050　黒曜石　10
SB03　チャート　11
SD01　チャート　12
SD01　黒曜石　13
SB403　チャート　14
SK4043
チャート　15
SD01　チャート　16
1区　チャート　17
SD01　チャート　18
SD01　黒曜石　19
SD01　黒曜石　20
SK20　チャート　21
SK20　チャート　22
SD01　チャート　23
SB07　黒曜石　24
SB401　黒曜石　25
SD01　黒曜石　26
SD01　黒曜石　27
0
5cm

第54図　出土遺物（７）


28
SK20　黒曜石
0
5cm
29
SD01　軟玉
30
SD01　軟玉
31
SB03　安山岩
32
SK2055　安山岩
33
SB07　安山岩
34
SB205　安山岩
37
SB202　凝灰岩
35
SB203　安山岩
36
SD01　安山岩
38
1区　凝灰岩
39
SB03　安山岩
0
5cm

第55図　出土遺物（8）


40
SB01　安山岩
41
SB01　安山岩
42
SB01　安山岩
43
SB201　安山岩
0　5cm
44
２区　チャート
45
SD01　チャート
0　5cm

第56図　出土遺物（９）

第６節　小結

本遺跡で検出した遺構は竪穴建物跡 21 軒、溝３条、土坑約 300 基などである。ただし、土坑約 300 基の内には、直径 20～30㎝と小さめのものが多く、調査前はりんご畑であったことから、りんごの枝の支柱掘方も少なからず含まれているものと推測する。

縄文時代には、前期前葉にＳＢ 203、中期初頭にＳＢ 401、中期末から後期初頭にＳＢ 211 が単独で存在する。遺存する竪穴建物跡の残りの悪さや縄文土器・石器の後世の遺構への混入、遺構外での出土を見れば、削平されてしまった竪穴建物跡もあったであろうが、元々が丘陵南裾の狭小な緩斜面であり、削平があったとしても数軒程度の小規模な集落であろう。

古墳時代前期のＳＢ 01・204 も同様で、削平された竪穴建物跡も含めて小規模な集落であったと推測する。弥生時代後期の大規模集落の終焉後、古墳時代前期に小規模な集落に分散することは佐久地域ではよく見られることではあるが（埋文センター 2013）、丘陵南裾の狭小な緩斜面に居住した理由は不明である。

継続的に集落が営まれるのは８世紀からで、前半にはＳＢ 02 やＳＢ 209 など、底面をヘラ削りする須恵器坏を供膳形態の主体とする竪穴建物跡、後半にはＳＢ 07 やＳＢ 208 のように底面回転糸切りのままの坏に黒色土器が混じる竪穴建物跡がある。９世紀前半にはＳＢ 05、ＳＢ 205、ＳＢ 207 のように黒色土器を主体とする竪穴建物跡があり、後半にはＳＢ 202 のように黒色土器でも高台付の器種や土師器が加わる竪穴建物跡がある。ＳＢ 201 のように施釉陶器が加わる竪穴建物跡は、10 世紀まで下るかもしれない。さらに、詳細な時期が不明なＳＢ 03、ＳＢ 04、ＳＢ 205、ＳＢ 206、ＳＢ 402 などの竪穴建物跡がある。古代にあっても、前代のように削平された竪穴建物跡の存在が考えられ、少なくとも 16 軒の竪穴建物跡が存在することから、竪穴建物跡の使用および耐用年数の問題はあるにせよ、仮に 25 年としても２～３軒程度の小規模な集落が 200 年余りの間存続していたと考える。

本遺跡の集落は、班田を前提とした農村集落とは様相が異なる。上滝・中滝・下滝遺跡が立地するのは丘陵南裾の狭小な緩斜面で、畑作ならば可能としてもとにかく狭小である。その下の低地部分は、今でこそ、滝川が直線的な用水路のように改修されて両岸に水田が広がっているが、その下層は人頭大の礫を多数含む砂礫層が２ｍ以上も続き、滝川の氾濫原であったことが判明している。班田はもとより、農耕だけに頼って自活するのは困難で、農耕以外も生業に加えていたと考えざるを得ない。それが須恵器生産と漁撈である。漁撈を行っていたと考える根拠は、８世紀前半のＳＢ 02 でまとまって出土した土錘で、９世紀後半のＳＢ 202 からも土錘１点が出土していることから、ある程度継続していたと考える。一方、須恵器生産を行っていたと考える根拠は、８世紀前半のＳＢ 02 やＳＫ 186 で出土した、底部に焼成時の亀裂がある須恵器坏や、遺構外出土の歪みの著しい須恵器高台付埦である。こうした焼き損じは生産地で選別され、消費地に運ばれることはなかったと推測でき、さらにＳＢ 02 やＳＫ 186 出土の須恵器坏は重ね焼き時に挟んだ藁の灰が火襷の上に残り未使用である。近隣で焼成し、積み出し前の選別ではね出されたものであろう。

信濃国では、８世紀には須恵器が供膳具の主体となり、郡内での自給を目指して各郡に窯が築かれ、佐久郡内でも佐久市根岸の根岸窯跡群（市教委 1982･1991）が開窯する。その北西方の小県郡との郡境地域には、大窯跡群の御牧原・八重原窯跡群があるが（福島 1986）、その製品は専ら国分寺のあった小県郡に供

給され、佐久郡の需要を満たしてはいなかったと推測する。中野市清水山窯跡（埋文センター1997）1号窯灰原出土の「佐玖郡」ヘラ書き須恵器無頸壺は、佐久郡内の需要を遠く高井郡の窯で満たそうとうとしたもので、佐久郡内での須恵器の供給不足を示すと考える。本遺跡近隣にあったと推測する須恵器窯で生産した須恵器坏や高台付埦が、佐久郡内の一般集落への供給不足を補っていたものであろう。

8世紀後半のＳＢ07出土の須恵器坏には、焼成時の亀裂や歪みの著しいものは見られず、さらに9世紀代は供膳具の主体が黒色土器となるので、8世紀後半以降は須恵器生産を行っていなかったと推測するが、この時期にも集落は継続する。ＳＢ201出土の複数の灰釉陶器や緑釉陶器の香炉の存在から、細々と漁撈などを行っていたとは考えにくく、少量ではあるが炉壁や羽口が出土したことから鍛冶もしくは製鉄、そのほか様々な生業を営んでいたと推測する。

引用・参考文献

愛知県陶磁資料館1988『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』

臼田町教育委員会1988臼田町埋蔵文化財調査報告書第4集「臼田町遺跡詳細分布調査報告書」

臼田町誌刊行会2007『臼田町誌』第三巻 考古　古代・中世編

佐久市教育委員会1982『佐久市石附遺跡発掘調査報告書』

佐久市教育委員会1991『石附窯址群Ⅲ』

佐久市志編纂委員会1995『佐久市志　歴史編（一）原始古代』佐久市志刊行会

長野県埋蔵文化財センター1997「飯田古屋敷遺跡　玄照寺跡　がまん淵遺跡　沢田鍋土遺跡　清水山窯跡　池田端窯跡　牛出古窯遺跡」長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター2008「発掘調査の概要」『長野県埋蔵文化財センター- 年報』25

長野県埋蔵文化財センター2010「上滝・中滝・下滝遺跡」「奥日影遺跡」長野県埋蔵文化財センター- 年報』27

長野県埋蔵文化財センター2013『鎌田原遺跡　近津遺跡群　和田原遺跡群』

長野県埋蔵文化財センター2014『周防畑遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター2015『西近津遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

福島邦男1986「御牧原台地・八重原台地に於る窯址研究の推移」『長野県考古学会誌』51

第８章　和田遺跡　和田１号塚

第１節　遺跡の概観

佐久市南部の千曲川左岸には、八ヶ岳から張り出した丘陵が幾重にも延びている。遺跡はそうした丘陵のひとつ、標高770～725ｍの尾根頂部から斜面部に立地する。丘陵の南には千曲川支流の片貝川が流れる平地が広がり、水田地帯を形成している（第57図）。

和田遺跡の範囲は東西約350ｍ、南北約320ｍ、丘陵の稜線部から南側傾斜面にかけて広がっている。調査区内の丘陵稜線部は樹林帯、斜面部は果樹園・畑地として利用されていた。

和田１号塚は、丘陵尾根主脈から南東に舌状に突き出した支尾根稜線上に造られ、墳丘最高部で標高767ｍを測る。直径約20ｍ、高さ約2.5ｍの墳丘状の形状から円墳とされ、「和田１号墳」と登録されていた。しかし、今回の発掘調査の結果、古墳ではないことが判明したため、市教委は「和田１号塚」へと遺跡名を変更した。

第２節　和田遺跡

１　調査の概要と経過

和田遺跡は、佐久市湯原に所在する。地形は、丘陵上のやや急峻な北側斜面部、馬の背状の稜線部、やや緩やかな南側斜面部に分けることができる。発掘作業は、2010（平成22）年度と2011年度に実施し、調査面積は和田１号塚を含む延面積12,500㎡である（第58図）。

2010年度は、遺構・遺物の分布や密度等の把握のため、トレンチ調査（調査面積2,500㎡）を実施した。丘陵稜線部（標高762ｍ）から稜線直下の北側斜面、さらに南側斜面中腹部（標高743ｍ付近）の範囲に、幅約1.5ｍのトレンチを合計36本設定し、重機により掘削した。その結果、農道下の南側斜面部の標高750～745ｍ付近のトレンチ23・25・26で、弥生時代後期と想定する竪穴建物跡３軒を検出した。トレンチ28では、耕作土中から青磁破片１点が出土した。このため、農道下の南斜面中腹部について、面的調査をする必要性があると判断した。なお、その他のトレンチには遺構・遺物はなかった。

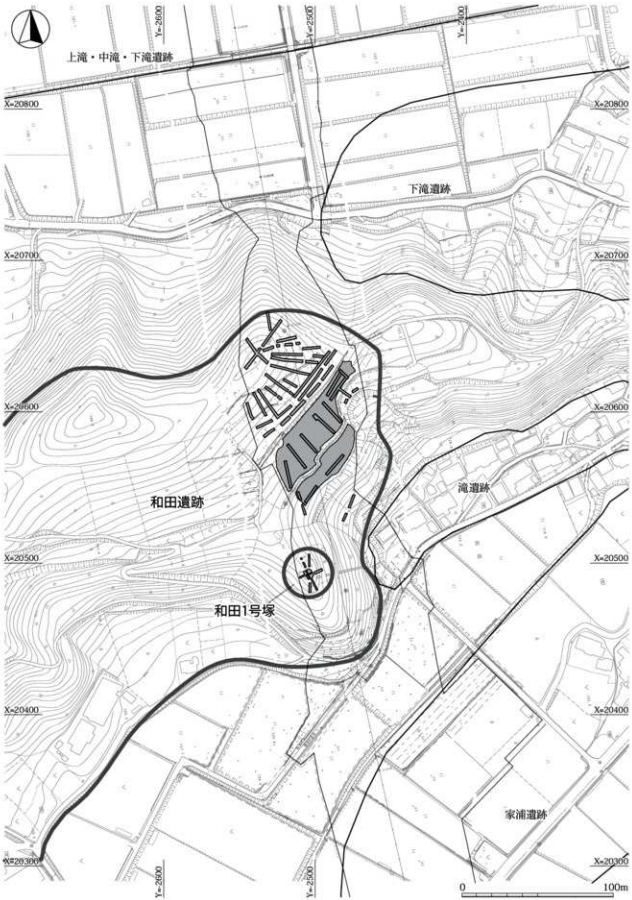
2011年度は、前年度に遺構を確認した南側斜面中腹部のトレンチ23・25・26周辺と青磁片が出土したトレンチ28に調査区を設け、前者を１区、後者を２区として面的調査を行った。その他に昨年度確認調査の及ばなかった農道部分周辺についてトレンチを５本設定し確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

２　基本層序

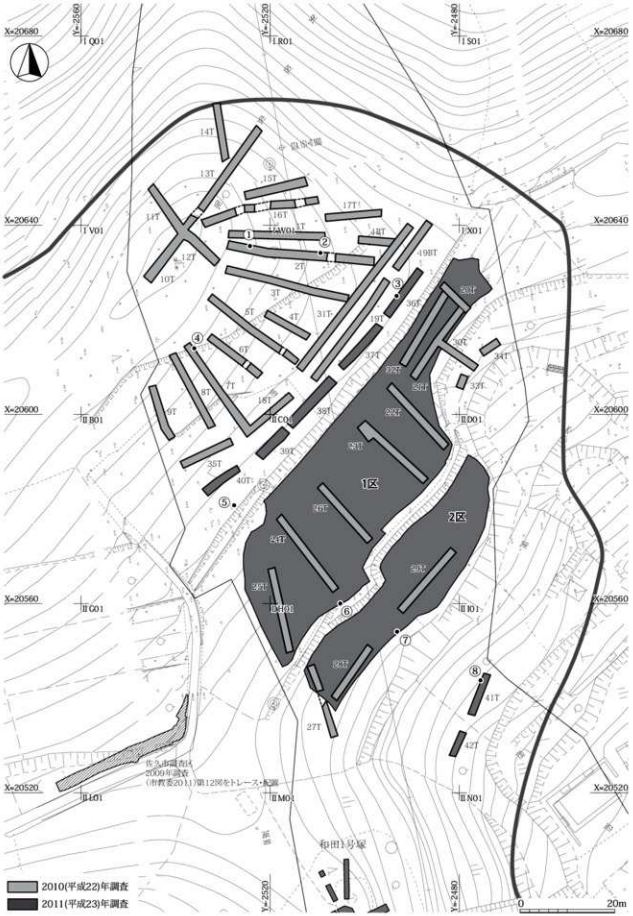
層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別した（第58・59図）。

第Ⅰ層は、耕作土・造成土・かく乱を含む調査範囲全体の表土を一括した。

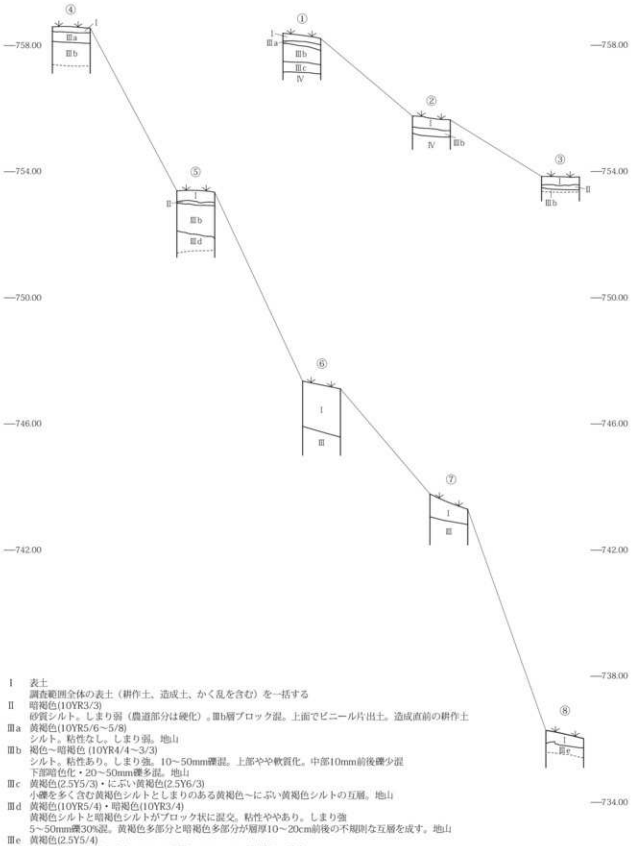
第Ⅱ層は、丘陵斜面中腹部の36～41トレンチ部分で確認した。Ⅰ層（農道造成土）とⅢｂ層の間に介在



第57図　遺跡範囲・位置図



第58図　トレンチ・調査区配置図



Ⅰ　表土
調査範囲全体の表土（耕作土、造成土、かく乱を含む）を一括する
Ⅱ　暗褐色(10YR3/3)
砂質シルト。しまり弱（農道部分は硬化）。Ⅲb層ブロック混。上面でビニール片出土。造成直前の耕作土
Ⅲa　黄褐色(10YR5/6～5/8)
シルト。粘性なし。しまり弱。地山
Ⅲb　褐色～暗褐色 (10YR4/4～3/3)
シルト。粘性あり。しまり強。10～50mm礫混。上部やや軟質化。中部10mm前後礫少混
下部暗色化・20～50mm礫多混。地山
Ⅲc　黄褐色(2.5Y5/3)・にぶい黄褐色(2.5Y6/3)
小礫を多く含む黄褐色シルトとしまりのある黄褐色～にぶい黄褐色シルトの互層。地山
Ⅲd　黄褐色(10YR5/4)・暗褐色(10YR3/4)
黄褐色シルトと暗褐色シルトがブロック状に混交。粘性ややあり。しまり強
5～50mm礫30%混。黄褐色多部分と暗褐色多部分が層厚10～20cm前後の不規則な互層を成す。地山
Ⅲe　黄褐色(2.5Y5/4)
粘土。粘性・しまりあり。30mm礫混。100～150mm礫微混。地山
Ⅳ　灰黄色(2.5Y7/2)
砂岩質の岩盤

第59図　土層柱状図

する暗褐色砂質シルトで、Ⅲｂ層ブロックを含み、Ⅲｂ層との層界は明瞭である。造成直前の耕作土と判断する。

第Ⅲ層は、遺跡の基盤をなす層である。Ⅲａ～Ⅲｅに細分した。遺構を確認した１・２区は斜面中腹部に位置し、Ⅰ層直下がⅢｂ層以下となる。遺構はその上面で検出したが、平面的にⅢｂ層と下位層を分別することは困難で、検出面は大別Ⅲ層として一括した。

第Ⅳ層は砂岩質の岩盤である。２・７トレンチのほか、和田１号塚の下位でも認められ、その南側の尾根頂部では、ところどころ地表に露出している。

３　遺構

竪穴建物跡は弥生時代後期後葉が２軒、古墳時代前期前葉が１軒、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉が１軒のほか、時期不明の１軒を検出した。土坑は５基検出したが、いずれも時期不明である。

（１）竪穴建物跡

ＳＢ 01（第61図）

位置：ⅡＣ 03・08グリッド。**検出：**Ⅲ層上面で土器片および炭化物を若干含む暗褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。傾斜地に立地するため、谷側は削平を受け壁面は検出できなかった。**重複関係：**なし。**構造：**床面は竪穴の掘方を平坦に整形する。壁は、残存部で床面からやや急角度で立ち上がる。柱穴はＰ１～３を検出した。**炉：**床面では確認できなかったが、削平されたＰ１の東側 85cmで被熱部を検出した。竪穴建物跡の全体形状を想定し、これを炉跡と判断した。**出土遺物：**土器は１層からが大半を占めた。１層から弥生時代後期の甕が出土した。**時期：**出土土器をもって、弥生時代後期後葉と考える。

ＳＢ 02（第62図・ＰＬ２）

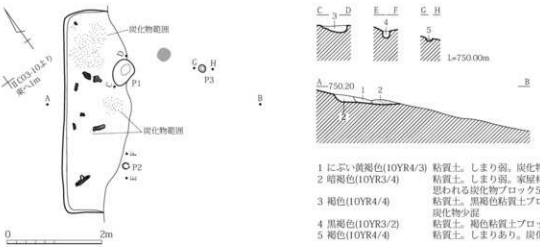
位置：ⅡＣ 13・18グリッド。**検出：**Ⅲ層上面でにぶい黄褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。山側で外側に弧状に張り出す。谷側は消失しているため、全体形は不明である。**重複関係：**なし。**構造：**床面は竪穴の掘方を平坦に整形する。谷側に向かって若干傾斜している。壁は平坦な床面からわずかに外傾して立ち上がる。**炉：**建物跡中央のやや北東寄りにある被熱部を炉跡と判断した。上面は被熱により赤化し、特に中央部は硬化が著しかった。**出土遺物：**出土遺物は破片資料が多く、床面近くから出土している。出土位置は住居跡の西南部、特に炉跡の西側では甕や壺が、炉跡から高坏脚部が出土した。**時期：**出土遺物をもって、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉と考える。

ＳＢ 03（第63図・ＰＬ６）

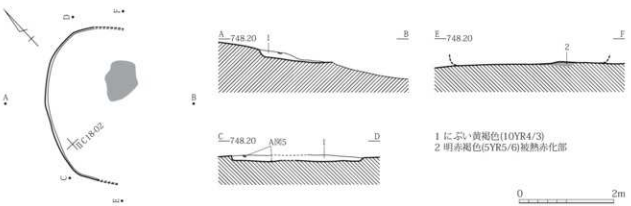
位置：ⅡＢ 25・Ｃ 21・Ｇ 05・Ｈ 01グリッド。**検出：**Ⅲ層上面でにぶい黄褐色砂質土を埋土とする落込みを検出した。他の竪穴建物跡と同様、谷側が大きく失われているが、今回調査した竪穴建物跡の中では最も残りが良い。**重複関係：**なし。**構造：**床面は竪穴の掘方を平坦に整形する。谷側に向かってやや傾斜している。床面直上では、細かな炭化物、炭化物粒子を全体に広く確認できたが、被熱の痕跡などはなかった。炭化物が残存した理由は不明である。壁は床面からやや外傾して直線的に立ち上がる。主柱穴に該当すると考えられる柱穴が４基（Ｐ２～Ｐ５）あり、長方形に配置されている。柱穴の直径は 20～26㎝、深さはＰ２・３が 55㎝、Ｐ４・５が 45㎝と谷側で浅くなっているが、柱穴底の標高はいずれも 747.60ｍ前後で床面の高低差に合わせて深さを調整したと推測する。**炉：**建物跡内の北西寄りにある。南西の一辺には炉縁石が設置されていた。**出土遺物：**床面直上の３層から、甕、壺、高坏の破片を中心に多くの土器が出土した。特に南西壁際の床面上では略完形の鉢、炉の西側床面上では略完形の壺、東側ではＳ字甕の破片が出土している。**時期：**出土土器をもって、古墳時代前期前葉と考える。

I V01
I W01
I X01
Y=2520
Y=2480
X=20600
X=20560
II B01
II C01
II D01
II G01
II I01
II L01
II M01
II N01
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SB08
1区
2区
751.00
750.00
749.00
748.00
747.00
746.00
745.00
744.00
743.00
佐久市調査区
2009年調査
(市教委2011)第12図をトレース・配置
0
20m

第60図　遺構全体図



第61図　ＳＢ０１　遺構図



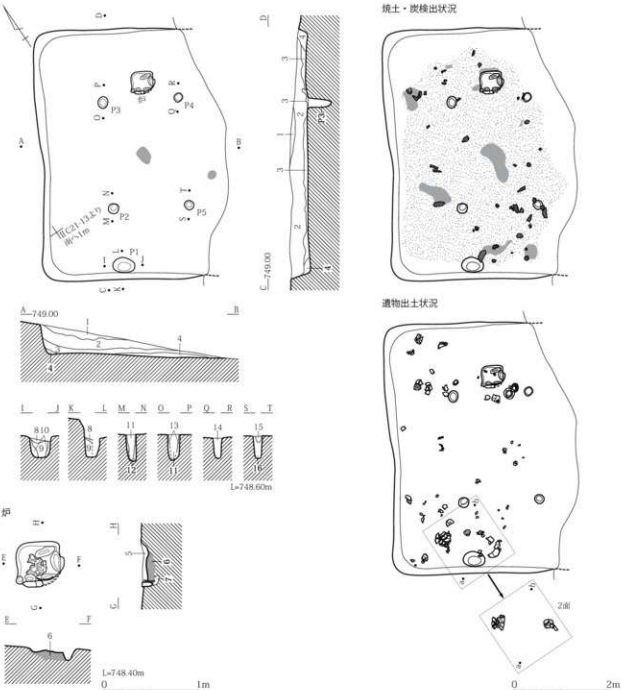
第62図　ＳＢ０２　遺構図

ＳＢ 04（第 64 図）

位置：ⅡＣ 17・18 グリッド。**検出**：Ⅲ層上面で、にぶい黄褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。傾斜地に立地する本跡は、谷側は削平され不整形な遺構範囲であった。**重複関係**：なし。**構造**：床面は竪穴の掘方を平坦に整形する。壁は残存する山側の壁面では床面からやや急角度に立ち上がるが、その両端から谷側へ向けての北東側、南西側では、緩やかに立ち上がる。柱穴はＰ１～３の３基検出した。Ｐ１・２は内部から土器が出土していることから貯蔵にかかわる施設、Ｐ３は炉のある南西側の壁面と反対側の壁際に設けられていることから、入口施設に伴う可能性を考える。**炉**：南西側に地床炉と考えられる掘込みがあり、炉縁石と推測できる被熱礫がある。また、床面中央より北東側にかけて約 140㎝× 85㎝の範囲に焼土粒の広がりを検出した。**出土遺物**：遺物は破片が多く、北東コーナーの１層から弥生時代後期の甕、高坏、鉢、蓋が出土している。Ｐ１の底部からは高坏転用蓋が、Ｐ２内からは半完形の鉢が出土した。**時期**：出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。

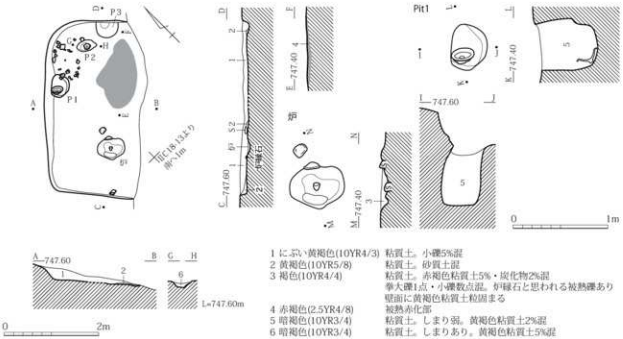
ＳＢ 05（第 65 図）

位置：ⅠＷ 23 グリッド。**検出**：遺構の上部は大半が削平されていたが、Ⅲ層上面でにぶい黄褐色粘質土を埋土とする落込みを検出した。**重複関係**：なし。**構造**：床面は竪穴の掘方を平坦に整形する。谷側に向かってやや傾斜している。**炉**：北西壁寄りに焼土粒が散在する不整形の広がりを検出したが、火床や掘込みがないこと、壁に寄り過ぎていることから、炉跡の可能性は低いものと考える。**出土遺物**：出土した土

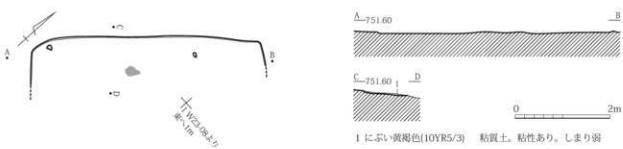


1 にぶい黄橙色(10YR5/4)　砂質土。粘性なし。しまり普通
2 にぶい黄褐色(10YR5/4)　粘質土。粘性あり。しまり普通
50mm礫混。炭化物・土器微混
3 にぶい黄橙色(10YR5/3)　粘質土。粘性あり。しまりやや弱
炭化物・土器多混。床直上層
4 にぶい黄橙色(10YR6/4)　粘質土。粘性あり。しまり普通。地山崩落土
5 にぶい黄褐色(10YR4/3)　粘質土。粘性あり。しまりやや弱
炭化物多混
6 橙色(5YR6/8)　被熱赤化部
7 褐色(10YR4/4)　粘質土。粘性あり。しまり普通
8 灰黄褐色(10YR4/2)　粘質土。粘性あり。しまり強
9 暗オーブ褐色(2.5Y3/3)　粘質土。粘性あり。しまり極弱。土器片混
10 褐色(10YR4/4)　粘質土。粘性あり。しまり極弱
11 にぶい黄褐色(10YR4/3)　粘質土。粘性あり。しまりやや強。炭化物混
12 褐色(10YR4/4)　粘質土。粘性あり。しまりやや強
13 黄褐色(2.5Y5/3～6)　粘質土。粘性あり。しまり普通
14 灰黄褐色(10YR4/2)　粘質土。粘性あり。しまりやや強。炭化物混
15 にぶい黄褐色(10YR4/3)　粘質土。粘性あり。しまり弱。炭化物混
16 黒褐色(10YR3/2)　粘質土。粘性あり。しまり極弱。炭化物混

第63図　ＳＢ０３　遺構図



第64図　ＳＢ０４　遺構図



第65図　ＳＢ０５　遺構図

器は小片１点のみである。石器では床面上から磨製石斧が出土した。**時期**：弥生時代～古墳時代に属する土器小片が出土しているが、明確な時期は不明である。

（２）土坑

ＳＫ 03（第66図）

位置：ⅡＣ 14グリッド。**検出**：Ⅲ層上面で褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状**：直径25cmの円形で、深さは８ cmを測る。**遺物**：なし。**時期**：不明である。

ＳＫ 04（第66図）

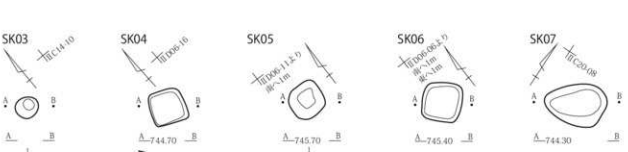
位置：ⅡＤ 06グリッド。**検出**：Ⅲ層上面でにぶい黄褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状**：一辺37cmの方形で、深さは20cmを測る。**遺物**：なし。**時期**：不明である。

ＳＫ 05（第66図）

位置：ⅡＤ 06グリッド。**検出**：Ⅲ層上面でＳＫ 04と同様のにぶい黄褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状**：一辺36cmの方形で、深さは６ cmを測る。**遺物**：なし。**時期**：不明である。

ＳＫ 06（第66図）

位置：ⅡＤ 06グリッド。**検出**：Ⅲ層上面でＳＫ 04と同様のにぶい黄褐色粘質土の落込みを検出した。



第66図　ＳＫ０３～０７　遺構図

重複関係：なし。**形状**：一辺 40cm の方形で、深さは 17cm を測る。**遺物**：中層より現代陶磁器破片１点が出土。**時期**：不明である。

ＳＫ 07（第 66 図）

位置：ⅡＣ 20 グリッド。**検出**：Ⅲ層上面より褐色粘質土の落込みを検出した。**重複関係**：なし。**形状**：長軸方向に最長幅 68cm、直交する短軸幅 47cm を測る楕円形で、深さは 28cm を測る。**出土遺物**：なし。**時期**：不明である。

4　遺物

（1）土器・陶磁器

ＳＢ 01（第 67 図１・２、ＰＬ８）

１は緩く外反する単純口縁の甕で、胴部は軽く膨らむ。文様は櫛描波状文と簾状文である。２は鉢の口縁で、内面にわずかに赤彩が残る。１の甕は球胴化していないが、波状文の乱れから弥生時代後期後葉と推定する。

ＳＢ 02（第 67 図３～７、ＰＬ８）

３は無彩の壺頸部である。４・５は甕である。４は単純に外反する口縁に櫛描波状文、５は受口口縁で櫛描横羽状文を描く。いずれも口端に細かい刻みを施す。６は壺または甕の胴下部である。７は赤彩された高坏脚部である。球胴気味の甕５から、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉と推定する。

ＳＢ 03（第 67 図８～20、第 68 図１～24、ＰＬ８・９）

図化個体が 37 点と多数のため、器種別に記述する。

壺（第 67 図８～20、第 68 図１）は 14 点を図化した。13・16、第 68 図１は赤彩、そのほかは無彩である。口縁部形態は外反が強いものが多く、10～14 は端部が受口状である。12・13・15・16 は頸部に簾状文を施す。15 は櫛描スリットのＴ字文らしい。10 は横区画する沈線を施し、簾状文は痕跡的である。無彩で簾状文がない 14・17 の胴部は球胴化し、10・15 も同様である。赤彩の第 68 図１は胴下部に稜がある。18～20 は無彩の底部であり、20 からは球胴の形態がうかがえる。

甕（第 68 図２～７）は６点を図化した。２～４は弓状に外反する口縁部に、櫛描き波状文を施す。３・４には簾状文が巡り、球状の胴部に３は横羽状文、４は櫛描波状文を施す。５は小型で、口縁部が直立気味で胴部が軽く膨らむ。簾状文を欠き、口縁部から胴上部に櫛描波状文を施す。内外面に、種子圧痕がある。６は櫛描横羽状文を施す頸部、７は胴上部である。

台付甕（第68図８・９）は２点を図化した。８は脚部破片、９はＳ字状口縁台付甕Ｂ類である。

高坏（第68図10～18）は９点を図化した。10・12・13は無彩、そのほかは赤彩である。全般に小型化し、18のように低脚化した形態である。13は下部に稜をもつ坏部、10～12は埦状の坏部である。脚部の14には三角形の透かしがある。16は裾部が広がる10と同じ形態である。17は直線的な形態で、内面に種実圧痕がある。15はこれに近い形態の可能性がある。

鉢（第68図19～24）は６点を図化した。いずれも高坏10・12と共通の、埦状の形態である。19・23は無彩、そのほか赤彩である。23・24は片口が付く。23には、内外面に多数の種実圧痕がある。

これらの土器群は、壺・甕の球胴形態、壺の多数を無彩が占めること、高坏の小型化・低脚化の諸特徴、およびＳ字状口縁台付甕Ｂ類の出土から、古墳時代前期前葉に帰属するものと考える。

ＳＢ04（第69図１～14、ＰＬ９）

１～４は弓状に外反する単口縁の甕である。櫛描羽状文を施し、３は頸部に簾状文が巡る。５は外反する口縁部に輪積み痕を装飾的に残す、吉ケ谷式の甕である。最上段にはごく浅く節が大きい縄文が施文されているようであるが、不明瞭である。６～９は赤彩の高坏である。６は下部に稜をもつ坏部、７・８は埦状の坏部である。９は脚上部の破片である。10は赤彩、11は無彩の鉢である。12・13は無彩蓋の天井部破片である。つまみの中央部に小孔がある。14は高坏の転用蓋である。赤彩高坏６と同じ坏部形態で、脚部の欠損部分を研磨する。これらの土器群は、在来の高坏がさほど小型化していないことから、弥生時代後期後葉に帰属する可能性が高いものと考える。

遺構外（第69図15・16）

15は球形の胴部から直線的に開いて単口縁に至る形態の無彩壺である。頸部文様には、２本一組の櫛描スリットＴ字文を施す。形態から古墳前期前半の可能性がある。16は青磁蓮弁文碗である。

（２）石器（第69図１～７）

１・２はSB01から出土した石鏃である。１はチャート製の凹基有茎鏃で、細かい剥離により鋸歯縁状を呈す。２は頁岩製の、長身の凹基鏃である。３・４は黒曜石製の、微細な剥離がある剥片である。いずれも遺構外から出土している。３は薄身で、正面の右側縁に剥離痕がある。４は自然面が残る角柱状の剥片で、周縁に不規則な剥離が残る。５はSB02から出土した泥岩製の打製石斧である。横長剥片を素材とし、背面はほぼ第一次剥離面であり、側縁をほとんど加工していない。刃部側を欠損する。６はSB05から出土した安山岩製の磨石である。断面形は緩い稜をもち、棒状を呈する特殊磨石のような形態である。稜から平坦面まで広い磨面が残る。７はSB03から出土した砂岩製の台石である。半分程度が欠損し、図化部分も２つに割れている。平坦面に敲かれた痕跡がある。

以上の石器は、前述の弥生土器が後期後半以降にまとまっていることから、弥生時代に帰属するとは考えにくい。後述する、和田１号塚から出土した縄文土器の時期に帰属する可能性があると考える。

（３）金属製品

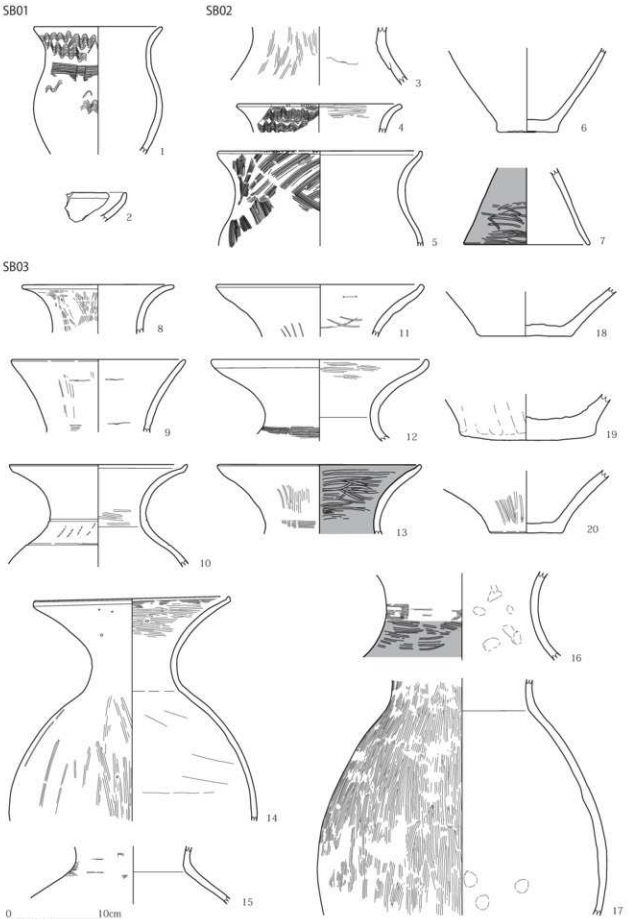
図示していないが、ＳＢ01埋土１層中から詳細形状不明の棒状鉄製品１点、１区の耕作土層直下から寛永通寶（波銭）１点が出土した。

引用・参考文献

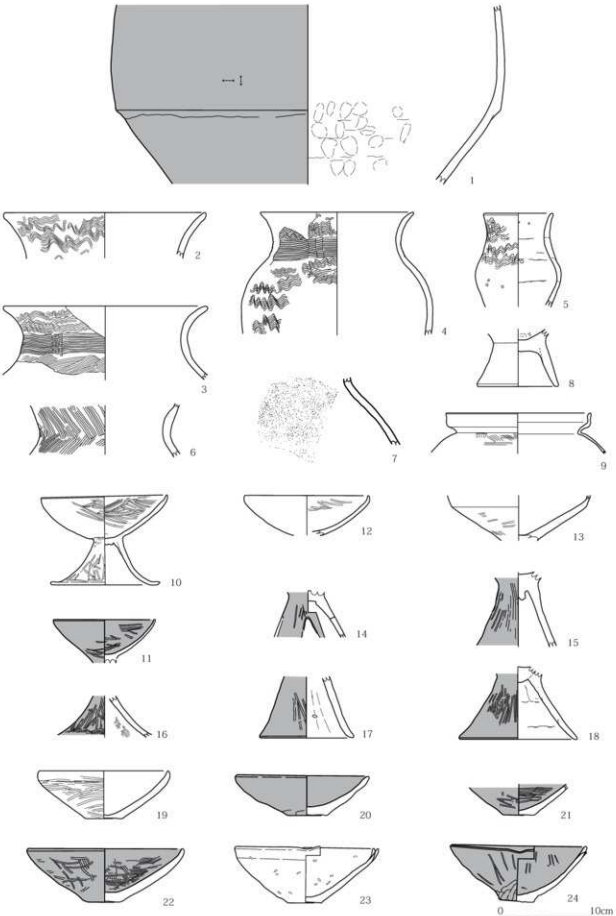
小山岳夫 1999「佐久地方の弥生土器―中期後半から後期の変遷―」99シンポジウム「長野県の弥生土器編年」発表要旨　長野県考古学会弥生部会

小山岳夫 2014「佐久地域後期弥生土器編年と北一本柳遺跡の年代」「佐久考古通信」113佐久考古学会（＊未見）

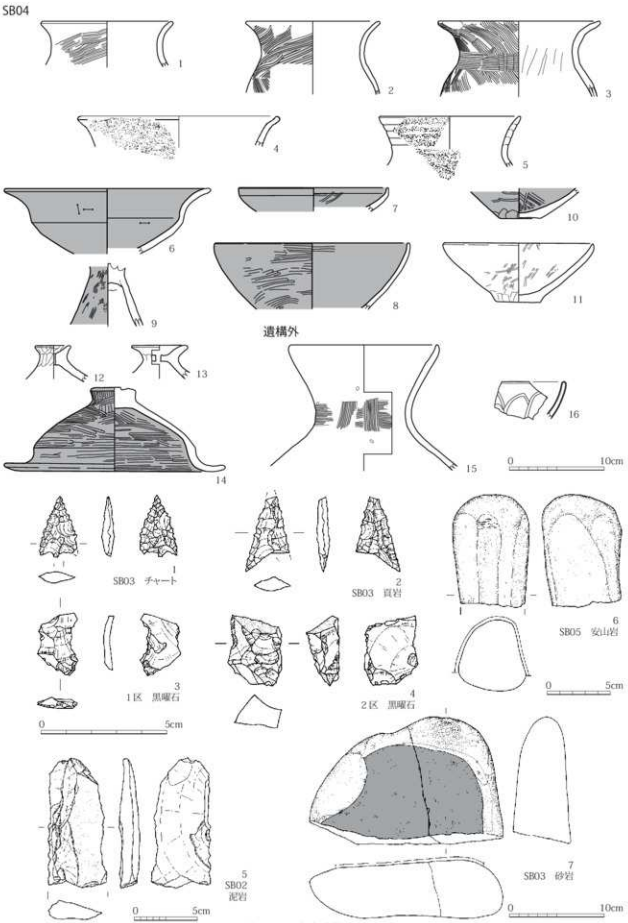
小山岳夫 2016「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落―佐久盆地の集落分布の変遷を中心として―」「専修考古学」15専修大学考古学会



第67図　出土遺物（１）



第68図　出土遺物（２）


SB04
遺構外
0　10cm
SB03　チャート
SB03　頁岩
SB05　安山岩
1区　黒曜石
2区　黒曜石
0　5cm
SB02
泥岩
SB03　砂岩

第69図　出土遺物（３）

冨沢一明 2008「長野県東信地域の古墳時代前期土器要素と外来系土器について」『専修考古学』10 専修大学考古学会

第３節　和田１号塚

１　調査の方法と経過（第 57・70 図）

和田１号塚は和田遺跡南東部の一角に位置する。マウンドは直径約 20 ｍの円形を呈する。南側の尾根下方の裾部は明瞭な傾斜変換点を成しており、ここで測ると、マウンドの高さは約 2.5 ｍである。北側の尾根上方の裾部では、高さは１ｍほどとなる。ただし、北～東側は、裾部の変換点が不明瞭である。発掘調査前に踏査を行い、現地表面を詳しく観察したが、石室・葺石・周溝といった施設や、埴輪などの遺物は確認できなかった。また、頂部平坦面が直径 12 ｍほどと、裾部での直径 20 ｍに比べてかなり広いという印象を受けた。表面観察では、古墳とみなしうる明確な材料が得られなかったが、主体部が失われた可能性も含め、立地や形状を考慮して、前・中期古墳であるとの前提に立って発掘調査を行うこととした。

2010（平成 22）年度は、土壌サンプル採取と調査前状況の記録を行った。

2011 年度は、業者委託により現況地形測量を実施した後、発掘作業を開始した。調査グリッドは、墳丘頂部中心を通る任意方向の主軸に平行および直交する４ｍメッシュを設定した。呼称・表記は以下のとおりである。

主軸に平行するラインをＡ～Ｈのアルファベットで表し、直交するラインを１～10 の数字で表す。

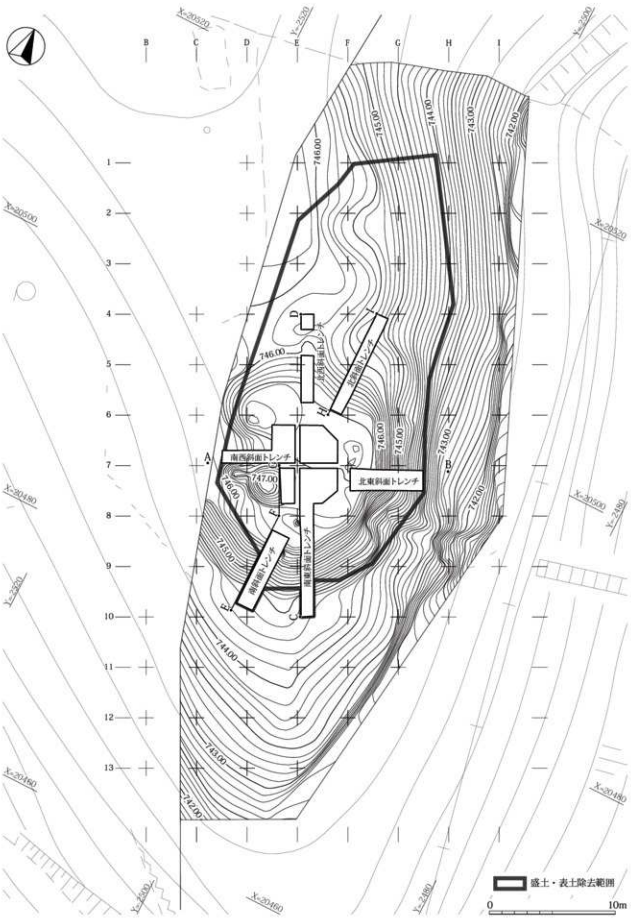
Ｅラインが墳丘主軸である。グリッドの呼称は、その北西隅をつくるラインの名称を、アルファベット・ハイフン・数字の順に組み合わせて、Ｄ－７、Ｅ－７のように呼称する。ただし、Ａ・Ｂライン全部とＣ・Ｂライン北部は用地外になるため、現実にはグリッド杭を打設していない。

発掘は、主体部の確認と構造把握を優先させるため、墳頂部の調査から開始した。

墳頂中心を通るＥラインおよび７ラインを墳丘断面観察・記録作成のメインセクションにすることとし、Ｅラインおよび７ラインに沿った幅 40㎝（ラインの両側にそれぞれ 20㎝）の十字ベルトを残して、墳頂中心にあたるグリッド杭Ｅ－７を囲む、Ｄ－６、Ｄ－７、Ｅ－６、Ｅ－７の４グリッドの掘下げに着手した。掘下げは、各グリッドをさらに四分割し、中心杭Ｅ－７寄りの 1.8 ｍ四方の範囲から始めた。ただし、Ｄ－７には、断面記録を取る計画の切り株があって、その部分を確保するために、1.4 ｍ× 1.8 ｍとほかより範囲が狭い。その後、適宜ベルトを残しつつ順次外側へ拡張していった。最終的には、Ｄ－６が 1.8 × 3.0 ｍ、Ｄ－７が 1.4 ｍ× 2.8 ｍ、Ｅ－６およびＥ－７が 3.0 ｍ× 3.0 ｍ（一部欠）の範囲を、盛土を掘り抜いて地山上面まで下げた。メインベルト沿いにサブトレンチを入れて地山層を掘り下げた箇所もある。

墳頂部の調査がある程度進んだ段階で、斜面部～外方の調査に着手した。Ｅラインに沿う①北西斜面トレンチおよび②南東斜面トレンチ、７ラインに沿う③南西斜面トレンチおよび④北東斜面トレンチ、Ｅラインから西へ 26 度振ったラインに沿う⑤北斜面トレンチおよび⑥南斜面トレンチの６か所のトレンチを設定した。墳丘中心から放射状に延びる形である。②南東斜面トレンチと③南西斜面トレンチは墳頂部発掘区から連続しているが、ほかは１～２ｍの間隙がある。北西斜面トレンチは切株のため二分割した。各トレンチとも盛土を掘り抜き、地山上面まで下げた。一部については地山層をさらに掘り下げている。

各調査区の調査終了後、Ｅライン沿いベルトより東側について、重機で盛土を除去して地山層上面を表


B
C
D
E
F
G
H
I
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
X=20020
X=20060
X=20100
X=20140
X=20180
X=20220
X=20260
X=20300
X=20340
X=20380
X=20420
X=20460
X=20500
X=20540
X=20580
X=20620
X=20660
X=20700
X=20740
X=20780
X=20820
X=20860
X=20900
X=20940
X=20980
X=21020
X=21060
X=21100
X=21140
X=21180
X=21220
X=21260
X=21300
X=21340
X=21380
X=21420
X=21460
X=21500
X=21540
X=21580

した。引き続き、尾根頂部について、その掘削範囲を北側へ拡張した。Ｅライン沿いのベルト東壁の断面を記録した後、可能な限り用地境ぎりぎりまで掘削した。墳丘直下および北側の尾根頂部には遺構はなかった。

２　塚の構造と遺物の出土状況（第70・71図）

現況の地形を記録した後、トレンチ設定を行い、発掘作業に着手した。しかし、主体部および周溝・葺石・埴輪等の古墳外観を形成する施設は認められず、古墳に伴う遺物も出土しなかった。盛土層からは、中・近世の銭貨（紹聖元寶、寛永通寶）や19世紀以降の焼物（灯明皿）が出土している。人為的な盛土遺構であることは確かであるが、緻密さがない盛土層や出土遺物の内容から、19世紀以降に築かれた塚の可能性が浮上した。

盛土層は、岩盤まで最大80cmほどの層厚を測るが、締りなく軟らかい暗褐色土が乱雑に入り組んでいた。盛土中には、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の土器が小細片となって含まれる。該期の集落跡が広がる北側部分の土壌を掘削して盛土した可能性を指摘できる。

塚直下および北側の尾根頂部に遺構はなかった。塚南側の尾根頂部については、現地表の岩盤露出が顕著で、遺構は存在しないと判断し、表土剥ぎは実施していない。

なお、盛土中から出土した炭化物の放射性炭素年代測定では、17世紀末～20世紀初頭に相当する測定値を得ており、上記の考古学的年代観に矛盾しない結果となった。

３　遺物

（１）土器（第72図１～21）

１～５は５層（盛土）から出土した縄文土器である。１～４は胎土に繊維を含む。１は弛緩したコンパス文を施す。０段多条の異原体で、横位羽状縄文を構成する。関山式新段階に属するものである。２～４はＬＲ縄文を施し、１と同時期であろう。５は胴下半部に縦位沈線文を描き後期前葉と考える。

６～15は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の土器である。６～８は壺である。６は急角度に開く、無彩の口縁部である。７は球胴の頸部付近で、細かい櫛描波状文を施し以下は赤彩する。８は胴下部の屈曲部で無彩である。９～13は甕である。９・10は櫛描波状文を施した口縁部で、10は施文が乱れている。11は簾状文下に櫛描波状文を施す。12・13は櫛描羽状文を施す胴部で、12は上部に波状文が見える。14・15は赤彩の鉢で、14の外面には種実圧痕がある。16は無彩の鉢もしくは高坏の坏部である。15よりも浅い。11～13は１・２層（表土）、そのほかは５層（盛土）から出土した。

17・18は盛土直下の倒木痕から出土した土師器で、17は底部回転糸切りの坏、18は底部を欠くが坏であろう。時期は10世紀と考える。

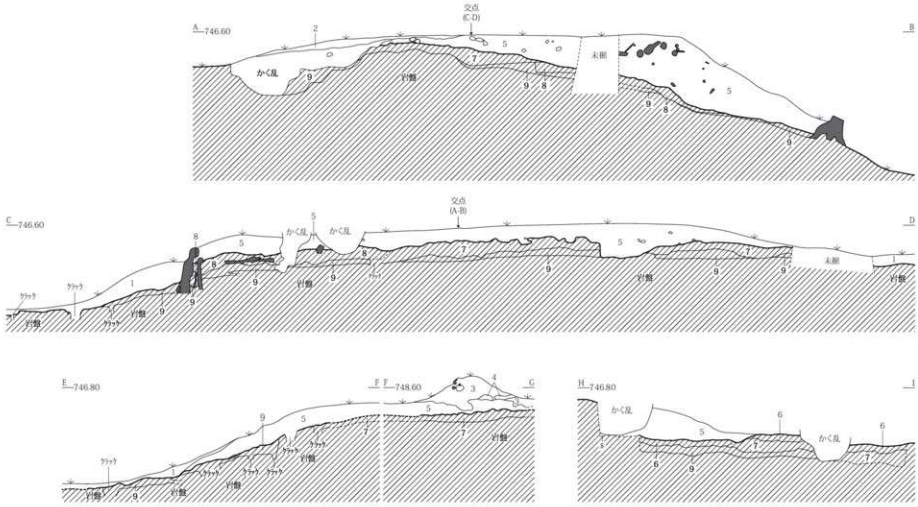
19～21は受付き灯明皿である。19・20は鉄釉、21は灰釉を施している。いずれも受けの上端が皿部の縁より低くなっており、受けの断面形も三角形状を呈する。こうした特徴からみて、19世紀以降に属すると考える。21の受けにはＵ字形に切り欠いた開口部があり、それを除いた受けの端部は無釉である。19・21は５層（盛土）、20は１層（表土）から出土した。

（２）土製品（第72図22、ＰＬ９）

22は南西斜面で採集した土製紡錘車である。約半分が遺存し、現存径5.6cm、中心部の厚さ1.1cmを測る。

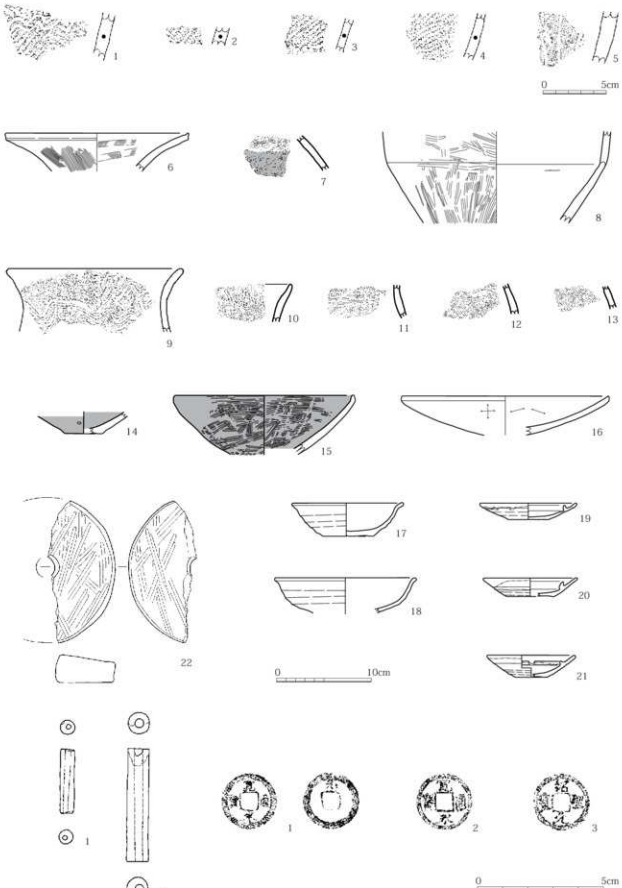
（３）石製品（第72図１・２、ＰＬ10）

１は５層（盛土）、２はＥ－７区のかく乱から出土した緑色凝灰岩製の管玉である。１は長さ20.6mm、



1　暗褐色(10YR3/4)　砂質土。ややしまりあり。表土
2　暗褐色(10YR3/4)　1a層土主体。墳頂部しまりあり。斜面しまり弱。攪乱形成後の堆積層。表土
3　暗褐色(10YR3/4)　砂質土。しまりなし。黄褐色土・小礫多混。盛土
4　暗赤褐色(5YR3/3)　砂質土。しまりあり。盛土
5　暗褐色(10YR3/4)　砂質土。しまりなし。100～200mm角礫・弥生時代後期～古墳時代初頭の土器混。明色。盛土
6　暗褐色(10YR3/4)　砂質土。明色。土壌化した第b層。地山
7　黄褐色(10YR5/6)　砂質土。しまりやや強。墳頂部では岩盤混。地山
8　褐色(10YR4/6)　第b層から第d層への漸移層。西から変化。地山
9　黒褐色(10YR3/2)　砂質土。しまり弱。10～30mm黄褐色土ブロック・明褐色土ブロック・黒褐色土ブロック多混
硬化した10～80mm暗褐色粘土・シルト・砂ブロック混。南東部は岩盤との互層。地山

第27図　断面図


1
2
3
4
5
0
5cm
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
0
10cm
1
2
1
2
3
0
5cm

第72図　出土遺物

太さ5.9mmを測る。２は長さ45mm、太さ8.6mmの大形品である。いずれも上下で径が変わらない孔が貫通している。

（４）金属製品（第72図１～３、ＰＬ10）

１・２は寛永通寶、３は紹聖元寶で、いずれも５層（盛土）からの出土である。１は背面上部に「元」字が鋳出されている。1741年（寛保元）以降に大坂高津新地で鋳造された、いわゆる高津銭に該当するものと考える。２は「寶」字の貝の６・７画がハ（ハ貝寶）となっている新寛永で、1668（寛文８）年より新しい時期の鋳造である。

第４節　自然科学分析

2010（平成22）年度の調査では、パリノ・サーヴェイ株式会社に火山灰分析を業務委託した。トレンチ№７より採取した土壌を分析した結果、Ⅱａ層から姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）（町田・荒井1976）に由来すると考えられる火山ガラスを同定検出した。これより2.5～3.2万年前の年代値を得た。なお、この年代に伴う旧石器時代の遺物は本遺跡からは出土していない。

2011年度の調査では、株式会社加速器分析研究所に放射性炭素年代測定分析を業務委託した。竪穴建物跡出土炭化物の年代測定を実施した結果、ＳＢ03炉内出土試料が２世紀半ば～３世紀初頭、ＳＢ01埋土出土試料では紀元前２世紀半ば～１世紀初頭に相当する測定値が得られた。調査分析した考古学年代観と比較すると、前者は概ね合致するもののやや古く、後者は古い年代値となる。また、和田１号塚を構築する盛土層から出土した炭化物の年代測定では、17世紀末～20世紀初頭に相当する測定値を得た。考古学的年代観に整合する。なお、詳細なデータは添付DVDに掲載した。

第５節　小結

（１）和田遺跡の集落跡について

和田遺跡では、南面する斜面中腹部、標高値750～745mの比較的傾斜が緩やかな箇所で、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の、隅丸方形を呈する竪穴建物跡４軒を検出した。2009（平成21）年度に調査区域より南西側で行われた市教委による発掘調査においても、ほぼ同じ標高で３軒の竪穴建物跡が検出されている（市教委2011）。今回の調査結果を加え、丘陵南斜面の中腹部に集落域が帯状に広がる様相が判明した（第60図）。双方の調査区域間には未調査範囲も残されるが、同じ集落に属する竪穴建物跡と推測される。

（２）和田遺跡出土の弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の土器

和田遺跡では、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉に帰属する４軒の竪穴建物跡を検出した。斜面に立地するため完存した竪穴建物跡はないが、ＳＢ03は残存部が多く多量の土器が出土した。ＳＢ01・02・04は残存部が全体の半分以下のため、遺物量は少ない。遺構に切合いはなく離れて分布し、遺物にも明らかに混在と認めるものが含まれていないことから、それぞれが一括性の高い資料と考える。ここでは当遺跡出土土器を、小山岳夫氏による佐久地方の弥生時代後期から古墳時代前期土器に関する編年研究

（小山 2014・2016a）と対比し、時期を確認する。小山氏による当該時期の時間軸を、長野盆地南部の弥生土器編年と対比し略記すると、次のとおりである。

弥生時代後期　前葉：Ⅰ期（吉田式期前半）・Ⅱ期（吉田式期後半）
〃　中葉：Ⅲ期古（箱清水式期前半古）・Ⅲ期新（箱清水式期前半新）
〃　後葉：Ⅳ期古（箱清水式期後半古）・Ⅳ期新（箱清水式期後半新）
古墳時代前期　前葉：Ⅰ期古・Ⅰ期新、中葉：Ⅱ期、後葉：Ⅲ期

当遺跡ＳＢ03 出土土器群の特徴を器種別に見ると、壺の口縁部形態は外反が強いものが多く、端部が受口状のものもある。胴部は球胴に近い形態と推定する。無彩が多数を占め、赤彩もある。頸部に簾状文を施すものと欠くものがある。甕は口縁部が弓状に外反し、胴部は球胴形となるものがある。頸部に簾状文が巡り、口縁部・胴部には櫛描波状文と横羽状文とがある。高坏は坏部が椀状のものが多く、坏下部に稜をもつ坏部もある。赤彩と無彩がある。全般に小型化し、低脚化した形態である。鉢は高坏と共通の椀状の形態で、無彩と赤彩がある。外来系土器には、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類がある。

これらの土器群の編年位置は、壺・甕の球胴化、無彩壺の優勢、高坏の小型化・低脚化の諸特徴に加え、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類の共伴から、古墳時代前期前葉のⅠ期古段階に帰属するもの考える。

そのほかの竪穴建物跡出土土器について、ＳＢ04 は甕の形態・文様にはＳＢ03 と差異を見出し難いが、高坏が小型化していないことから、弥生時代後期後葉のⅣ期新に帰属する可能性があろう。南佐久郡域での吉ケ谷式土器は注目される。ＳＢ01 は甕の形態に球胴化の傾向が乏しいことから、ＳＢ04 と同時期の可能性がある。ＳＢ02 はＳＢ03 あるいはＳＢ01・04 いずれの時期にも帰属する可能性がある。４軒の竪穴建物跡のうち、ＳＢ03 の帰属時期は明らかであるが、ほかの３軒はこれと同時期か、わずかに先行する可能性がある。図化掲載した遺物包含層出土土器と、和田１号塚出土土器全体を見ても、確実に弥生時代後期Ⅳ期をさかのぼる土器や、古墳時代前期Ⅰ期を下る土器は確認できない。したがって、本遺跡の集落跡は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の短い時間幅の中で営まれたことが推定できる。

（３）和田１号塚の築造時期と性格

和田１号塚の築造時期を出土した遺物から推測したい。５層（盛土）から出土した寛永通寶と灯明皿は、それぞれ 17 世紀以降、19 世紀以降の年代である。また、小破片のため図示していないが、５層から幕末以降の陶磁器破片が出土している。以上により、和田１号塚の築造は近世末以降（幕末以降）と考える。５層から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、17 世紀末～20 世紀初頭に相当する測定値を得ており、遺物の年代観と整合する。

片貝川流域の沖積地を隔てた対岸の丘陵尾根上には田島塚・水堀塚が位置する。田島塚の築造は近世末（幕末以降）以降、水堀塚は中世以降と考えている（第 11 章参照）。特に田島塚は、和田１号塚とは約１㎞の距離を隔てて相対し、直接目視可能である。和田１号塚とほぼ同時期の築造であり、両者が連動している可能性を推測し得る。片貝川流域の沖積地を取巻く丘陵上に相次いで塚が築造される歴史的契機は何か、この点を追究してゆくことは今後の大きな課題であろう。

中世期には、集落域・生産域などの単位となり、境界地の表示物として塚を設ける風習が存在したという（品田 1992）。それが、近世期に引き継がれるとすれば、和田１号塚は田島塚・水堀塚とともに、小田切地域を縄張りする表示物なのかもしれない。しかし、現時点においては、それを裏付けるだけの資料に乏しく、今後も類似事例データの蓄積作業が必要である。

引用・参考文献

小山岳夫 1999「佐久地方の弥生土器―中期後半から後期の変遷―」99 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』発表要旨　長野県考古学会弥生部会

小山岳夫 2014「佐久地域後期弥生土器編年と北一本柳遺跡の年代」『佐久考古通信』113 佐久考古学会

小山岳夫 2016a「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落―佐久盆地の集落分布の変遷を中心として―」『専修考古学』15 専修大学考古学会

小山岳夫 2016b「吉田・箱清水と樽」『長野県考古学会誌』152 長野県考古学会

市教委 2011『和田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 191

品田高志 1992「新潟県における塚（群）研究の現状と課題―考古学・民俗学から社会史的理解に向けて―」『新潟県考古学談話会会報』第 10 号

冨沢一明 2008「長野県東信地域の古墳時代前期土器要素と外来系土器について」『専修考古学』10 専修大学考古学会

第９章　滝遺跡

第１節　遺跡の概観と調査の概要

１　遺跡の概観

遺跡は八ヶ岳連峰の北端部から続く丘陵の先端部で、滝川の支流である中沢川左岸の丘陵緩傾斜面に立地する。発掘調査歴がないため遺跡の詳細は不明であった。

本遺跡の北西側、山麓東斜面の標高値 770～725m の地点に、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の集落遺跡である和田遺跡と近世末（幕末）以降に構築された和田１号塚が所在する。

２　調査の概要と経過

発掘作業は 2011（平成 23）年度に実施し、対象面積が 710㎡である（第 71 図）。調査区は狭小で、北西側が丘陵の裾縁沿いとなり、北東側には住宅地が隣接する。最初に住宅が隣接する調査区東境沿いに幅約１m、全長 27m のトレンチを設定し、重機により掘削した。その結果、宅地利用と耕作によるかく乱が、調査区の広い範囲におよんでいたものの、その下からは北側で奈良時代の竪穴建物跡１軒、南側で古墳時代の竪穴建物跡２軒を検出した。調査区西側は北西方向から急斜面で、遺構はなかった（第 72 図）。

３　基本層序

第Ⅰ～Ⅳ層に大別した（第 74・75 図）。第Ⅰ層は耕作土・造成土・かく乱を含む調査範囲全体の表土を一括する。

第Ⅱ層は調査区北部、ＳＢ 01 の北側だけに存在する黒褐色土で、旧表土と判断する。縄文～平安時代の遺物を包含する。

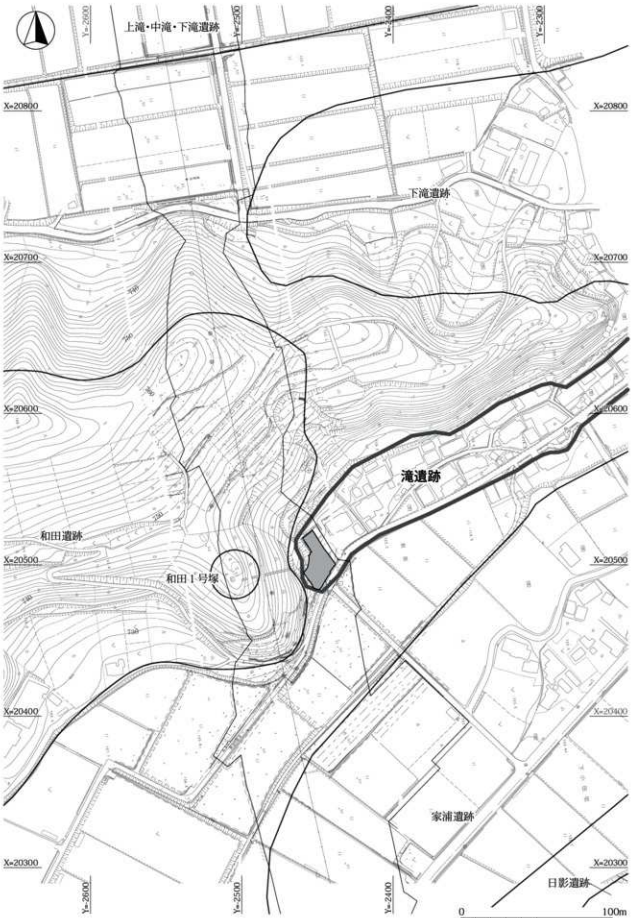
第Ⅲ層はⅠ層ないしⅡ層とⅣ層の間に介在する黒色～黒褐色土である。Ⅲａ とⅢｂに細分した。Ⅲａ層は調査区北半部に分布する黒色シルトで、柱状図位置③・⑤から南側には存在しない。削平やかく拌により消失したと考えられる。Ⅲｂ層は、Ⅲａ層からⅣ層への漸移層で、調査区内に広く認められる。

遺構検出面は、ＳＢ 01 はⅢａ層上面、その他の遺構はⅢｂ層上面となる。第Ⅳ層は遺跡の基盤をなすにぶい黄褐色シルトである。

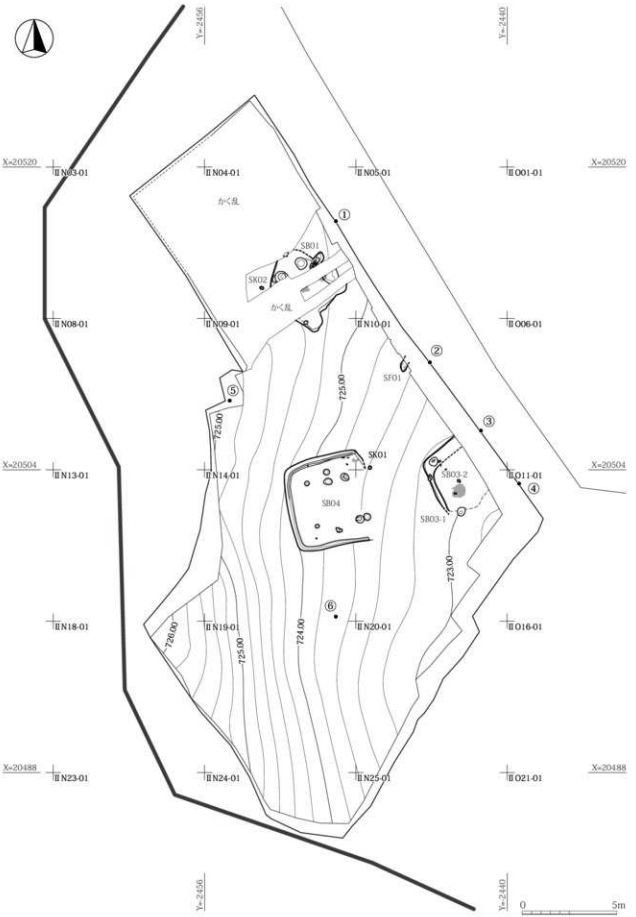
第２節　遺構と遺物

１　遺構

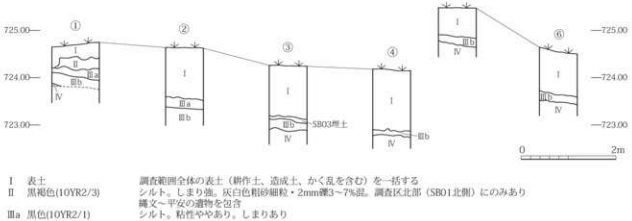
竪穴建物跡は古墳時代前期が３軒、奈良時代１軒を検出した。そのほか、時期不明の焼土跡１か所と土坑５基がある。



第73図　遺跡範囲・位置図


Y=2456
Y=2440
X=20520
X=20504
X=20488
Ⅲ N03-01
Ⅲ N04-01
Ⅲ N05-01
Ⅲ O01-01
Ⅲ N08-01
Ⅲ N09-01
Ⅲ N10-01
Ⅲ O06-01
Ⅲ N13-01
Ⅲ N14-01
Ⅲ O11-01
Ⅲ N18-01
Ⅲ N19-01
Ⅲ N20-01
Ⅲ O16-01
Ⅲ N23-01
Ⅲ N24-01
Ⅲ N25-01
Ⅲ O21-01
かく乱
かく乱
SB01
SK02
SK01
SB04
SB03-2
SB03-1
SF01
725.00
726.00
724.00
723.00
①
②
③
④
⑤
⑥
0
5m

第74図　遺構全体図



Ⅰ	表土	調査範囲全体の表土（耕作土、造成土、かく乱を含む）を一括する
Ⅱ	黒褐色(10YR2/3)	シルト。しまり強。灰白色粗砂細粒・2mm礫3～7%混。調査区北部（SB01北側）にのみあり 縄文～平安の遺物を包含
Ⅲa	黒色(10YR2/1)	シルト。粘性ややあり。しまりあり 5～10mmにぶい黄褐色シルトブロック2%・1～2mmにぶい橙色シルト1%以下混
Ⅲb	黒褐色(10YR2/3)	シルト。粘性ややあり。しまりあり。2～10mm砂礫5～10%混 北部では1～2mmにぶい橙色シルト1%以下混。ⅢaからⅣへの漸移層
Ⅳ	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト。粘性・しまりあり。2～40mm砂礫20～50%混。部分的に砂礫層状に混。地山

第75図　土層柱状図

（１）竪穴建物跡

ＳＢ 01（第76図）

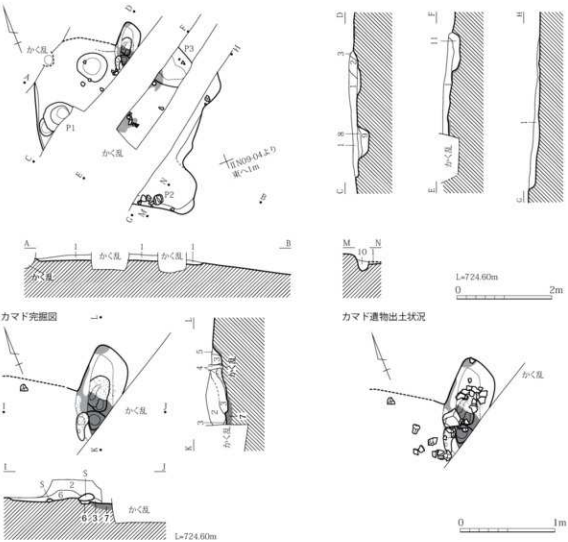
位置：ⅡＮ 04・09 グリッド。**検出：**Ⅲａ層上面で検出した。かく乱や削平のため広範囲に壊されていた。**重複関係：**なし。**構造：**床面は地山を平坦に掘り込む。壁面は平坦な床面から緩やかな角度で立ち上がる。**カマド：**北東壁の中央にある。燃焼部は被熱による硬化・赤化が著しく、左袖部で袖石の抜取り痕を検出した。**出土遺物：**カマドやその周辺から、須恵器坏、土師器坏、黒色土器の高台付埦、武蔵甕が出土した。**時期：**出土土器および放射性炭素年代測定（ＡＭＳ年代測定）の結果から、奈良時代と考える。

ＳＢ 03－１、ＳＢ 03－２（第77図）

位置：ⅡＮ 10・15 グリッド。**検出：**Ⅲａ層上面で黒褐色土を埋土とする落込みを検出した。埋土にはブロック土が混ざることから、人為的な埋戻しの可能性が高いと推測した。**重複関係：**本建物跡東側の床面を一段下掘り下げた位置に、炉跡と新たな床面を検出した。床面の段差が建物跡内に収まることから建物の改築と考えた。改築前の部分をＳＢ 03 － 1、改築部分をＳＢ 03 － 2とした。**構造：**床面は地山を利用して構築している。壁の立上がりは削平のためごくわずかであるが、残存する北壁、西壁ではほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は北西隅と南西部に各１基検出した。２基の柱穴に柱痕はなかった。**炉：**ＳＢ 03 － ２で地床炉を確認した。炉の燃焼部分は良く焼け、焼土面が被熱による硬化が明瞭であった。**出土遺物：**遺物の出土量はわずかで、埋土から古墳時代前期の蓋が出土した。**時期：**出土土器および放射性炭素年代測定（ＡＭＳ年代測定）の結果から、古墳時代前期と考える。

ＳＢ 04（第78図、ＰＬ６）

位置：ⅡＮ 09・10・14・15 グリッド。**検出：**Ⅲａ層上面で、黒褐色粘質シルトを埋土とする落込みを確認した。**重複関係：**なし。**構造：**床は地山を利用して構築している。壁は北・西・南壁は明確で、床面からほぼ垂直に立ち上がる。周溝は北・西・南壁際で検出した。柱穴は、主柱穴と考えられるＰ１～Ｐ４の４本が確認できた。それ以外ではＰ５・６の２基を確認したが、掘込みは浅く用途は不明である。**炉：**Ｐ１・２間に地床炉がある。被熱による赤化は若干で、硬化も弱く埋土内に焼土粒子が若干残る。**出土遺物：**Ｐ６から古墳時代前期の甕が、西壁の際では床面から浮いた状態で古墳時代前期の底部穿孔壺の破片が出土した。南西隅の床面近くでは砥石が出土している。**時期：**出土土器および放射性炭素年代測定（ＡＭＳ年代測定）の結果から、古墳時代前期と考える。



1　黒褐色(10YR2/3)　シルト。しまり強。灰白色細砂10%・5～20mm礫4%・1～3mm焼土3%・1～2mm灰白色粗砂2%混
5mmにぶい黄褐色シルト層状に混
10mm厚被熱部あり

2　黒褐色(10YR2/3)　シルト。しまり強
1～5mm焼土粒3%・1～3mm礫3%混

3　黒褐色(10YR2/3)　シルト。しまり強。1～5mm焼土粒10～20%混
天井などの崩落土か

4　暗赤褐色(5YR3/4)　シルト。粘性ややあり。しまりあり
焼土ブロック主体。黒褐色シルト50%混
火床直上層

5　橙色(5YR6/6)～明褐色(5YR5/6)　シルト。しまり強。焼土粒多混

6　黒褐色(10YR2/3)　シルト。しまり強。1～10mm焼土粒7～10%混
黄褐色シルト質粘土少混。カマド袖崩落土か

7　被熱赤化部

8　黒褐色(10YR2/2)　シルト。しまりあり
10～40mmにぶい黄褐色シルト20%・2～5mm礫7%混。人為的な埋戻土

9　黒褐色(10YR2/2)　シルト。しまりあり
10～40mmにぶい黄褐色シルト30%・10mm礫1%混。人為的な埋戻土

10　黒褐色(10YR2/3)　シルト。しまりややあり
1mm以下にぶい黄橙色粗砂7%・5mmにぶい黄褐色シルト1%混
上面に炭化物粒1%混

11　黒褐色(10YR2/3)　シルト。しまり強
1～3mm灰白色砂粒15%混
下層に1～5mm焼土粒15～30%混
自然堆積か

第76図　ＳＢ０１　遺構図

（２）焼土跡

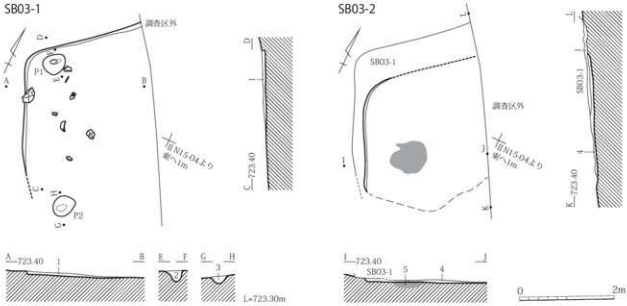
ＳＦ 01（第74図）

位置：ⅡＮ 10グリッド。**検出：**基本層序Ⅲ層上面で焼土粒のまとまりを検出した。**重複関係：**なし。**形状・規模：**長軸約 60cm、短軸約 45cm の不整形を呈し、最深部は４ cm である。**時期：**不明。

（３）土坑

ＳＫ 01（第79図）

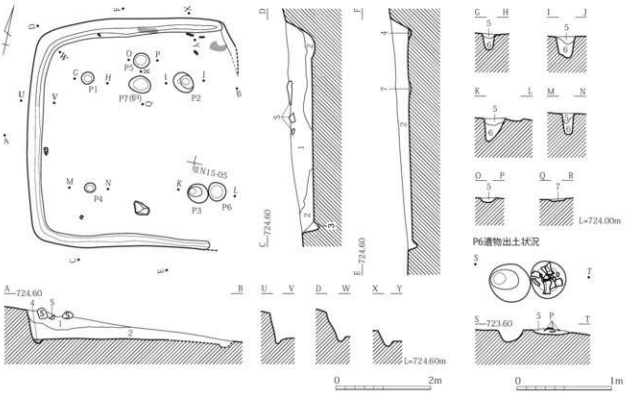
位置：ⅡＮ 10・15グリッド。**検出：**Ⅲ層上面で検出した。**重複関係：**なし。**埋土：**暗褐色砂混じり粘質シルトの単層である。**形状・規模：**直径 16cm の円形で、深さ 7cm を測る。**時期：**不明。



SB03-1
1 黒褐色(10YR2/3)　細砂混粘質シルト。粘性しまりあり
　　2～15mm礫7%・2～5mm炭化物3%混
2 黒褐色(10YR2/3)　砂混粘質シルト。粘性あり。しまりややあり
　　2～5mm炭化物3%・2～10mm礫2%・
　　2mm以下焼土粒2%混
3 黒褐色(10YR2/3)　砂混粘質シルト。粘性あり。しまりややあり
　　2～10mm礫5%・2～5mm炭化物1%混

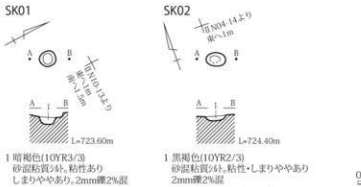
SB03-2
4 黒褐色 (10YR2/2)　粘質シルト。粘性あり。しまり強
　　2～ 60mm 礫 9%・2～ 10mm
　　焼土粒 3%・2～ 5mm 炭化物 2% 混
5 赤褐色 (5YR4/8)　被熱赤化部

第77図　ＳＢ０３-1・2　遺構図



1 黒褐色(10YR2/3)　粘質シルト。粘性・しまりあり
　　2～5mm褐色土粒2%・2～10mm礫1%混
　　中央部に200～500mm礫混
2 黒褐色(10YR2/3)　砂混粘質シルト。粘性・しまりややあり
　　2～15mm礫7%・焼土粒2%・炭化物粒2%混
3 黒褐色(10YR2/2)　砂質シルト。粘性・しまりややあり
4 暗褐色(10YR3/3)　しまりなし。周溝埋土。羽目板抜取りの崩落土か
5 黒褐色(10YR2/2)　粘質シルト。粘性あり。しまりややあり
　　2～10mm礫2%混
6 暗褐色(10YR3/3)　砂混粘質シルト。粘性あり。しまり弱
　　2～15mm礫3%混
7 黒褐色(10YR2/3)　粘質シルト。粘性あり。しまりややあり
　　5mm焼土粒5%・2～30mm炭化物3%混

第78図　ＳＢ０４　遺構図



第79図　ＳＫ０１・０２　遺構図

ＳＫ 02（第79図）

位置：Ⅱ Ｎ４グリッド。**検出：**Ⅲ層上面で検出した。**埋土：**黒褐色砂混じり粘質シルトの単層である。**形状・規模：**長軸20cm、短軸14cm の楕円形で、深さ５ cm を測る。**時期：**不明。

２　遺物

（１）遺構出土土器

ＳＢ 01（第80図、ＰＬ９）

１は須恵器の高台付坏で、底部のみが残存する。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後回転ヘラケズリを施す。底径は 8.1cm を測る。２は土師器の坏で、底部は回転糸切り後ヘラケズリ、体部は回転ナデ後、下端の一部に回転ヘラケズリを施す。口径 8.8cm、器高 3.1cm、底径 5.0cm を測る。３は黒色土器の高台付埦で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデの後内面にヘラミガキを施す。口径は推定 14.6cm、残存部の器高 3.7cm を測り、底部は欠損する。４・５は土師器の武蔵甕で、器厚が薄い。口縁部はヨコナデ、体部は横方向・縦方向のケズリを施す。４は口縁部から体部上方のみ残存しており、口径は推定 22.0cm、残存部の器高 8.1cm、５は口径 20.6cm、残存部の器高 28.8cm で、底部は欠損する。

ＳＢ 03（第80図、ＰＬ９）

６～８は土師器の壺で、口縁部のみ残存ずる。６は有段口縁を呈し、屈曲部に刻みをもつ隆帯を貼付する。内外面ともにナデ調整だが、内面の一部はミガキを施す。口唇部は赤色塗彩の可能性が高い。７は口縁部の内外面にヨコナデ、外面の頸部にハケを施す。８は頸部付近で、外面はハケ、内面は指押さえとヨコナデを施す。残存部の器高は 5.3cm を測る。９・10 は土師器の甕である。９は口縁部の破片で、内外面にナデを施す。10 は胴部の破片で、外面はハケ、内面はヨコナデを施す。11 は赤色塗彩された土師器の鉢の底部破片である。内外面は横方向のミガキ、底部下端から底面にかけてはヘラケズリを施す。底径は 5.2cm を測る。12 は土師器の蓋で、外面は上半に縦方向のヘラケズリ、下半に粗いナデを施す。内面はナデと粗いヘラナデを施す。

ＳＢ 04（第80図、ＰＬ９）

13 は土師器壺と推測する底部の破片で、底面に焼成後の穿孔がある。外面はヨコナデで、下端はヘラケズリ、内面は縦方向のミガキを施す。14～16 は土師器の甕である。14・15 は口縁部で、14 は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケを施す。15 は有段口縁を呈しており、外面にヨコナデと縦方向のハケ、内面にヨコナデと横方向のナデとヘラケズリを施す。16 は口縁部内外面にヨコナデ、頸部外面に縦方向のハケ、頸部内面に横方向のケズリ、体部外面は斜め方向のケズリを施す。口径は推定で 19.6cm、器高は残存部で 22.1cm を測り、底部は欠損する。

（２）遺構外出土土器（第80・81図）

１～４は縄文土器である。１・２は付加条縄文を施文する。３・４は縄文ＬＲ・ＲＬの結束羽状縄文を施文しており、４は菱形構成と推測する。いずれも胎土に少量の繊維を含む。時期は前期前葉であろう。

５・６は古墳時代前期の土器である。５は壺の口縁部で、端部を折り返し、口唇部には刺突を行う。内外面はナデを施す。６は甕の口縁部で、外面はハケ調整、内面はナデ調整を施す。

７・８は奈良時代の須恵器坏である。７は底部に回転糸切り、体部に回転ナデを施す。口径は推定13.7cm、器高4.1cm、底径は推定6.5cmを測る。８は底部外面にヘラケズリ、体部に回転ナデを施す。口径は推定で14.6cm、器高3.5cm、底径は推定9.8cmを測る。９～12は、奈良時代の可能性が高い須恵器の甕である。９は口縁部で、内外面にヨコナデを施し、外面には刺突を行う。10は口縁部で、外面にヨコナデと縦方向のハケ、内面にヨコナデを施す。11は体部で、外面に平行タタキ、内面にナデを施す。12は胴部で、外面に格子タタキ、内面にナデを施す。

（３）石器・石製品（第81図、ＰＬ10）

13～17は、縄文時代の可能性が高い石器である。13はチャート製、14・15は黒曜石製の石鏃である。いずれも凹基無茎鏃で、13は抉りが深く、14・15は浅い。16は微細な剥離がある剥片で、断面が三角形を呈する厚手の黒曜石剥片の二側縁に剥離痕が残る。15は透閃石岩製の磨製石斧で、基部側半分以上を欠損する。比較的薄身で側面は丸みがあり、身の中央部付近に最大幅をもつと推定する。18はSB04から出土した砂岩製の砥石で、表裏面および側面に線状の使用痕が残る。古墳時代前期の可能性が高い。

第３節　自然科学分析

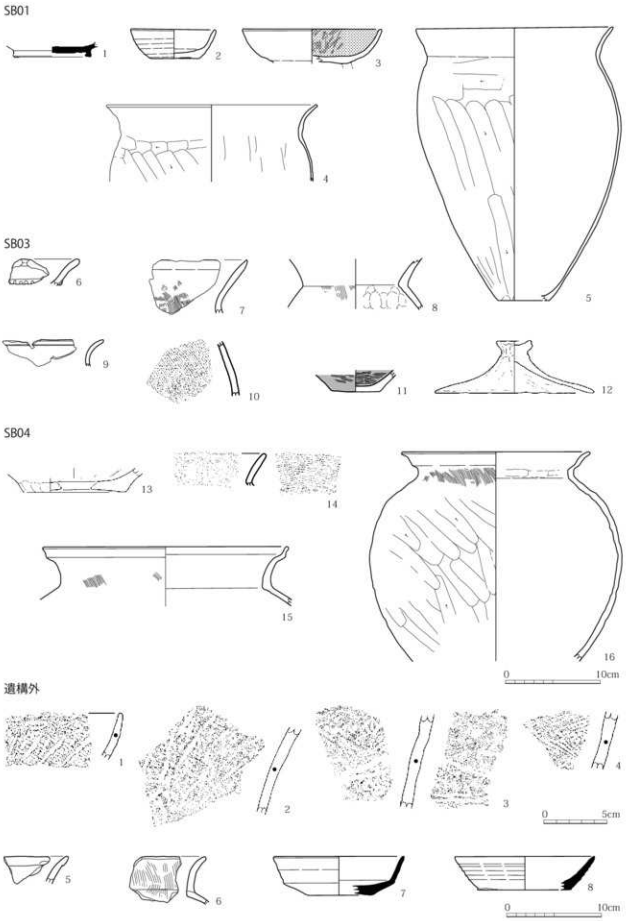
古墳時代前期と奈良時代の竪穴建物跡から出土した炭化材を試料として、遺構の年代を推定するため、株式会社加速器分析研究所に放射性炭素年代測定（ＡＭＳ年代測定）を業務委託した。

分析の結果、古墳時代前期とした２軒の竪穴建物跡（SB03、SB04）については３世紀中頃～４世紀、奈良時代とした竪穴建物跡（SB01）は７世紀中頃～８世紀後半に相当する測定値を得た。なお、分析のデータは添付のDVDに掲載した。

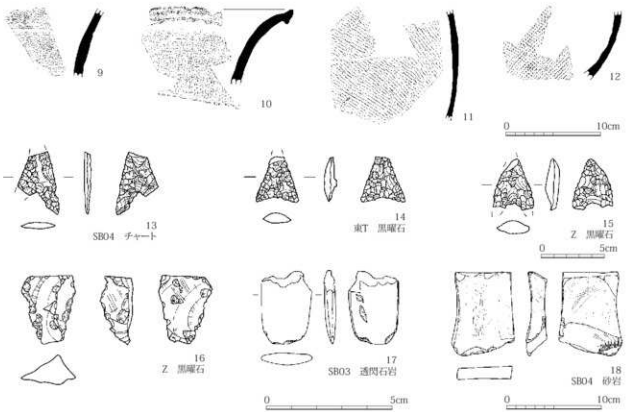
第４節　小結

今回の調査では、古墳時代前期と奈良時代の集落の一端がわかった。

検出した竪穴建物跡ＳＢ03とＳＢ04は、出土遺物と放射線炭素年代測定により、古墳時代前期と考えた。北側の丘陵地に隣接する和田遺跡の集落よりやや新しい時期の遺構と位置付けられる。滝遺跡の立地は、丘陵先端部に小河川等の浸食により形成された谷戸地である。和田遺跡を挟んで北側に位置する上滝・中滝・下滝遺跡も同様である。このような集落の在り方は、周辺地域の一つの特徴である。各時期の集落が形成された要因までは探れなかったが、新たな成果を提供できたと考えている。


SB01
1
2
3
4
5
SB03
6
7
8
9
10
11
12
SB04
13
14
15
16
0
10cm
遺構外
1
2
3
4
0
5cm
5
6
7
8
0
10cm

第80図　出土遺物（1）


9
10
11
12
0
10cm
13
SB04　チャート
14
東T　黒曜石
15
Z　黒曜石
0
5cm
16
Z　黒曜石
17
SB03　透閃石岩
0
5cm
18
SB04　砂岩
0
10cm

第81図　出土遺物（２）

第10章　家浦遺跡

第1節　遺跡の概観

家浦遺跡は、千曲川左岸の中沢川によって開析された小田切の谷地形の一画の微高地上に位置し、その平坦面は、水田や果樹畑に利用されている。

家浦遺跡は、縄文・古墳・奈良・平安時代の散布地として周知されている。2008（平成20）・2009年度には、市教委により今回の調査区東側に隣接する地点で発掘調査が行われ、縄文時代～古代の遺物とともに土坑8基、溝跡4条、土坑（ピット）65基が検出された（市教委2010）。

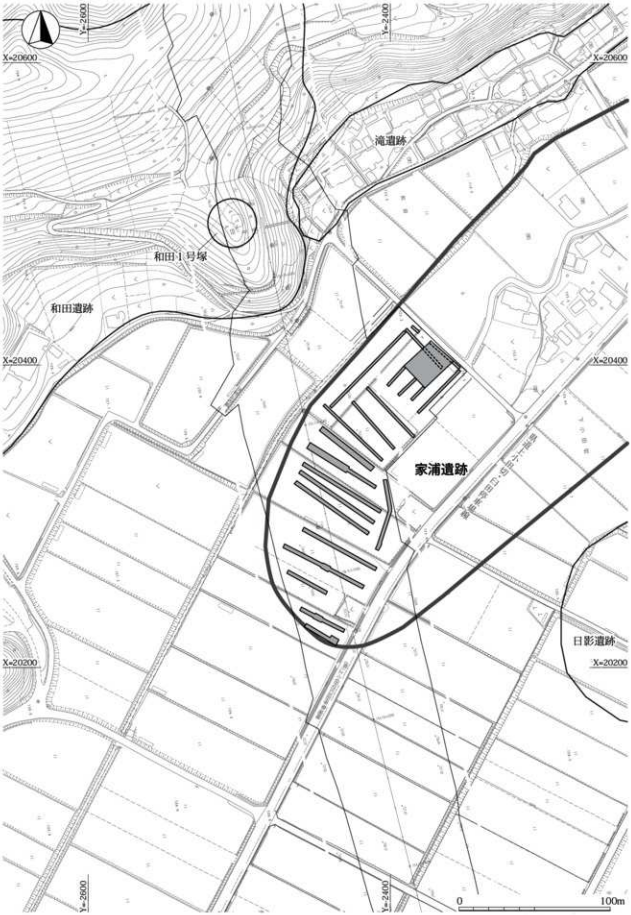
第2節　調査の概要

発掘作業は、2008（平成20）年度および2010年度に実施した。

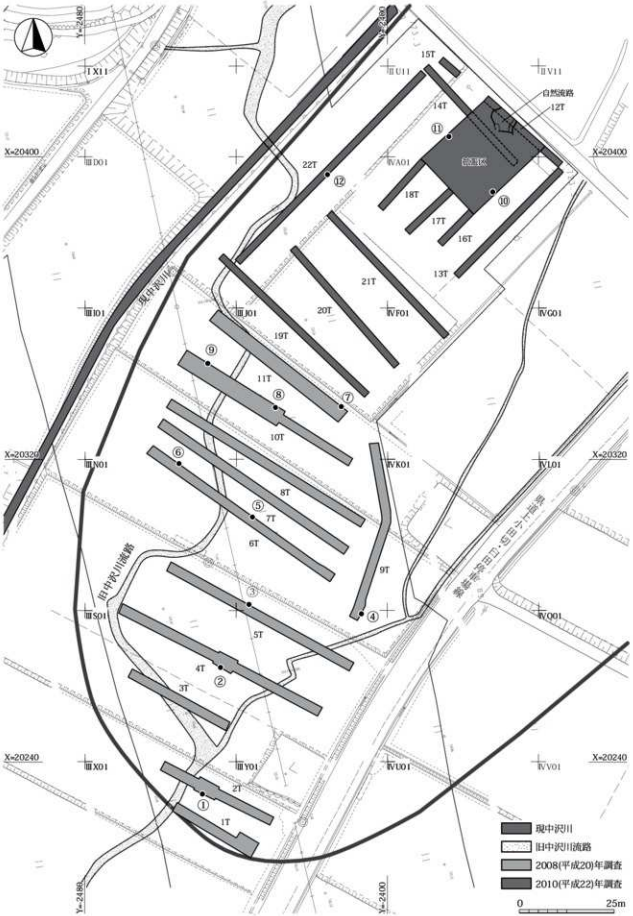
2008年度は、県道上小田切・臼田停車場線から北西側の現中沢川までの範囲で、調査面積10,620㎡である。調査区一帯は水田で、旧臼田町による構造改善（ほ場整備）事業が実施された地域である。遺構の遺存状態と分布状況を把握するため、11本のトレンチを設定し、重機により掘削した（第82・83・84図）。この結果、一帯は構造改善以前が旧中沢川沿いの低地であること、県道上小田切・臼田停車場線寄りの南東側は微高地を形成していることがわかった。微高地部分は現水田層直下に砂礫層が露出し、削平を受けていることも明らかとなった。遺構は検出できず、遺物は現水田層から古代の須恵器の小片が2点出土した。

2010年度は、東側5,600㎡についてトレンチ調査を行った（第83・84図）。その結果、調査区南東側で2008年度と同様、微高地上の高まりを検出したが、現耕作土と暗褐色土（層厚15～50㎝の客土層）直下に黄褐色土、砂礫層が露出し、構造改善によって削平を受けていることがわかった。一方、北東端の市道寄りでは小礫を多量に混入する黒褐色土を検出し、そこから土器が数点出土した。この黒褐色土の広がりを確認するため、周辺で面的調査を行ったが、遺構・遺物はなかった。この黒褐色土については、削平を受けずに残った自然流路跡と考えている。

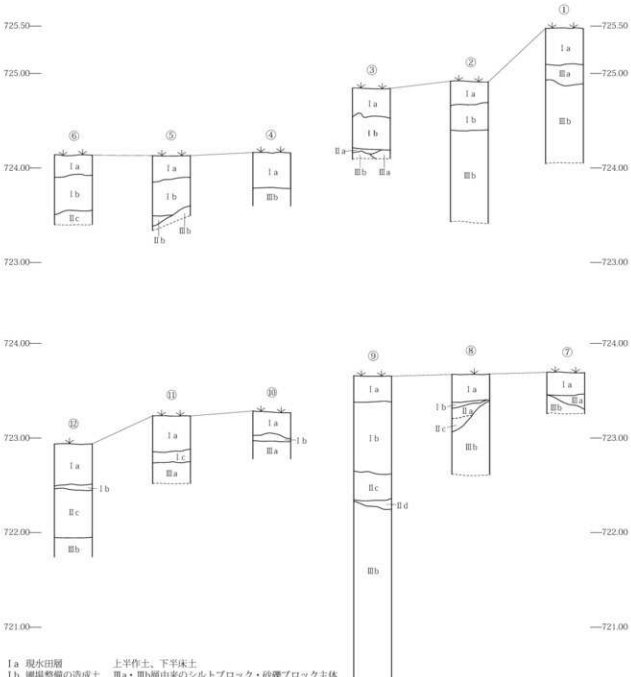
北西側では、上層から現耕作土、シルト層（旧水田層）が堆積し、その下層には層厚2m以上の砂礫層が続くため、中沢川の旧河道あるいはそれに伴う氾濫原の低地（第83図）と判断した。遺構は検出できず、遺物が数十点出土したが、いずれも小片であった。第85図1は平安時代の須恵器坏蓋のつまみ部分。2は須恵器壺の頸部でタタキが残る。3は須恵器甕の口縁部で、櫛描き波状文を描く。



第82図　遺跡範囲・位置図



第83図　トレンチ・調査区配置図



Ⅰa　現水田層	上半作土、下半床土
Ⅰb　圃場整備の造成土	Ⅲa・Ⅲb層由来のシルトブロック・砂礫ブロック主体
Ⅱa　灰黄褐色(10YR4/2)	シルト。圃場整備直前の水田層か
Ⅱb　黒色(10YR1.7/1)	シルト質粘土
Ⅱc　灰褐色(7.5YR4/2)	シルト質粘土
Ⅱd　灰褐色(7.5YR4/2)	シルト質粘土。Ⅱc層土主体。砂混
Ⅲa　灰黄褐色(10YR6/2)	シルト。Ⅲb層中に脈状・スポット状に入り込む。微高地部のみにみられる。削平により残存しないところが多い
Ⅲb　基盤層	砂礫を主体。砂・シルトの互層。礫は円礫。上部は酸化のため黄褐色～橙色を呈し、下部はグライ化 上部はシルト粒子が混じり、礫は200mm以下(5mm以下が主体)。下部は軟質で砂粒・礫径が大きくなり、300mm以上の礫も目立つようになる(10T深掘部)。層厚2m以上

第84図　土層柱状図

第85図　出土遺物

第3節　小結

発掘調査の結果、遺跡の北側では旧中沢川の氾濫が、南側では微高地の形成を読み取り、構造改善事業のため削平を受けていたこともわかった。調査区東側に隣接する市道工事に伴う市教委による発掘調査では、複数の遺構が検出されている。削平を受けていない微高地上に位置するため遺構が残存していたと考えられる。

引用・参考文献

市教委 2010『家浦遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 179

第11章　田島塚　水堀塚

第１節　遺跡の概観

佐久市南部の千曲川左岸には、八ヶ岳連峰から東北方に延びる丘陵が幾重にも張り出している。水堀塚はそうした丘陵のひとつの標高約781ｍを測る尾根上に立地する。田島塚は同じ丘陵上の約200ｍ北、標高約774ｍに位置する（第86図）。丘陵の北側には千曲川の支流片貝川が流れる平地が広がり、水田地帯を形成している。当初、２基の塚は「田島古墳」、「水堀古墳」として登録されていたが、今回の発掘調査により、古墳ではないことが判明したため、市教委は、「田島塚」、「水堀塚」へと遺跡名を変更した。

第２節　田島塚

１　調査の方法と経過（第87・90図、ＰＬ６）

2007（平成19）年度に、現況地形を記録するために空中写真撮影および地形測量を実施し、翌2008年度に本格的な発掘作業を行った。

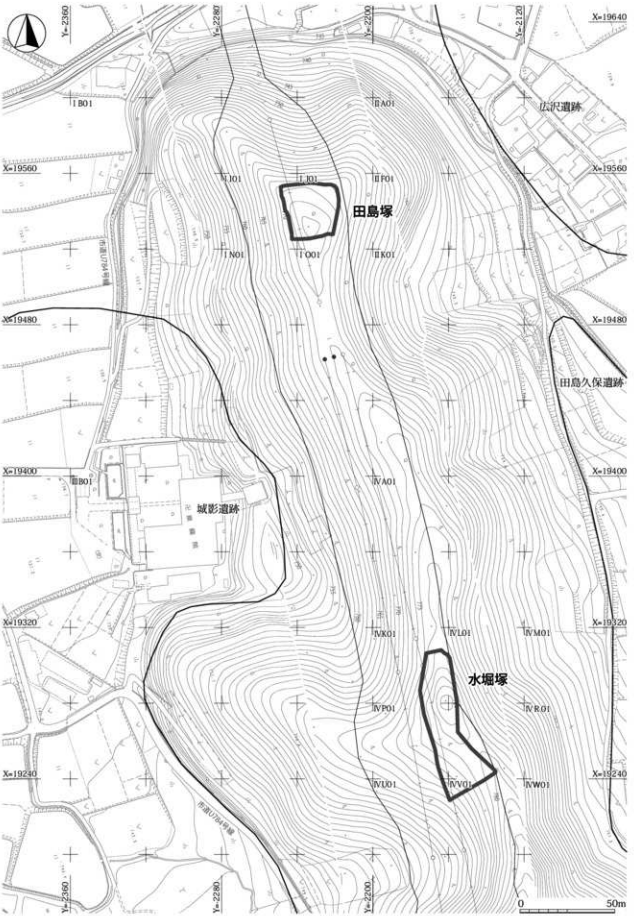
発掘は竪穴系の内部主体をもつ古墳と想定して進めた。マウンド頂部を中心に東西南北の十字ベルトを設定し、ベルトで区切られた区画を北東から時計回りに１区～４区に分けた。ベルトに沿ったトレンチで土層観察を行って、マウンド部分の土層を１層（表土）、２～７層（盛土）、８層（旧表土）に分層し、上位から層ごとに発掘した。地形測量は、前年度に行った調査前の現況地形に加え、６層上面および８層上面地形の測量を実施した。

２　塚の構造と遺物の出土状況（第87～89図）

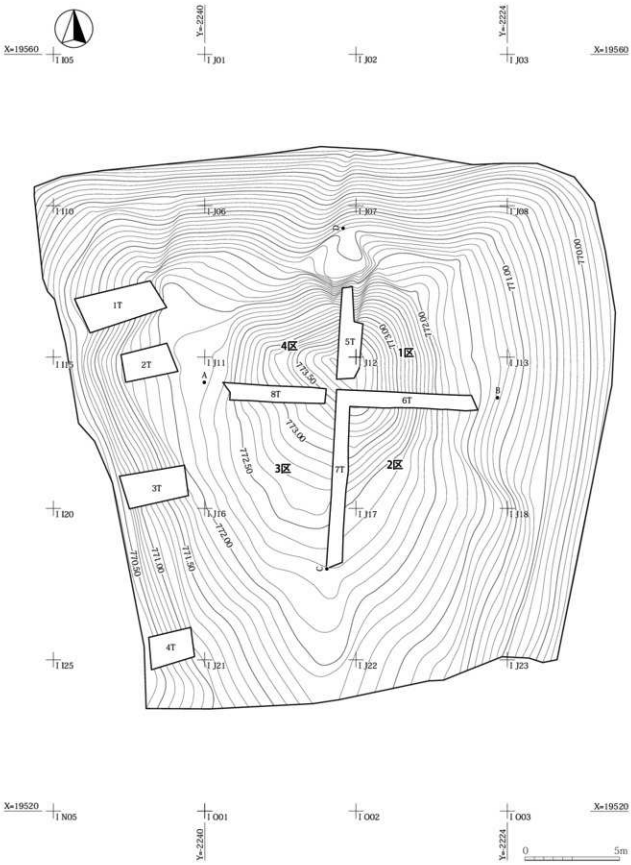
田島塚は直径約11.7ｍ、高さ約２ｍを測る円形状のマウンドをもつ。盛土は褐色～暗褐色シルトで、旧表土の直上から、ほぼ水平に積み重ねている。７層および５・４・３層は局部的に存在する層であるが、６層および２層はマウンド全域に及ぶ。版築的な構造は認められない。旧表土上面～６層下部では礫の集積を検出した。

遺物は、２層から古代須恵器坏片、３層から文久永宝、６層から古代須恵器坏・須恵器甕・黒色土器坏片、鉄鏃が出土している。旧表土の８層からは古代須恵器坏・黒色土器坏片が出土した。

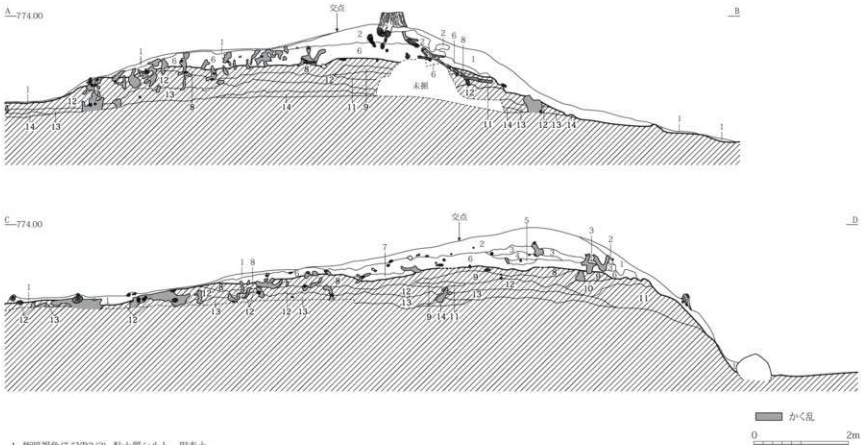
最終的に盛土はすべて掘下げたが、盛土内およびその直下に埋葬施設等の内部施設は存在せず、マウンド外表および周囲にも葺石・埴輪・周溝等の外部施設はなかった。盛土遺構であることは確かだが、出土遺物の時期からしても、古墳ではないと判断する。発掘段階では上記の遺物出土状況から、６層が古代以降、２・３層が近世末以降、と２時期の築成があることを想定した。しかし、流出を考慮したとしても６層のみでは低平にすぎること、２層と６層間に腐植土層の形成がないことから、築成に時期差がある蓋然性は低いだろう。田島塚の築造時期については、３層出土の文久永宝により、1863年以降と考える。



第86図　遺跡範囲・位置図

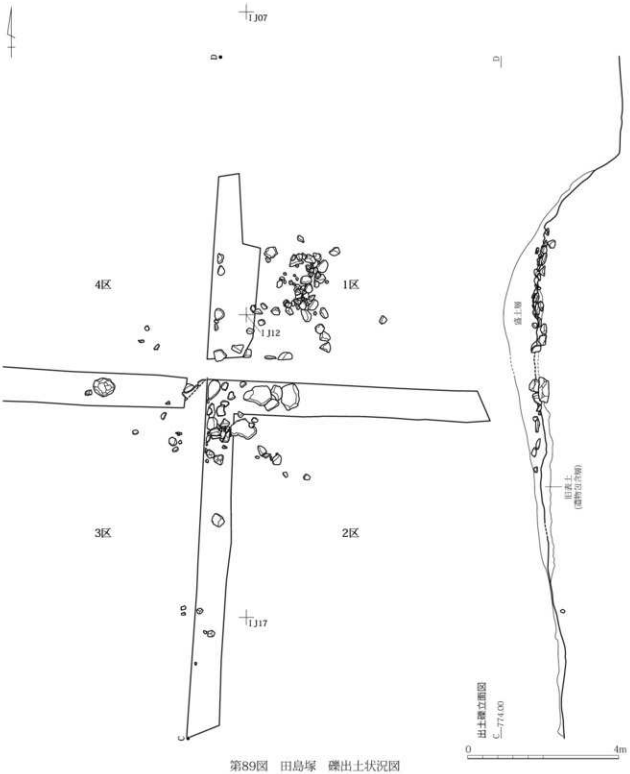


第87図　田島塚　トレンチ・調査区配置図

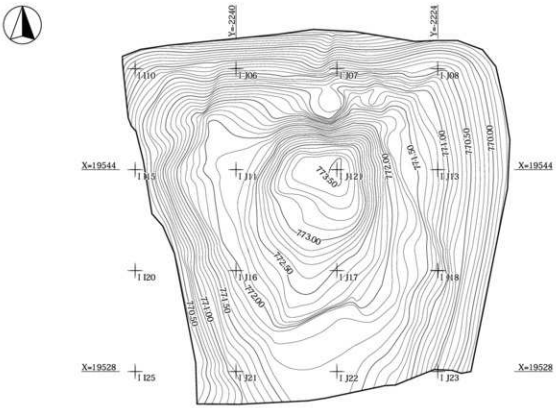


1　極暗褐色(7.5YR2/3)　粘土質シルト。現表土。
2　暗褐色(7.5YR3/3)　粘土質シルト。粘性あり。しまりややあり。地山主体。2mm以下軽石2%・2～20mm礫2%混。木根によるクラック多数あり。幕末以降の盛土
3　褐色(7.5YR4/4)　粘土質シルト。しまり強。2～10mm礫5%・2～5mm軽石2%混。幕末以降の盛土
4　褐色(7.5YR4/3)　粘土質シルト。2～10mm礫10%・25mm礫1%・2～5mm軽石1%混。盛土
5　暗褐色(7.5YR3/4)　粘土質シルト。2～3mm軽石1%・2～5mm礫1%混。盛土
6　褐色(7.5YR4/4)　粘質シルト。明褐色土(地山)主体。2～5mm礫2%・2～5mm軽石1%混。8c後半以降の盛土
7　暗褐色(7.5YR3/4)　粘質シルト。2～15mm礫3%・2～5mm軽石2%混。8c後半以降の盛土
8　黒褐色(7.5YR3/2)　粘質シルト。2～5mm軽石1%・2～30mm礫1%・100～500mm礫1%混。旧表土。遺物包含層。
9　暗褐色(7.5YR3/4)　粘質シルト。しまりあり。2～20mm礫3%・2～5mm軽石2%・20～40mm礫1%・100～120mm礫1%混。地山
10　暗褐色(10YR3/3)　粘土質シルト。しまりあり。2～5mm軽石1%・2～10mm礫1%混。地山
11　暗褐色(10YR3/4)　砂質シルト。しまりややあり。2～10mm礫45%・30～50mm礫1%・100～150mm礫1%混。地山
12　暗褐色(7.5YR3/3)　粘土質シルト。2～15mm軽石1%・2～10mm礫1%・1mm橙色土粒1%混。地山。
13　黒褐色(7.5YR3/2)　粘土質シルト。しまりややあり。2～20mm礫2%・50mm礫1%・2mm以下橙色土粒1%混。地山
14　暗褐色(7.5YR3/3)　粘土質シルト。2～50mm基盤層ブロック5%・2mm軽石1%混。地山

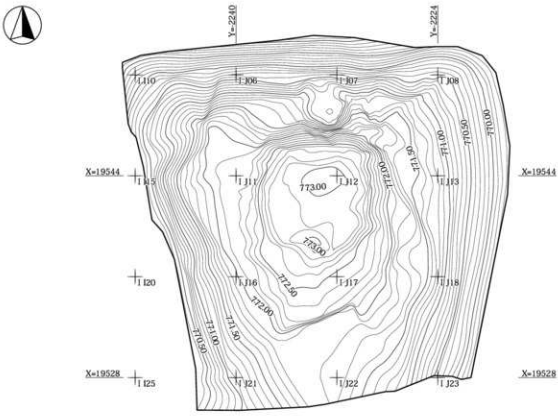
第88図　田島案　断面図



第89図　田島塚　礫出土状況図



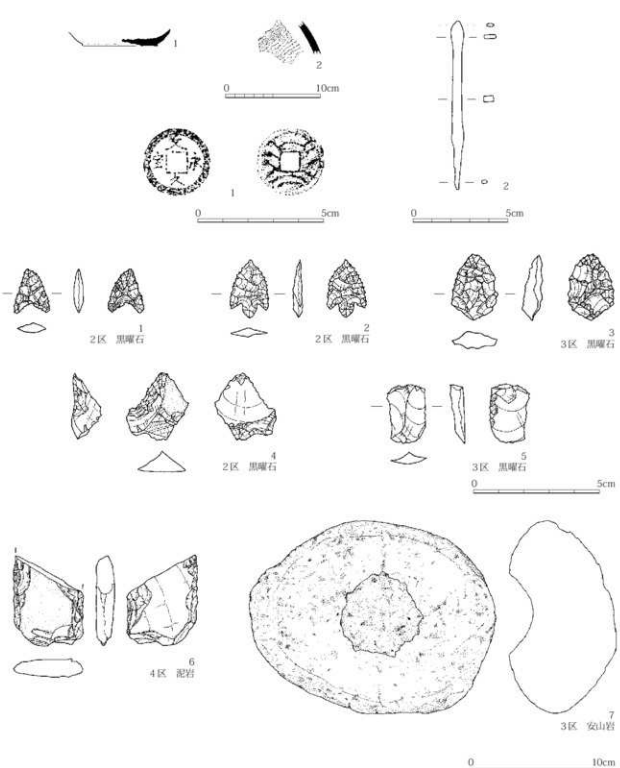
第2面



第3面

0　　8m

第90図　田島塚　第２・３面　地形図



第91図　田島塚　出土遺物

3　遺物（第91図、ＰＬ９・10）

石器の１～３は黒曜石製の石鏃および石鏃未製品である。１は凹基無茎鏃で、先端は非対称形である。２は凹基有茎鏃で、外湾気味の側縁が鋸歯縁を呈する。３は厚身で基部の加工がなく、未製品であろう。４・５は黒曜石製の切削具である。４は、断面形が三角形を呈する不整形剥片の１辺に、急角度の剥離を

施した掻器である。5は、薄身の縦長剥片の1側縁に剥離痕がある。微細な剥離がある剥片である。6は泥岩製の打製石斧である。基部側を欠損するが短冊形と推定する。正面に自然面を残す横長剥片を素材とする。側縁の加工は入念であり、刃部が摩耗している。7は安山岩製の凹石で、楕円形礫を素材とする。一平面の中央に深い凹痕が残る。

土器は須恵器・黒色土器が出土した。1は須恵器坏の底部で、小破片だが奈良時代と推測する。2は壺もしくは小型甕の破片で、タタキを施す。小破片のため、時期は不明である。

金属製品は2点出土した。1は、1863（文久3）年から1869（明治2）年まで鋳造された文久永宝である。銭文は、寶字に「宝」を用いているので、松平慶永（春嶽）の筆になる、「略宝」と呼ばれるものに該当する（高木1999）。1区頂部トレンチ内の盛土3層中から出土した。2は、1区盛土底面礫集積下（6層）から出土した細根両刃式の鉄鏃である。鏃身部は先端のみに刃部を有し、関は明瞭でない。鏃身先端から6.3cmあたりに茎関があると思われるが、サビ膨れのため形状不明確である。長さ8.90cm、頸部幅0.50cm、頸部厚0.36cm、重さ8.2gを測る。

引用・参考文献

高木繁司 1999『近世銭』『日本史小百科　貨幣』東京堂出版

第3節　水堀塚

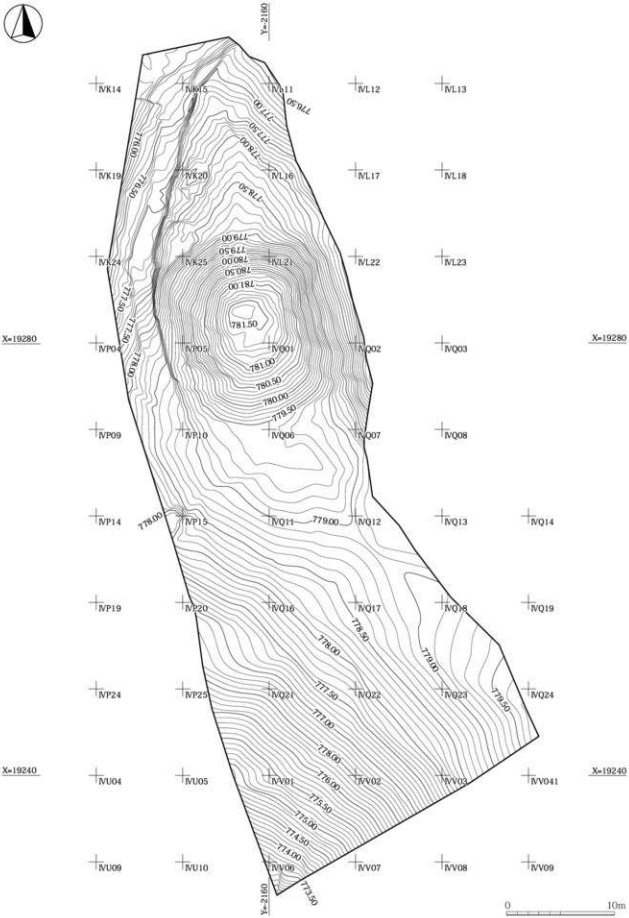
1　調査の方法と経過

調査は2008（平成20）年度に田島塚と並行して実施した。現況地形を記録するため空中写真撮影および地形測量を実施した後、本格的な発掘作業を行った。

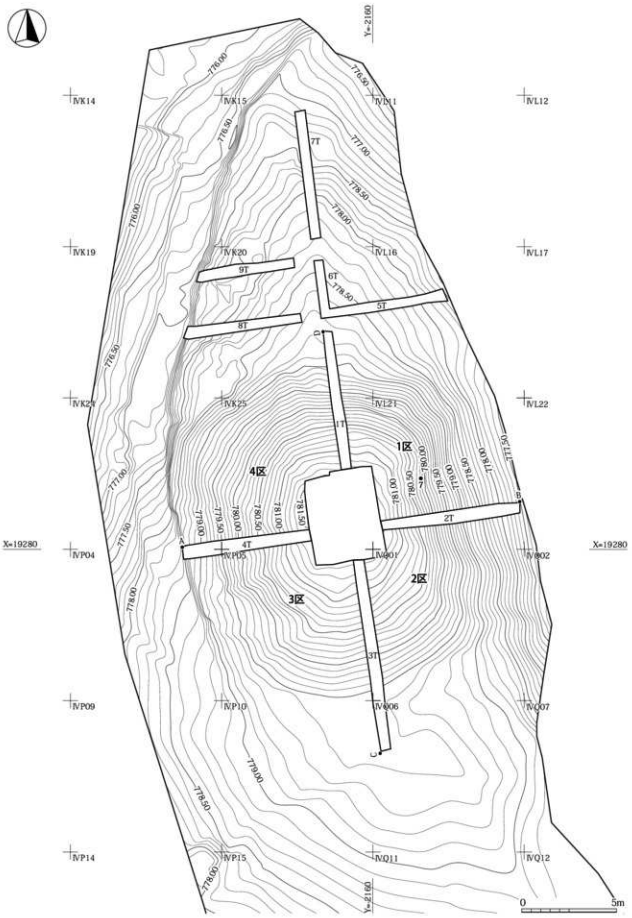
発掘は竪穴系の内部主体をもつ古墳と想定して進めた。マウンド頂部に発掘区を設定し、十字ベルトを残して発掘を開始した。並行して、マウンド斜面部に頂部十字ベルト延長方向のトレンチを設定して掘下げ、土層状況を把握した。十字ベルトおよびトレンチにより区切られた区画を北東から時計廻りに1区～4区と呼称した。また、周溝等の有無を確認するため、マウンド北側に南北2本・東西3本のトレンチを設定し掘削した。旧表土面の形状を記録するため、再度空中写真撮影および地形測量を実施した。

2　塚の構造と遺物の出土状況

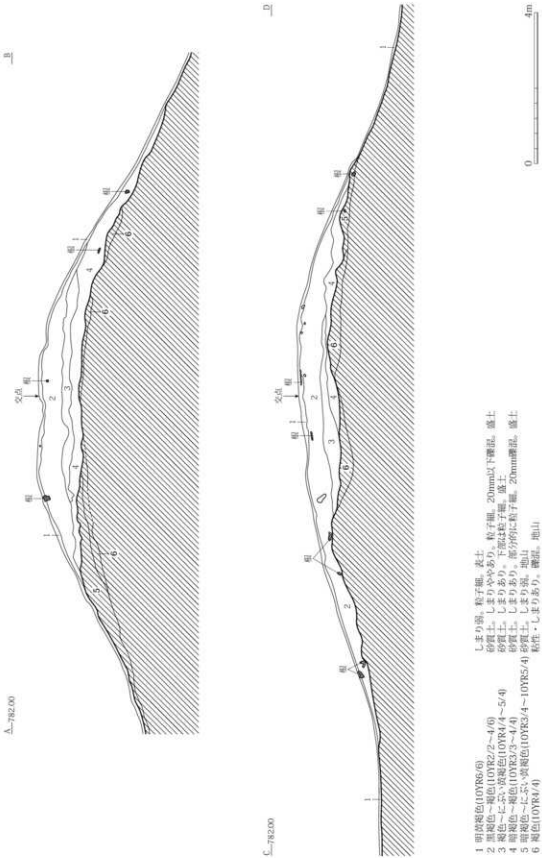
水堀塚は南北17m、東西16m、高さ2.5mのほぼ方形のマウンドをもつ。盛土は褐色主体の砂質土で、3層に大別した（2・3・4層）。旧表土（5・6層）の直上から、上面がほぼ水平になるように積上げている。版築的な構造は認められない。最終的に盛土はすべて掘下げたが、盛土内およびその直下に埋葬施設等の内部施設は存在せず、マウンド外表および周囲にも葺石・埴輪・周溝等の外部施設はなかった。遺物は、マウンド頂部で北宋銭3点・鉄釘、盛土下部で北宋銭1点・古代の須恵器甕片・縄文中期深鉢片が出土した。このほか、マウンド南裾から寛永通寶1点が出土している。内部施設・外部施設とも存在せず、出土遺物の時期からしても、古墳ではないと判断し得る。築造時期については、盛土中から北宋銭が出土していることにより、中世以降と考える。



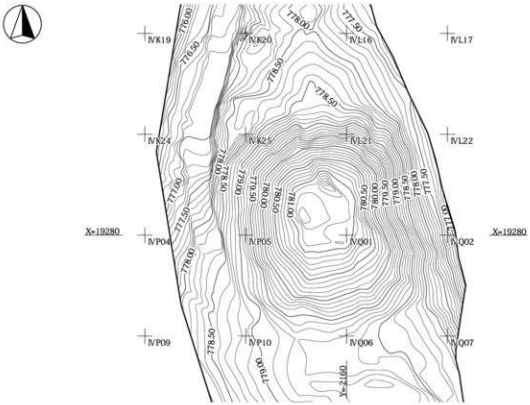
第92図　水堀塚　調査前地形図



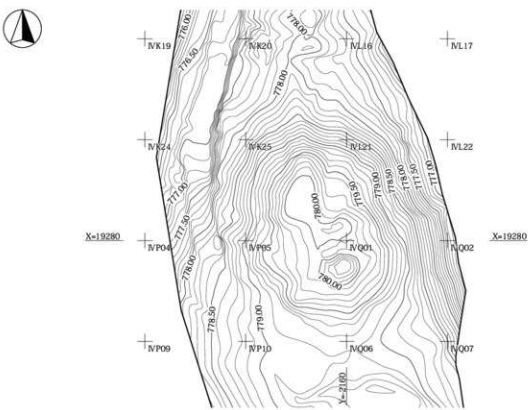
第93図　水堀塚　トレンチ・調査区配置図


A
B
782.00
782.00
北点
柱
1
2
3
4
5
6
0
4m
1 黒褐色(10YR3/6)　しまり弱、粒子細、表土
2 黒褐色～褐色(10YR2/2～4/6)　砂質土、しまりやや強。粒子細、20mm以下礫混。盛土
3 褐色～にぶい黄褐色(10YR4/4～5/4)　砂質土、しまりあり。下部は粒子細、盛土
4 黒褐色～褐色(10YR3/3～4/4)　砂質土、しまりあり。部分的に粒子細、20mm礫混。盛土
5 黒褐色～にぶい黄褐色(10YR3/4～10YR5/4)　砂質土、しまり強。地山
6 褐色(10YR4/4)　粘性・しまりあり。礫混。地山

第94図　水堀塚　断面図



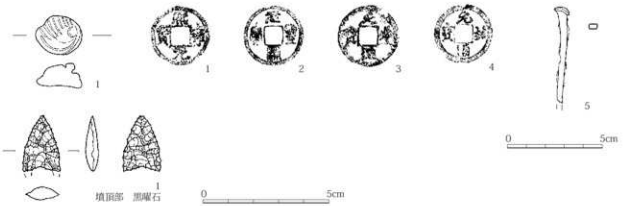
第2面



第3面

0　　8m

第95図　水堀塚　第2・3面　地形図



第96図　水堀塚　出土遺物

３　遺物（第96図、ＰＬ９・10）

石器の１は黒曜石製の抉りが浅い凹基無茎鏃である。このほか、磨滅が顕著のため、図化不能の縄文土器破片がある。隆帯装飾と雲母を多量に含む胎土の特徴から、中期初頭の可能性がある。

金属製品の１～４は銭貨である。１は熙寧元寶で頂部南北トレンチ、２は元豊通寶で頂部、３が元豊通寶で盛土下面、４は元祐通寶で頂部東西ベルトからそれぞれ出土した。このほかに南裾から銭貨１点が出土し、サビにより銭文表現が困難なため図示しなかったが、「寛永通寶」の文字が読み取れる。磁着するので鉄銭の可能性が高い。５は鉄釘である。頭部上面形は方形で、三方向に突出する。墳部南北ベルトの出土である。

土製品の１は弧線を重ねている。表土から出土した。時期・用途は不明である。

第４節　小結

田島塚・水堀塚は、出土遺物や築成状況により、古墳ではないことが明らかとなった。田島塚の築造時期は近世末以降である。水堀塚もほぼ同時期の築造である可能性を残すが、現状では、中世以降という位置付けしかできない。

塚の性格に迫り得る施設や遺物が確認されなかったため、築造契機は明確にし得ないが、境界の表示物である可能性を指摘しておきたい（第８章第５節参照）。中部横断道の建設に伴う発掘調査により、古墳から塚へと変更になった例が２基存在する（和田１号塚、庚申塚）。周辺地域では、このほかにも、内容不明の「古墳」のなかに、「塚」が含まれている可能性があるだろう。今回の一連の調査は、近世以降の塚の発掘調査事例に乏しい佐久地域において、該期の塚に関する基礎資料を提示することとなろう。

第12章　総括

本報告では佐久市の旧臼田町の範囲にある発掘調査の記録をまとめている。調査対象とした遺跡は、尾根の先端部や尾根上またはその近辺に所在していた。ここでは、時代ごとに成果を紹介し、若干の課題に触れておきたい。

縄文時代

上滝・中滝・下滝遺跡では前期前葉、中期初頭の竪穴建物跡を調査した。今回の臼田地区では唯一の集落跡である。出土した中期初頭の土器は、これまでは松本盆地が分布の北限とされた東海系の北裏C式が五領ヶ台系の土器と共伴するなど、新知見となる資料を得た。石器は黒曜石原産地のある八ヶ岳を背後にしているにもかかわらず、チャート素材の石鏃や未製品が多くある点は、この遺跡の特徴として指摘しておきたい。

弥生時代

和田遺跡では、南斜面中腹に後期後葉の竪穴建物跡２軒を検出した。隣接する南西側でも、市教委により、標高値を同じくして３軒の竪穴建物跡が調査されている。この結果から、南斜面中腹に集落域が帯状に広がる様相が分かってきたが、この立地の要因については課題として残った。

古墳時代

和田遺跡では、南斜面中腹に弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の竪穴建物跡２軒を検出した。弥生時代から継続的にこの場所が選ばれたと考えている。上滝・中滝・下滝遺跡で前期の竪穴建物跡２軒、滝遺跡でも前期の竪穴建物跡２軒を検出した。いずれも小規模な集落跡といえ、生活を支えた生業がどのようなものか、検討すべき課題と考える。

古代

寺久保遺跡では竪穴建物跡１軒を検出した。佐久平南部では山間部で平安時代後期に小規模集落（山棲み集落）が発見されているものの、その成立要因は明確にできなかった。一方、上滝・中滝・下滝遺跡では竪穴建物跡 16 軒を検出した。８世紀から 10 世紀にかけての継続した集落で、丘陵裾部の狭小な緩斜面に立地する。地形的な制約から、農耕だけに頼って自活するのは困難で、農耕以外の生業を加えていたと考え、出土遺物からそれを須恵器生産と漁撈などと想定した。

中世以降

庚申塚、和田１号塚、田島塚、水堀塚を調査した。いずれも尾根上にあり、眺望のよい位置になる。今回のような「塚」の調査事例は乏しく、貴重な資料を提示できた。しかしながら、その造られた意図などを明らかにはできなかった。

このほか、家浦遺跡では、後世の構造改善（ほ場整備）を受けていることもあり、若干の遺物の出土をみたのみであった。同様に滝ノ沢遺跡、台ヶ坂遺跡は遺構が発見されず、遺物散布地として報告した。

今回の調査によって、各時代の人々の生活痕跡が明らかとなった。今後は考古学的所見だけでなく、例えば「塚」については民俗事例、文献資料との対比などが必要となろうが、このようなことをとおして地域史がより明らかになると期待し、調査成果が活用されることを望みたい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重な御教示をいただいた多くの皆さま、この場を借りて感謝申し上げます。

滝ノ沢遺跡 トレンチ遠景（東から）

滝ノ沢遺跡 トレンチ 2（西から）

寺久保遺跡 調査区遠景（東から）

寺久保遺跡 SB01 遺物出土状況（西から）

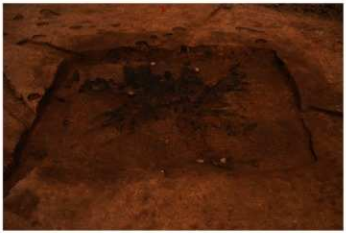
庚申塚 トレンチ設置状況（西から）

台ヶ坂遺跡 全景（南から）

台ヶ坂遺跡 トレンチ 6（南から）

上滝・中滝・下滝遺跡 全景（東から）

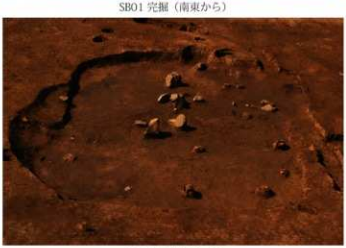
PL 2　上滝・中滝・下滝遺跡



SB01 炭化材出土状況（南東から）

SB01 完掘（南東から）

SB01 炉完掘（南東から）



SB02 完掘（南から）

SB02 カマド（南から）

SB03 完掘（南から）

SB04・05・207 完掘（南から）

SB05 遺物出土状況（西から）

SB07 完掘（南から）

SB07 カマド完掘（西から）

SB201・202 遺物出土状況（西から）

SB201 カマド完掘

SB202 カマド（南から）

SB201・202 遺物出土状況（南から）

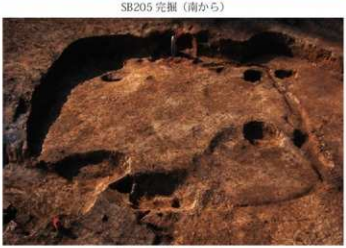
SB201・202 完掘（南から）

SB203 完掘（西から）

SB204 完掘（南から）

SB205 完掘（南から）

SB207 掘方完掘（西から）



SB208 完掘（南から）

SB208 カマド断面（南から）

SB209 完掘（南から）

SB209 カマド（南から）

SB209 カマド完掘（南から）

SB401・402 完掘（南から）

SB401 遺物出土状況（南から）

SB402 火床（南から）

SB402 火床（東から）

SB405 掘方（南から）

SB403 完掘（西から）

和田遺跡遠景（南東から）

和田遺跡 SB02 遺物出土状況（南東から）

PL 6　和田遺跡　和田１号塚　滝遺跡　家浦遺跡　田島塚　水堀塚

和田遺跡 SB03 完掘（南東から）

和田１号塚 墳丘全景（南から）

滝遺跡 調査区全景（北西から）

滝遺跡 SB04 完掘（北東から）

家浦遺跡 遠景（北から）

家浦遺跡 トレンチ２（南東から）

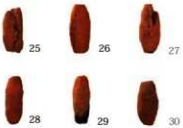
田島塚 遠景（北西上空から）

水堀塚 遠景（南西上空から）

滝ノ沢遺跡

寺久保遺跡

上滝・中滝・下滝遺跡　SB02



SB204

SB05

SB07

SB201

SB202

縄文土器、古代土器（1）、土製品（1）

PL 8　上滝・中滝・下滝遺跡　和田遺跡

上滝・中滝・下滝遺跡　SB208

29

SB209

8

SB403

12

13

SB208

31

SK186

15

16

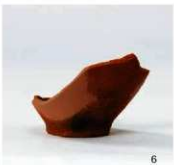
20

23

和田遺跡　SB01

1

SB02


6

5

SB03

9

12

8

13

14

弥生～古墳時代土器（1）、古代土器（2）

和田遺跡　SB03

10

19

23

SB04

3

14

和田１号塚

19

20

21

22

滝遺跡　SB01

5

SB03

12

SB04

16

家浦遺跡

1

3

2

田島塚

1

2

水堀塚

1

弥生～古墳時代土器（２）、古代土器（３）、近世陶器、土製品（２）

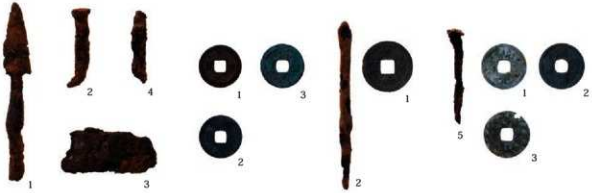
PL10 上滝・中滝・下滝遺跡 台ヶ坂遺跡 滝ノ沢遺跡 寺久保遺跡 滝遺跡 和田１号塚 和田遺跡 田島塚 水堀塚

上滝・中滝・下滝遺跡

台ヶ坂遺跡　滝ノ沢遺跡　寺久保遺跡　滝遺跡　和田１号塚

和田遺跡　滝遺跡　田島塚

上滝・中滝・下滝遺跡　和田１号塚　田島塚　水堀塚



石器、石製品、金属製品

報告書抄録

ふ り が な	たきのさわいせき てらくぼいせき こうしんづか だいがさかいせき かみたき・なかたき・しもたきいせき わだいせき わだいちごうづか たきいせき やうらいせき たじまづか みずほりづか
書 名	滝ノ沢遺跡 寺久保遺跡 庚申塚 台ヶ坂遺跡 上滝・中滝・下滝遺跡 和田遺跡 和田１号塚 滝遺跡 家浦遺跡 田島塚 水堀塚
副 書 名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書９ －佐久市その９－
シ リ ー ズ 名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	124
著 作 者 名	平林 彰、岡村秀雄、藤原直人、綿田弘実、上田 真、若林 卓
編 集 機 関	一般財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4 TEL 026-293-5926
発 行 年 月 日	2019年9月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯（世界測地系）	東経（世界測地系）	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
滝ノ沢遺跡（たきのさわいせき）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）	20217	787	36°12′09″	138°27′45″	2013.09.30～2013.11.15	7,790	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
寺久保遺跡（てらくぼいせき）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		603	36°11′54″	138°27′59″	2012.07.17～2012.11.22 2013.11.26～2013.12.17 2014.06.30～2014.07.22	10,000 5,070 2,970	
庚申塚（こうしんづか）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		796	36°11′41″	138°28′03″	2012.07.17～2012.11.22	200	
台ヶ坂遺跡（だいがさかいせき）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		605	36°11′43″	138°28′03″	2008.08.25～2008.09.01	6,040	
上滝・中滝・下滝遺跡（かみたき・なかたき・しもたきいせき）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		620	36°11′32″	138°28′07″	2008.07.07～2008.07.15 2010.04.05～2010.11.17	10,540 6,100	
和田遺跡（わだいせき）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		616	36°11′19″	138°28′08″	2010.10.20～2010.11.30 2011.04.05～2011.09.30	2,500 10,000	
和田１号塚（わだいちごうづか）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		791	36°11′16″	138°28′08″			
滝遺跡（たきいせき）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		615	36°11′19″	138°28′12″	2011.05.19～2011.08.17	710	
家浦遺跡（やうらいせき）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		614	36°11′13″	138°28′12″	2008.07.28～2008.08.07 2010.07.20～2010.11.30	10,620 5,600	
田島塚（たじまづか）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		792	36°10′46″	138°28′17″	2008.06.02～2008.10.02	500	
水堀塚（みずほりづか）	長野県佐久市臼田（ながのけんさくしうすだ）		793	36°10′38″	138°28′20″	2008.06.02～2008.10.02	500	

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
滝ノ沢遺跡	散布地	縄文、中世、近世	なし	縄文後期土器・石器、中・近世陶磁器	
寺久保遺跡	集落跡	古代	古代の竪穴建物跡１	古代黒色土器・土師器・須恵器（四耳壺）・灰釉陶器、金属製品	
庚申塚	塚	近世以降	塚	近・現代陶磁器	
台ヶ坂遺跡	散布地	縄文	なし	縄文後期土器・石器	
上滝・中滝・下滝遺跡	集落跡	縄文、古墳古代	縄文・古墳・古代の竪穴建物跡 21	縄文早～中期土器・石器、古墳前期土器（Ｓ字甕）、古代黒色土器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器（香炉）・鉄鏃・鉄滓	ワラ灰が残り、焼成時の亀裂が入った須恵器坏が出土
和田遺跡	集落跡	弥生～古墳前期	弥生後期後葉～古墳前期前葉の竪穴建物跡４	弥生後期～古墳前期土器、種実圧痕土器	
和田１号塚	塚	近世以降	塚	灯明皿、寛永通寶、紹聖元寶、管玉	
滝遺跡	集落跡	古墳前期、古代	古墳前期の竪穴建物跡３、奈良時代の竪穴建物跡１	古墳前期土器、古代黒色土器・土師器（武蔵甕など）・須恵器、砥石	北隣の和田遺跡より一段階新しい集落跡
家浦遺跡	散布地	古代	なし	古代土器	
田島塚	塚	近世以降	塚	縄文石器、古代土器、近世陶磁器、文久永宝、鉄鏃	
水堀塚	塚	中世以降	塚	熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶	

令和元（2019）年９月30日　発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　124

滝ノ沢遺跡　寺久保遺跡　庚申塚　台ヶ坂遺跡
上滝・中滝・下滝遺跡　和田遺跡　和田１号塚
滝遺跡　家浦遺跡　田島塚　水堀塚

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書９

－佐久市内９－

発行者　国土交通省　関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel　026-293-5926　Fax　026-293-8157
E-Mail　info@naganomaibun.or.jp
印刷者　大日本法令印刷株式会社
〒380-0935　長野市中御所３-６-25
Tel　026-228-1946　Fax　026-226-2649